

農村経済活性化プロジェクト研究資料 第2号

住民意思に基づく農村整備 —オランダの事例—

平成14年3月

農林水産政策研究所

はじめに

本報告書は、平成 11 年度から 4 年間の計画で始められた、プロジェクト研究「農村経済活性化のための地域資源の活用に関する総合研究」の一環として、アントン・ストルテルデル、ヘラルト・モッレマン共著『内部通り抜け部分と外部環状部分： ジュヴェント村の教会通いの道』（Binnendoor & Buitendom : Kerkepaden Zieuwent、KNNV 出版、1998 年）を邦訳したものである。

当プロジェクト研究は、農林水産技術会議事務局が所管する連携開発研究「中山間地域における地域資源の活用に関する総合研究」（平成 9～14 年度）を平成 11 年度に組み替えている。当初、主査を農業研究センター所長とし、農業総合研究所等、農林水産省の 9 試験研究機関および委託先の大学が、3 つの系で構成される 30 の小課題を分担した。

平成 13 年度からは、試験研究機関の機構改革により、農林水産政策研究所および独立行政法人・農業工学研究所、同・農業技術研究機構、同・森林総合研究所、同・水産総合研究センターの 5 研究機関（他に委託 1 大学）が参加する交付金プロジェクト研究となった。

農林水産政策研究所（旧農業総合研究所）は、3 つの中課題において 5 つの小課題を担当するが、今回は、Ⅱ－3－（3）中課題「農村政策に関する国際比較と地域活性化方策の解明」の研究成果をプロジェクト研究資料として刊行することとした。

原著は、ドイツ国境に近いオランダの一農村、ジュヴェント村での 5 年余りの出来事を描いたものである。機械化、圃場整備による景観の単調化、農民の高齢化、共同精神の喪失という先進国の農村に共通して見られる現象の中で、子供が交通事故の危険にさらされる。そのような中で、昔、教会や学校に歩いて通った道をおぼえている中高年の人々が、孫たちのためにケルケパーデン（教会通いの道）の復元を決意し、立ち上がった。自治体や国の支援はあったものの、農地の所有権や通行権をめぐる葛藤もあり、道のりは必ずしもなだらかではなかった。一農村の事例ではあるが、生活感にあふれる描写を通じて、これからの都市と農村のあり方、住民の意思に基づく農村整備や農村振興施策を考える上で参考にしていただければ幸いである。

本報告書の作成に当たっては、評価・食料政策部、市田（岩田）知子食料消費研究室長が資料の収集および原著者との連絡を行った。

日本語訳書の刊行を快諾された原著者のストルテルデル氏および KNNV 出版、また、オランダ語から日本語への翻訳を担当していただいた（株）日本リングサービスに対し、厚く謝意を表する。なお、編集の都合上、原著の写真を大幅に割愛せざるをえなかったことをおことわりする。

平成 14 年 3 月

農林水産政策研究所

内部通り抜け部分と外部環状部分：

ジュヴェント村の教会通いの道

アントン・ストルテルデル／ヘラルト・モッレマン 共著

KNNV 野外生物学協会 出版

この書物の売り上げ金は、その全額がこのケルケパーデンの保守に当てられることになっている。

この本を、この地の風景の美しさを教えてくれた我々の父、フランス・ストルテルデルとアントーン・モッレマンに捧げる。

目 次

要旨

はしがき

序文

第1章 財団法人 ケルケパーデン協会	1
1. はじめに	1
2. 要約	2
3. 協会の設立	3
4. テスト・プロジェクト	3
5. みんなでハーグへ	4
6. 地役権	6
7. 遊歩道の簡単な説明	8
第2章 以前はこうだった	12
1. シンヴェーデ：沼地から出発	12
2. パーペンディークスケ	13
3. 大きな変化	15
4. 歴史から得た知識の活用	17
第3章 農民との協議	19
1. 交渉でのアプローチ	19
2. 農民の抵抗	21
3. 話し合いの実例	24
第4章 みんな、力をあわせて.....	35
1. ボランティアたち	35
2. 全体の指揮	37
3. 工事の請負	38
第5章 企画と実施	40
1. 内部通り抜け部分(1994～1996 年)	40
2. 外部環状部分(1997 年)	40
3. スホールパット／ロンデールパット(1994 年)	40

4. コッテ・フォアーレ／スプレんケルデルパット(1995 年)	42
5. ハーゼンパット (1996 年)	44
6. メッラスディーク	48
7. オッテルパット／ビンヌンカムプ(1997 年)	48
8. 技術的仕様	50
9. 芸術作品	51
10. 標識とロゴ	53
第 6 章 管理と保守	55
1. 区間リーダー	55
2. ケルケパーデン管理基金	55
3. 刈り取りとごみの搬出	56
4. 多くの人手	57
第 7 章 パブリシティ	58
1. 最初のプレゼンテーション	58
2. 二次的な効果と反応	58
3. 周囲への影響	60
第 8 章 評価	64
1. 政治的な面	64
2. 社会的な面	65
3. 土地所有者との話し合い	67
4. 地役権の規制	68
5. 自治体との協力	70
6. 費用	74
第 9 章 主たる事柄	76

〔要 旨〕

ジウヴェントの村の周囲に、延べ 11 km におよぶ散策およびサイクリングのための小径、すなわち、遊歩道が再整備された。以前にあった散策やサイクリングのための小径は、1960 年代の土地整備により、その大部分が消えてしまっていた。今回、LNV（農業・自然保護・漁業）省、州政府、地方自治体、レクリエーション局、地元の組織、企業などの支援のもと、ジウヴェント村のボランティアの人々の協力を得て、健康のためのレクリエーションに新しい可能性を提供し、特に子供たちや高齢者たちにも安全なルートが建設された。このプロジェクトを遂行するに当たっては、単に遊歩道を建設するだけではなく、自然の持つ価値を高めて、以前の美しい風景を再現することに努力した。例えば、あちこちに池や小川を設置し、数千本の木を植え、橋を架け、構造物などを設置した。

訳註：Kerkepaden: 英語では church paths、単数は kerkepad ケルケパット、この書物では「散策／サイクリングのための道路」、すなわち、「遊歩道」を指しているが、元来は「村人が日曜ごとに教会に通うための小径」のこと。なお、この書物では、「ケルケパーデン」という語は「サイクリング・ロードを含めた遊歩道」と「サイクリング・ロードを含まない遊歩道」のふたつの意味で使われている。また、サイクリング・ロード (fietspaden、cycling roads) という語が独立して用いられていることもあり、その場合は「遊歩道ではない自転車専用路」を意味している。

はしがき

スホールパット（今回のプロジェクトで最初に作られたケルケパット）が開通したのは1994年10月のことだが、その直後の二、三週間は秋日和が続き、そのことを新聞で読んだり、噂を聞いて、この村やその周辺地区から多くの人が見学に繰り出してきた。「あの日は日曜だったが、まるで教会の礼拝が終わった時のように、沢山の人がぞろぞろ通って行ったよ」と、この道のすぐ傍に住んでいて、遊歩道建設にもボランティアとして働いたユープ・パーペン氏という。基礎学校（訳註：日本の小学校＋中学校に相当）も、新しい遊歩道ができたとの知らせで、休校状態になった。どのクラスの子供も担任の教師に引率されて、1500mばかり離れた小川までピクニックに出かけた。そして、教師たちは子供たちにこの遊歩道の通行の仕方および他人の土地を行儀よく通行することの大切さを教えた。この遊歩道ができたので、親たちも安心で、子供たちを安全に学校に行き来させられる。早速、何十人もの生徒たちの毎日の通学路になった。

序 文

ケルケパーデン・ジウヴェント協会の最初の年次報告に記載されている写真を一部紹介しておくが、それを見てもわかるように、1994年10月7日に最初の遊歩道が開通した直後の地元の熱狂ぶりは大変なものだった。このプロジェクトの話が最初に出た時から、地元は驚くほどの関心を示し、工事の進捗と共にその協力ぶりは見事なもので、このプロジェクトを推進する大きな力となった。地元からは35名のボランティアが協力を名乗り、すべての面で大いに貢献してくれた。我々の生活環境を改善しようとする運動が見事に成功したのも、まったくそのお蔭である。

これは、ケルケパーデン・ジウヴェント協会が延べ5年の歳月をかけてアハテルフーク（achterhoek）地方の中央部にあるジウヴェント村とその周辺の舗装されていない道（paths）を復活させ、或いは新しい遊歩道を建設した地域開発プロジェクトの報告書である。このプロジェクトが誕生したのは、国（農業・自然保護・漁業省）、ヘルデルラント州（Provincie Gelderland、日本の県に相当）、リヒテンフォールデ自治体（Gemeente Lichten-voorde、日本の市に相当）、東ヘルデルラント・レクリエーション局（het Recreatie-schap Oost-Gelderland）の協力によるものである。協会は、ジウヴェント村を中心として延べ約10kmの遊歩道／サイクリング・ロードを設置することを目的として、1994年に設置された。その目的は見事に達成された。そして、我々は1998年夏の完成に際してこのプロジェクトの経過を振り返ってみることにした。

このプロジェクトの進行中、協会の理事会と助成金の提供者（国、地方自治体、レクリエーション団体）の間で定期的（年に2回）に検討会が開かれた。このプロジェクトが大成功を収めたのは、すべての関係機関がこのプロジェクトの目的をよく理解し、協力してくれたためである。また、融資の約束を最終的に実行に移し、プロジェクトの進行中に発生する色々な問題を互いに協力して解決するためにも、理事会のメンバー、国、地方自治体およびその他の関係機関の代表の間で頻繁な協議が行われた。すなわち、リヒテンフォールデ自治体の代表ステーンチェス・テイディンク氏、ヘルデルラント州の代表エックハルト氏とエンクラール氏、国（農業・自然保護・漁業省）の代表のベューセコム・トゥロンプ氏、ファン・デン・ベルフ氏、ケイケン氏、および東ヘルデルラント・レクリエーション局の代表ボーデ氏たちの建設的なアドバイスと協力に我々は心から感謝する次第である。また、このプロジェクトを発足させるために国会で色々と尽力していただいた下院議員のメヒトリート氏（息子の方）、法的手続きの点でクリエイティブな助言をしていただいた公証人のステーフェリンク氏、農業・自然保護・漁業省との折衝でファイナンス面で我々を助けていただいた公認会計士のストルテルデル氏（GIBO グループ）にも感謝する。その他にも、このプロジェクトに終始協力していただいた土地所有者の方々、アイセルラント・バークセ・ベーク水利組合（現在のライン・アイセル河水利組合）、地元の各企業、特にWOPA社およびハルディック会計士の熱心な支援にも感謝する。最後に、このプロジェクトを遂行するために我々と共に尽力して下さったすべてのボランティアの方々および

そのリーダーのハリー／ヘッティ・ボッケル夫妻にも心からの感謝を捧げる。

この本の題名“Binnendoor & Buitenom”（ビンネンドール・エン・ボイテノム、中を通り抜け、外側をぐるりと廻って）は、農業・自然保護・漁業省のレクリエーション協会が1996年に刊行したパンフレット「模範プロジェクト 自然とレクリエーション」のサブタイトルを借用したものである。このふたつの概念“binnendoor”と“buitenom”は、ジウヴェント村を取り巻く遊歩道ネットワークの構造だけではなく、土地所有者たちとの協議方法、官公庁や企業との接触の仕方も表していることを申し添えておく。

於ジウヴェント、1998年夏

第1章 財団法人 ケルケパーデン協会

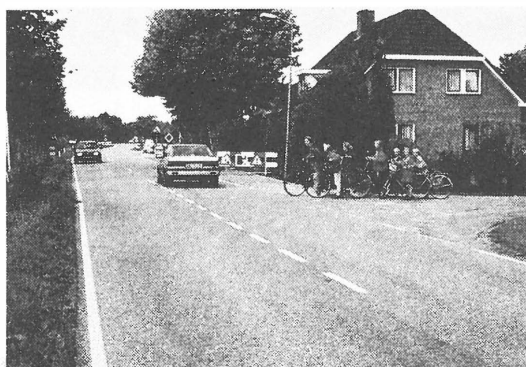
土地と所有権、我が国では、このふたつは過去二、三百年のうちに鋭く対立する概念となってしまった。オランダのように人口稠密で、すべての土地が隅々まで集約的に利用されている国では、地域開発計画は土地所有権を巡る激しい争いを各地で巻き起こしている。1970年代にジウヴェント村で実施された土地再配分（交換分合）もその例に漏れず、多くの利点をもたらしたのは事実であるが、その反面、この村に住む多くの家族や村人の間に余計な紛争を巻き起こした。その後、ジウヴェント村周辺では私有地を通過するケルケパーデンがあちらこちらに設置され、復活されたが、それがこの村ではそれほどの摩擦を呼ばず、見事に成功したのはどういうわけだろう。少し自慢話になるが、その点について下記に説明しておく。慥かに、ジウヴェント村の場合は、住民や関係機関が大いに協力してくれたのも成功をもたらした大きな原動力であったが、その他にも種々の条件に恵まれていたことが幸いしたことも忘れてはならない。

1. はじめに

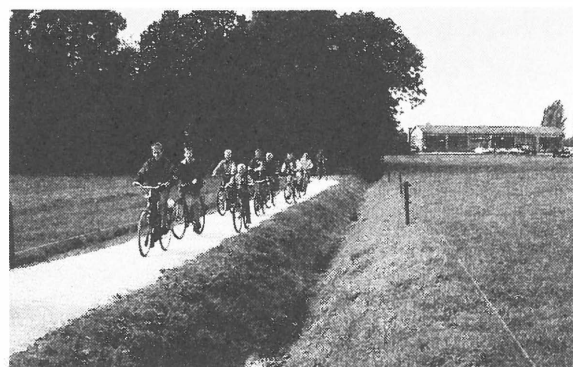
ジウヴェント村周辺の交通インフラストラクチャーが整地計画（ジウヴェント・ハッレフェルト周辺の土地再分配プロジェクト）の一環として再編成されたのは約30年昔のことだった。その際、昔からあった未舗装の道路や小径の大部分が消滅した。目の細かい道路網は舗装道路を主体とする目の荒いものに置換された。土地再分配の前に存在した道路や小径の多くは速度の遅い交通を対象とするものであり、砂地の道は冬になると泥濘や深い轍跡のために通行しにくい状態になった。それでも、当時の交通はゆっくりとしたものだった。交通の主体は馬と人で、農民は馬車に付き添って歩いていたが、そのうちに砂混じりの道の側道を走る自転車がその数を増して行った。この土地再分配を契機として、道路はもっと速度の早い交通、すなわち自動車の往来を中心とするものに次々と変えられて行った。この地区を貫通する道路の幅は広げられ、通行する自動車の数も急速に増えた。人間の通行よりも通り抜ける自動車の速度と走行の便利さが優先されるようになり、道路を利用する人々はより多くの危険に曝されるようになった。自転車利用者や散策者たち、特に子供たちや高齢者にとっては、ジウヴェント村地区を貫通する道路を通ることはきわめて危険になった。通学の子供たちは毎日4回（訳註：昼食は自宅で摂る）も貫通道路を徒歩や自転車で横切る交差点は特に危険な場所とされた。

もうひとつの問題点は、この20年ほどの間に生活に余裕ができて、余暇を楽しむ人々が増えたことだった。この村の内外を、散歩、ジョギング、サイクリングなどの野外運動で往来する人が非常に多くなった。また、自然や風景の持つ大切さが重視されるようになり、農業の利害と自然の保全は対立しなくなった。ワーヘニンゲン農業大学の田園社会学研究グループの調査によると、今日のオランダの農業経営者の80%はクリーンな環境、美しい風景、人間の生活に適した平地を保つことに責任を負わねばならぬと考えていることが判明した（1997年9月30日付けの国民新聞の記事）。しかし、ジウヴェントでも周辺の田舎

風な景観を保存すべきだという声が次第に高まってきたが、他の多くの地域の場合と同じように、その背後には、自動車交通の猛烈な攻撃を受けることなく、村の外に出るための安全な道がますます少なくなるという村人たちの切実な訴えがあったのである。それまでも、村人は多くの小径や村内の道が次々と消えてゆく悲しみを周囲に定期的に懸命に訴えていた。



写真左：村の中心部を離れた場所の光景、学童たちにとって危険な状態である。



写真右：スホールパット（通学路）を通して下校中の子供たち。

2. 要 約

当初、ジウヴェント村の周囲の道路・小径のネットワークはサイクリストや散策者たちの安全性の要求に十分に応えるものではなかった。また、村内の道路ネットワークの柵目も余りに大きすぎた。村内を自転車や徒歩で移動するのはきわめて不便であった。村の外での交通は危険であり、レクリエーションの可能性を大きく制限する結果を招いていた。

地域開発計画に関連して住民を対象として実施したアンケート調査「ジウヴェントの利益」では、村の重要点を安全に結合するために、これまでに消滅した小径を復活させるべきだとの意見の強いことが明確になった。さらに、レクリエーションの可能性を拡大するために遊歩道をもっと多く設置すべきだとの意見も強かった。これらの意見は、1993年1月4日に開催された行政機関の会合で本格的な討議の対象となった。そのような連絡道を設置する地点を詳しく検討した結果、15の区間に延べ距離約10kmの遊歩道ネットワークを設置することに決定した。

提案された区間は地図にも記載されたが、その際、下記の点に留意された。

- 提案された遊歩道は、文化的、歴史的な見地から、以前に存在したケルケパットが通っていた区間に優先的に設置する。但し、歴史的な価値は、実際の区間選定に当たっては、ガイドラインとして尊重されるが、絶対視すべきではない。
- 農地を横断するように道を強引に設定するのは実際的ではないので、できるだけ敷地や農地の外郭や森や林の縁に沿うように設定する。そのような道路用地は農地として

は日の当たる場所よりも価値が低い、新しく設定する遊歩道としては非常に魅力的である。

- 道路に面している家の様子は通行人の目に曝されやすいので、そのプライバシーが尊重されるようにしなければならない。そのため、既存の家屋のすぐ傍に新しい遊歩道は設置しない。
- 遊歩道の品質は適切なものにし、サイクリストと散策者たちだけが利用できるようにする（つまり、自動車やモーターバイクは通れないようにしなければならない）。
- 遊歩道の幅員は約 1.5m とし、両端に約 25cm の路肩を設定して、対向する自転車が互いに余裕をもってすれ違うことができるようにする。取得する用地の幅は、そのためにも 2m 以上とする。
- 袋小路の奥にある農家群は村の中心部と遊歩道で連絡するようにする。
- 交通をより安全にするのに必要な区間は優先的に扱う。

3. 協会の設立

上記のイニシアティブに基づき、1994 年の初めに「財団法人 ケルケパーデン・ジウヴェント協会」が設立された。この協会の活動目的は、ジウヴェント村およびその周囲に遊歩道／サイクリング・ロードの設置と復活を促進することにあった。そして、道路用地の取得、道路の設置と管理については、協会が責任を負うことになった。また、このプロジェクトの遂行のために、ジウヴェント村の全住民が支援する小規模ではあるが、積極的に活動する組織が設置された。この協会には下記の地元団体が参加した。すべての団体の統率は「ジウヴェントの利益」(Het Zieuwents Belang) (協会の理事長はヨス・コルクマン氏、副理事長はフランス・ドムホフ氏) が当たることになり、教会委員会 (代表はヘンク・テン・ダム氏)、健康センター (代表は健康センターの事務長／出納係ヘラルト・モッレマン氏)、考古学協会 (代表はこのプロジェクトのコーディネータのアントン・ストルテルデル氏) なども協会の構成組織になった。地元の人々に対しては、1993 年 3 月に開催された「ジウヴェントの利益」の年次総会で協会を設置する旨が発表された。地元の反応はおおむね非常によかった。その後、間もなく、パースポップ協会、ジウヴェント健康センター、考古学協会、それに「ジウヴェントの利益」などの地元の組織が資金援助をすることを表明した。

とりわけ、リヒテンフォールデ自治体の議員たちはこのプロジェクトに対して諸手をあげて賛成し、自治体として全面的に協力することを約束した。また、自治体から一定の資金援助をすることを決議した。

4. テスト・プロジェクト

閉鎖的な農村を遊歩道／サイクリング・ロードを設置することにより開放することは、

何もこの地方だけに必要なことではなかった。この考えは色々な出版物で紹介され、他の地方にも普及したが、実際にそれが具体化することはきわめて稀なことだった。国会でも、キリスト教民主党（CDA）の下院議員のメヒティルト・ドゥ・ヨング女史などは、農業地域へのアクセスをもっと容易にして、農村を開放的な存在にする必要のあることを主張していた。1993年6月7日には下院において覚書「レクリエーションのための選択」について審議が行われた。

さらに、国会では、1972年から1986年の間にオランダの農村地帯で合計7500kmの未舗装の道が消滅したという事実も報告された。そして、美しい自然を散策やサイクリングのために開放すべきであるとの方針が打ち出された。「オーフスト」（収穫）紙の1993年6月11日付けの記事には、当時のLNV（農業・自然保護・漁業）省の事務次官のハボル氏の言葉として、政府が「農民の小径」（farmers' paths）を復活させる経験を蓄積するために、いくつかの実験的なプロジェクトを実施することを考えている旨が報じられた。それは、農民と都市住民の交流を促進するのに役立たせるためであった。

ケルケパーデン・ジウヴェント協会（当時はまだ設立準備中）は、この記事に素早い反応を見せ、1993年8月にメヒティルト・ドゥ・ヨング議員に連絡し、そのような実験プロジェクトの作成に協力したい旨を告げた。その提案には、協会がそのプロジェクトの実行組織を作り、地元の住民と協議の上、計画の作成と実施を担当し、用地や権利の取得、道路の建設と管理に当たると同時に、資金援助の責任を国に負わせることが盛り込まれていた。協会としては、これは絶好の機会なので、短期間のうちにそのアイデアをできるだけ具体化しておく必要があった。また、政府としても、それで得られる知識やノウハウを農村振興政策に役立たせることができる。すなわち、社会的認容（social acceptance）、法的規制、建設費用、地元民も参加する管理組織などの分野に関する経験を蓄積できるわけである。そして、その間、公証人（訳註：オランダでは司法書士も兼ねている）のステーフリンク氏（フルーンロー在住）は我々に地役権関係について調査をしておくように言われた。

5. みんなでハーグへ

ドゥ・ヨング議員は、我々のイニシアティブに強い関心を示し、この件については協会の理事たちとハーグで話し合いたいと言ってきた。1993年8月30日に我々は下院の議員会館でドゥ・ヨング女史と初めて会った。女史は我々の取り組み方に完全に同意し、このプロジェクトに関係して用地を提供する立場にある土地所有者との交渉の法的手続きを中心とする具体的な分野での経験を積むことの重要性を指摘した。その後、国にとっても、このプロジェクトに協力し、関係法規を実際に適用してみることが実験的な意味で非常に勉強になることが判明した。

ドゥ・ヨング女史は、国が参加するには、ヘルデルラント州とリヒテンフォールデ自治体の両方がこのプロジェクトに協力し、資金援助することが前提であると述べた。

ハーグでの会合を終えるに当たって、ドゥ・ヨング女史は、このプロジェクトに関連してその他にも地元の住民たちが何か特別に望んでいることはないかと訊いてきた。「その点については、戻ってから一度調べてみましょう」というのが、こんな質問をまったく予期していなかったフランス・ドムホフ理事の答えだった。

同じ週にヘルデルラント州とも折衝が行われ、リヒテンフォールデ自治体とも二回目の交渉が行われた。ヘルデルラント州当局もこのプロジェクトは大歓迎で、当時の州知事で、現在はウィンテルスウェイク市長のスティヒテル氏が資金援助の手続きを早速取り、国との折衝も積極的に行うことを約束してくれた。そして、州と自治体の両方が、この計画は（この地方の）レクリエーション局も関係することなので、その参加を求めるべきであると強調した。そして、多分、レクリエーション局としても喜んで資金援助をしてくれるだろうと述べた。

その間、ドゥ・ヨング女史は、このプロジェクトについてハボル氏（農業・自然保護・漁業省の当時の事務次官）と話し合い、我々の提案を記載した文書を手渡してくれた。ハボル氏は1993年11月19日付けの書簡に、国としてもジウヴェント村の周辺地区を散策やサイクリングに適した状態にするプロジェクトを歓迎し、その件について関係の州や自治体と地元民が協力のイニシアティブを取ることを期待していると述べている（第8章を参照のこと）。

1993年12月の末、上記の州、自治体およびレクリエーション局の代表とケルケパーデン・ジウヴェント協会の理事たちが会って、協会が作成したプロジェクトへの資金援助の方法について討議したが、その要点を下記に簡単に記しておく。

- ① 具体的な計画に基づき延べ距離約10kmの遊歩道を5年（1994年～1998年）かけてジウヴェント村およびその周辺に建設するが、その施工プログラムを作成する。
- ② 協会は、毎年、リヒテンフォールデ自治体と協議しながら、約2kmの遊歩道を建設するが、この点については契約を正式に作成する。
- ③ 初年度から、協会は建設する遊歩道の保守／管理に当たる特定のボランティア・グループから成る組織を作る。
- ④ 協会は、毎年、評価報告の形で活動報告を作成し、それに資金の用途と建設区間の施工状況とその変更について詳しく記載する。
- ⑤ 5年後にプロジェクト全体をまとめた総合報告書の形でこのプロジェクトの最終評価を実施し、そのなかで社会、法律、レクリエーション、農業、道路建設技術および交通管理技術の面について詳しく事後検討をする。これは、後に書物（この書物）の形で刊行する。

このプロジェクトの総工費の予算額は475,000ギルダーである（訳註：1ギルダーは50円弱）。年間費用（毎年2,000メートルの遊歩道の建設に相当）はこの金額の5分の1とする。

この予算案には、協会の理事に対する報酬はまったく含まれていない。また、道路の建設と保守についても、各地区のボランティアの労働に対する報酬は含まれていない。これ

らは、現地の伝統に従って、すべて無料とする。

このプロジェクトには色々な機関が協力の申し出をしてきたので、ジウヴェント村周辺へのピクニックも兼ねて集会を開き、そこで具体的に取り決めるようにした。そこで資金分担の割合について話し合われた。そして、国は最低 25%、最高 50%を負担すること、ヘルデルラント州は 30%、リヒテンフォールデ自治体は 10%、レクリエーション局も同じく 10%を負担することが提案された。国は、水利組合が管理する土地（すなわち、草刈り場）が人々のレクリエーションに利用される可能性が高いので、新しい助成規則に基づき水利組合も資金分担すべきであると指摘した。そこで、すべての機関が互いに話し合っ、協会がその報告書を作成することになった。その場合、すべての機関が参加することが資金援助の前提とされた。

その翌日、協会はこの件についてアイセルラント・バークセ・ベーク水利組合と話し合った。組合の理事会は、原則として資金援助に参加すること、但し、遊歩道の建設と保守の費用を負担することについては、組合としてすぐに決められないと回答した。しかし、このプロジェクトによる遊歩道が建設されると、その保守費用が増加し、それを協会が負担せねばならぬことは明らかである。その後、関係機関と何回も協議が重ねられた末、1994 年春には次々と資金援助の契約が協会との間に締結された。リヒテンフォールデ自治体との契約が 6 月 2 日に締結されたが、それが他の機関にも刺激を与えた。

6. 地役権

ジウヴェントの既存のケルケパーデンとそれに付属するグリーン・エレメント（自然・風景の構成要素）は、約 30 名の村人（その大部分は農業経営者）の所有地、および聖ヨゼフ学校、村の教会、リヒテンフォールデ自治体、森林行政庁、レクリエーション局、水利組合の所有地に存在していた。しかし、それらの土地は協会が購入したものではなく、いわゆる地役権を設定したものだ。その内容とそれによる利益について、下記に簡単に説明しておく（第 8 章も参照のこと）。

地役権とは不動産に設定される一種の物権で、承役地は要役地の便益のために利用されることを認める義務を負う。例えば、承役地を通行する権利を認めることで、この場合は、具体的には通行路の設定またはその他の限定的な土地開放ということになる。これは、物権に基づく限定的な義務である。つまり、地役権は要役地のために承役地に設定された限定的な財産権である。従って、このプロジェクトの場合は、権利者（ケルケパーデン・ジウヴェント協会）が、承役地にいくつかの矩形部分を利用する権利を行使することが必要になる。協会は、バークセ・ベーク水利組合の持つ用地を要役地として約 300 m² 購入した。そして、地役権を（公正証書により）設定した際、協会は要役地の所有者として承役地の所有者（小径が設定される土地の所有者、ほとんどが農民）に対して一定の補償（retribution）を支払うことが定められた。ジウヴェントの場合は、通行路として利用するか、グリーン・エレメントとして利用するかに関係なく、1 m² 当たり 5 ギルダーと定め

られた。地役権は、要役地の所有者と承役地の所有者の間に受け継がれてゆく。承役地の所有者は、要役地の便益のために容認する義務または不作為の義務を負う。

最近では、1992年に地役権に関する法律の改正が行われたが、それにより要役地と承役地が互いに隣接していなくても地役権が設定できるようになった。つまり、隣接要件が除去されたわけである。このことは、要役地に必要とされる場合は、原則としてどの土地にも（オランダの国外の土地でも）地役権を設定できるようになったことを意味する。

遊歩道を設置する場合に地役権を設定することは、下記のごとき有利な点がある。

- 農村地帯に道路を設置すると、しばしば多くの土地所有者が大きな影響を被ることになる。第一に、土地を取得することは、それらの土地が徹底的に変更されることを意味する。例えば、10の土地を通る1kmの長さの道路を取得するには、土地の造成と登記に数千ギルダーの費用がかかることになる。しかし、地役権を設定するだけならば、これらの費用の大部分を節約することができる。
- 抵当権が設定されている土地を販売するには、売買される面積は小さくても、抵当登記の内容を変更しなければならず、そのための手続きと費用は馬鹿にできない。土地に地役権を設定するだけならば、それらが節約できる。
- ほとんどの農地には、搾乳と堆肥に関する用益権が設定されている。農地に地役権を設定するだけならば、それらはそのままにしておけるが、農地の売買となるとその点の変更が面倒なことになる。
- 最後に地役権を設定するだけならば、土地所有者に与える心理的な影響が小さくて済む。農地は一度売買されると元に戻すことができず、農民はその売買に対して心理的に大きな抵抗感を覚えるが、通行のために地役権を設定するだけならばそういうことはなく、元に戻すことも原則として期待できる。要役地の所有者が当該の土地を通行に利用する必要がなくなれば、承役地の所有者はそれを取り消して、再び元の状態に戻すことができる。すなわち、地役権の登記を取り消して、当初の目的に利用できるという安心感が得られる。



いくつかのB道路より結合し、村の外に出て行くための4本の道路を備えた遊歩道構造

7. 遊歩道の簡単な説明

遊歩道（ケルケパーデン）の位置を上図に示しておく。これらの遊歩道は、延べ距離 11 km で、そのうち、1998 年に復活されたロッラスパット（距離 1km）は既設の遊歩道だった。その他は新しく設置された遊歩道である。全体として見ると、貫通道路は4本のフォーク状の道を形成しており、周囲を何本かの結合路が囲んでいる。遊歩道については、建設された順に下記に説明する。

スホールパット（Schoolpad、通学路）／ロンデールパット（Rondeelpad）

1994 年に建設

スホールパットはリュールローセ・ブルーク（Ruurlöse Broek）と村の中心部にある基礎学校を結ぶ道路である。この道は、北からまずバークセ・ベーク（Baakse Beek、バークの小川）を越え、次にいくつかの池を埋め立てて造成された緑地であるレーフン・ケンニングスストール（Leeg'n Konningsstool）も越えて村の中心に入ってきている。スホールパットはこの緑地で分岐し、そこからロンデールパットが伸びている。ロンデールパットは林のある土手に沿ってオーク（訳註：oak は一般には樅の木とされているが、厳密にはカシ属・シイ属の総称）の林の中に入ってゆく。以前、この林にはロンデール家の屋敷があったので、その名残りが窺える。この林を通過する遊歩道は昔の村の道路網の一部で、それをこのプロジェクトでもそのまま活用することになった。また、昔、農民たちが砂を採取するために掘った穴がこの小径に沿って点在している。穴は小さく、その直径はせいぜい2、3メートルにすぎない。

コッテ・フォアーレ（Kotte Voare）／スプレンケルデルパット（Sprenkelderpad）

1995 年に建設

コッテ・フォアーレ道は、住宅を出発点として、ワーレンフリート・ストラート（Waren-friedstraat、straat=street）から木の小さな橋を経由して教会に達しており、その支線はブールスヴェヒ（Boersweg、weg=way）とスホッペンヴェヒ（Schoppenweg）に至っている。この遊歩道の最初の部分、すなわち、教会までの数百メートルの部分は、1993年に建設されたものである。この部分の建設を通じて、我々は土地の所有者との交渉の仕方および道路建設技術についてノウハウを得ることができたが、その他にも、地元民がこの道の持つ便利さを分かってくれて、プロジェクトの趣旨を一層理解してくれるようになった。ブールスヴェヒには、林を通り抜ける小径を付けて、その途中にボランティアたちが古い石の十字架を設置してくれた。また、この遊歩道は舗装された細道を経由してスプレンケルデルパットに結びついており、それを通り抜けるとマリーエンフェルデ（Marienvelde）に出る。

ハーゼンパット（Hazenpad）／メッラスディーク（Möllasdiek）

1996 年建設

ハーゼンパットは村の新しい一画「ドゥ・ステーヘ」（De Steege）から出発して、フォークの形で南方に伸びている。この遊歩道は村を貫通し、ハッレフェルトとリヒテンフォールデと繋がっている。ハーゼンパットの分岐点には大きな水溜まりが掘られており、ベンチとテーブルが設置されている。この遊歩道は完全な並木道になっている。

以前、メッラスディークは農家の農作業車のための農道として使用されていた。調査の結果、この道は農道として使用すると共に、散策や自転車を走らせるための遊歩道としても利用できる十分なスペースのあることが判明した。この遊歩道に沿って自転車専用路を

設置すると、農作物の運搬車両やトラクターも通すことが可能である。

風景に捧げる頌歌

遠い昔、ずっと以前のこと、町から人々が移り住んでくる前、
村人がテレビを楽しむようになる前、まだ、ずっと遠くの景色が見えたころ、
朝早く、静けさのなかに小鳥たちの囀りが聞こえ、野原には矢車草がいっぱい咲き、
草は露に濡れ、人々はまだ眠りから醒めない。
やがて、朝日が差し込み、天地はゆっくりと目覚め、日の光にやさしく愛撫され、
麦の穂も日の光に温められ、おんどりは鳴き、時を告げる。
耳は捉える
神の声を、神の言葉を信じる者はそれが聞こえる。
あちこちから、村人が集まってくる。
木靴を履き、帽子を被り、上着を引っ掛け、葉巻を銜え、教会の礼拝を終えた時のよう
に畏まって、広場に集まり、おしゃべりを始める、
あれや、これやと色々なことを、特にすっかり変わってしまった村の様子を、
押し寄せる時の流れにより一変した。
みんなも見るとおりに、政府や州により
ゆっくりと、或いは急速にすべては変わった。
法令やら、決定やらで、昔の自然の小径はみんな舗装された。
アスファルトで固められ、昔の野道のあったところは野原になり、
農地に変わり、交換分合はその目的を達した。
昔、教会への行き来に通った小径はなくなり、村に入る古い道は鉄条網で遮られ、
モータリゼーションにより消え去った。
教会の存在も忘れられ、神は時代に則しないものとされていたが、
今、やっと戻ってきた、神は忘れられていなかったのだ。
何人かの村人は熱心に計画を作り始めた、小径を直し、新しく作ることを。
今、この村に起きているのは、みんなも知っているように、
蛙や水鳥のいる池や沼を作り、美しい林をあちこちに作り、
村の自然の中に素敵な小径を沢山作ること、安らぎに満ちた風景を再生させること。
あの昔の思い出を蘇らせよう、みんながのんびりと幸せに暮らした頃の思い出を。

ヤン・クロイブ、1997 年

オッテルパット (Otterpad) / ビンヌンカムプ (Binn'kamp)

1997 年建設

オッテルパットとビンヌンカムプは、この村を貫通する遊歩道の末端を互いに結合する
村の周囲を巡る環状ルートの一部を形成している。つまり、遊歩道はこの環状ルートと接
する箇所で閉ざされている。オッテルパットは最も長い結合路で、スホールパットとロン
デールパットと結合している。この遊歩道の大部分はバークセ・ベークに沿って走り、一
部は林の中を通り抜けている。この遊歩道は、ビンヌンカムプと同じように、主としてレ
クリエーションのために利用されることを前提としており、村の中心部を取り囲んでおり、
その距離は約 1km である。この村の周囲を散策したり、サイクリングをする際、ウェーレ

ンフリドゥス教会の高い建物がこの道のどこからでも眺望することができる。因みに、この教会は我々のプロジェクトの完了時にちょうど創建百年目を迎えることになる。

ロッラスパット (Rollaspad)

1998 年に復活

ロッラスパットのすべての部分が完成したのは、この5年計画のプロジェクトの最後の年であった。この遊歩道は教会に向けて伸びており、ハーゼンパット、コッテ・フォアレ、およびスホールパット／ロンデールパットと同じようにフォーク状に分岐している。この遊歩道の中程に、先の大戦の時のレジスタンス運動に従事した人々によりこの村に贈られたマリーア・チャペルが存在している。この遊歩道は、片方がオッテルパットに、もう一方はトゥ・ロルデル (t' Rolder) 地区に接続している。また、この遊歩道は後にリヒテンフォールデ自治体に引き取られた。

第2章 以前はこうだった

このプロジェクトでのケルケパーデン、小さな自然、植樹による林、その他の風景エレメントの設置または造成は、ほとんど人手で作られた既存の自然の中で行われた。そして、この村の周辺の環境は数千年にわたって徐々に開発され、時には急に大がかりな変更がなされてきたが、今でも絶えず何かが新しく付け加えられ、少しずつ変わりつつある。そして、あちらこちらに我々の先祖の活動の跡が見つかるが、それらの多くは時と共に永久に消し去られつつある。我々はこの美しい風景に介入し、その開発を図る場合は、その存在価値について正しい判断を下して、残すべきものを取捨選択し、今は眠っている状態の景観や自然の美しさを引き出すために、文化歴史的、エコロジー的な分野についてもっと勉強し、知識をもっと深めねばならない。

1. シンヴェーデ：沼地から出発

ジウヴェントのあるアハテルフーク地方の中心部は全体がほとんど平地であるが、東部は少し高地を形成しており、丘や谷が比較的多いが、西部は低く、今日では大規模な農場や邸宅が散在している。ジウヴェントは昔から水はけの非常に悪い土地だった。1kmにつき20~30センチという僅かな勾配では河川も形成されにくく、植生も湿地を好む樹木で占められており、特にハンノキが非常に多い土地だった。少し高くなっている部分で、後に村ができた場所にはブナノキやオークが生えていた。この状態は十三世紀初めまで続き、その頃から少しずつ人も住み始め、最初は約12家族の農家ができた。それから百年ほど経ってさらに10家族増えて、1460年の時点では46家族になった。これらの農家はいくつかの小さなグループ（集落）に分かれて生活しており、集落の規模は高地（耕地）の面積により決まった。

地名のジウヴェントとは「低い原野」を意味する“Synwede”（セインヴェーデ）から派生したもので、最初に湿地を開拓して人の居住が開始したことを示唆している。この最初の地名の綴りは時代の経過と共に少しずつ変わり、1339年にはSyenwyn（セイエンヴェイン）、1460年にはZywandt（ゼイヴァント）、1470年にはSyewent（セイエヴェント）、1485年にはZywint（ゼイヴィント）、1516年にはZuywent（ズイヴェント）、1535年には（ゼーヴァント）、1547年にはSywande（セイヴァンデ）、1550年にはSudwendt（シュトヴェント）、1560年にはSuwent（シウヴェント）、1565年にはZewet（ゼーヴェット）、1641年にはSouwent（ソウヴェント）、1727年にはSiewent（シーヴェント）となり、最後に今日のZieuwent（ジウヴェント）になった（資料源：1987年刊行のヤン・ブーケルデル & ライモント・ブーケルデル共著の「ジウヴェントの歴史」）。しかし、村の住民のなかには自分たちの村を依然として十七世紀の綴り通りに呼ぶ者が多く、村人は、それにより本人または両親がこの村の出身者か、或いはまったく他所者かを見分けることができるという。

ジウヴェントは、風景の点からは、高地、ブナ林、野原の3つの区域に分けることができる。

高地域域では、冬になっても土地が泥濘にならない。古くからの村民の多くはここに住んでいて、この区域の道は曲がりくねり、屋敷の敷地の面積は家により様々である。この部分に多く生えている樹木はサマー・オークで、次に多いのはトネリコである。

ブナ林の区域と野原の区域は、長い間、公共の土地と見做され、農地にはならず、村民たちの共同放牧に利用されていた。野原は厩舎に敷く芝生の採取地となっていた。1832年に、リュールローセ・ブルーク（スヘイト堤に至るまでの土地）がジウヴェント村の農民たちおよびリヒテンフォールデの数人の農民に農地として分配された。特徴的だったのは、砂地の道に直角にいくつかの細長い矩形の区画が設定され、その境目には溝が掘られ、それに沿って薪用の木が植えられたことだった。そこに植えられたのは、主としてハンノキであるが、場所によってはヤナギが植えられた。砂地の道は現地の方言でディーク（標準語では dyke、ダイク、土手／堤）と呼ばれた。道の両側は草地よりも 50 センチから 1 メートル高く盛土され、冬になると通水路として利用されていた。やがて、この道にはトロッコのレールも敷設され、夏になると、場所によってはサイクリング用の小径としても利用された。自転車は牛が放牧されている牧草地との往復に欠かすことができなかった。牧草地は自転車が通り易くなっていなければならなかった。当時は、毎日 2 回、搾った乳を家に運んでいたからである。1970 年代にトラクターが登場するまで、多くの農民は、早朝と夕方、自転車に牛乳缶を 2 つ、3 つ載せて自宅と放牧地の間を往復していた。

十九世紀の中頃、化学肥料が登場すると、堆肥は作物栽培にそれほど利用されなくなり、耕地の広さを限定する要素ではなくなった。原野が開拓され、耕地の面積が一気に拡大したのはその頃のことである。特に十九世紀の末から二十世紀の前半にかけて、この原野のように栄養分に乏しく、条件の悪い場所でも土質改善が行われ、大規模に開拓され、次々と耕地化して行った。また、土地の交換分合も合理的に進められ、農道はまっすぐな形に直され、土地はブロック状の四角い形に整地された。ジウヴェントからリヒテンフォールデに至る曲がりくねった道が直線になる場所では、宅地化が進行し、クーケンフェルト（Koekenveld）の原野は次第に開拓されて行った。また、ハッレの方向（ニコラースヴェヒとザンドダイク）およびリーフェルデルフェルトにかけては、今でも小径と家の敷地が矩形のパターンが道の両側に広がっている。この地区に進出した開拓者たちの家の敷地はみな狭かった。小さな家に住み、飼育していた牛や豚の数もまだ僅かだった。化学肥料は既に販売されていたが、開拓地では使用されず、まだ荒野のまま放置されているところも多く、「野原」（veldgrond）と呼ばれており、土地は痩せて、農業生産性は低かった。今でも、そこには背の高い木としてはカバノキが多く、灌木にはナナカマドとエニシダが多い。

2. パーペンディークスケ

「ケルケパット」（教会道、単数形）という言葉は非常に古くからある。アハテルフーク地方の中央部でも、教会通いの小径そのものはずっと昔から存在していたが、十六世紀の宗教革命の後の教会迫害の時代にはこの言葉は存在していなかった。1444 年まで、ジウヴ

ェントの住民はミサに出席しようとするには、約 10 km 離れたフルーンロの教会に出向く以外に方法はなかった。当時、この村は人口も少なく、農家の集落が 10 ばかりがあちこちに散在しているにすぎなかった。1444 年にはこの村の近くのフラーヘンデルに小さなチャペルが作られ、1444 年にはリヒテンフォールデ城（村から約 3 km 離れた地点）の礼拝堂も一般に公開されるようになった。これらのチャペルは普通の日曜には村人によく利用されたが、本格的な儀式や祭日にはレフェーレ（現在のリーフェルデ）の村を通り抜けるケルケパーデンを通り、遠くはなれたフルーンロ（Groenlo）のフロルにある聖カリックストゥス教会に赴かざるを得なかった。このフルーンロの南を通る狭い道は、今では舗装されているが、依然としてカトリック教徒たちは「パーペンディークスケ」（法王堤を通る道）と呼んでおり、 sacrament の儀式に出席する時に通る固定ルートになっている。

1627 年にフレデリク・ヘンドリク将軍がフルーンロを占領したが、それによりフルーンロとその周辺地域（つまり、ジウヴェント、ハッレフェルト、ベルトルム、リーフェルデ、リヒテンフォールデ、フラーヘンデル）のカトリック教徒の大部分にとっては不幸な時期が始まった。すなわち、教会での礼拝が禁止されて、ミサに参加することができなくなった。この地方のカトリック教徒は、ヴィンテルスヴェイクやアールテンの地区の住民と同じように、長い間、ドイツのボホルトからやってくる宣教師たちに頼らねばならなかった。当時、宣教師たちは、ドイツからフルーンロの東部にある国境を越えてやってきて、ズヴィルブロックなどに教会を設立していた。1652 年になって、ようやくこの地区のカトリック教徒たちのために藁葺きの粗末な教会が建てられ、そこでミサが行われるようになった。この地方にも、いわゆる反宗教改革の波が押し寄せたわけである。日曜になると、粗末ながら精一杯の晴れ着を着た農民たちが馬車に乗って、野道や小径を通り、方々の村から教会を目指して集まってきた。この地域はオランダの軍隊の勢力が及ばず、比較的安全だったからである。1675 年にはジウヴェント村の北のカーテルスホルトにも秘密教会が作られた。そして、時の経過と共に、教会の周囲には自然に「ケルケパーデン」が形成された。この秘密教会は 1750 年頃まで礼拝に利用されていたという。

1795 年にジウヴェント村にも本格的な教会が建設され、1837 年にその拡張工事が行われた。この教会には、今日のマリーエンフェルデ地区も含めて、方々の村や集落から沢山の農民がやってきて、それにより原野や耕地や牧草地を横切る最短距離のルートが自然に形成された。これらの道はまだ狭く、馬車が通れなかったので、みんな徒歩だった。そのうち、最短距離を行くために次第に他人の私有地も通るようになり、自然に一種の地役権が不文律として成立した。当時のケルケパットは現在あまり残っていないが、そのひとつがロッラスパットである。十九世紀の初め（1808 年）に、ジウヴェント村に最初の学校ができて、ケルケパーデンのいくつかが子供たちの「通学路」（スホールパット）になった。その後、何世代もの村人たちが子供の頃、毎日木靴を履いて学校に通ったという。1932 年になると、アハテルジウヴェント（「ジウヴェントの背後」の意味）地区に教会ができて、独立教区となり、マリーエンフェルデと呼ばれることになった。

ケルケパーデンと共に、いわゆる「ドーデンヴェーゲン」（dodenwegen、死者の道、複数）

も成立した。これにも一種の地役権が付随していた。「死者の道」とは、葬儀の際、自宅で亡くなった者の亡骸を教会（および墓地）まで運ぶために、最初は二輪馬車、後に四輪馬車或いは霊柩車が通った道である。これは馬車一台がやっと通れるほどの幅であったが、それが自分の土地を通ることはだれも拒否することはできなかった。このように、ドーデンヴェーゲンとケルケパーデンは周辺の地区を村の中心にある教会と結び付ける大切な機能を果たしていた。

3. 大きな変化

自然を意のままに操ろうとする欲望に駆られた人間は、様々な技術手段を適用して、何世紀か経過する間に風景を変えてしまった。その際、人間は自然が持つ可能性に挑戦した。土地の利用方法（開拓して農地にするか、野原のままに放置するか）およびそこに植えるべき植物の選択は、土地の持つ性質により決定された。それにより、色々な用途に利用できる土地は常に最適の形で使用された。しかし、それにも拘らず、長い目で見ると、自然の変化は限定的であり、安定性を喪失しなかった。土地利用のふたつの特徴、すなわち、空間的な変幻性と時間的な安定性は、そこに存在する野性の植物と動物の種類を豊かなものにした。屋敷の敷地の境には並木道や林のある土手が設置され、その木々は定期的に伐採された。最も一般的な植林方法は、（薪として利用する）あまり高くならない灌木をライン状に植えて、ところどころに高く伸びる木（住居の柱や梁に使用するオークが多かった）を植えることだった。それにより、各地の風景にはっきりした特徴が現出され、生物学的にも種類が豊富になった。土地が低く、農地として利用するのにあまり適していない地方では、湿地はハンノキの多い林や葦原のまま放置された。例えば、ルーツラト（以前のリーテ）、レーヘン・ケンニングスストール、およびヘムメレやブロークの一部がそうだった。また、そのような湿地には細長い排水溝を掘り、その土で周囲の土地を高くして（大抵の場合は干草作りの草地として）利用できるようにした。キーンバーネー帯がそうで、溝の一部はまだ残っている。

オランダの各地では二十世紀の後半に大規模な農地改革が行われたが、ジッヴェント・ハッレフェルトでも同じで、70年代の末から80年代の初めにかけて徹底的な農地の交換分合が実施された。ジッヴェント村の住民の大部分はこの措置を歓迎し、積極的に協力した。ほとんどの農民の所有地は分散して存在していたので、無駄な労力とコストがかかり、経営効率が悪かった。このような状態になったのは、遺産相続の反復により家族所有の土地が分裂したためと、村の住民による荒野や湿地の部分的な開発によるものである。土地の交換分合は必要に迫られ、止むを得ず行うものである。さらに、これは、アハテルフーク地方の水はけの悪い低地で昔から大きな問題とされた排水の困難を解決するためもあった。交換分合の反復、所有地への地役権の設定、排水工事、住居移転は、農業を継続しなければならない農民が自分たちの置かれている状況を少しでも改善するために絶対必要なことであった。しかし、それはよいことだけではなく、新しい問題も発生させた。

例えば、土地を拡張するためには、並木道を除去し、樹木を伐採せねばならなかった。しかし、土地交換分合の計画に記載されているこれらのグリーン・エレメントを屋敷や農地の境界を示すために残そうとした農民も沢山いた。それでも、グリーン・エレメントの大部分は交換分合の進行と共に消滅して行った。「我々はマリーエンフェルデにある交換分合事務所に集まり、どの並木道を残すか、どの樹木を残すかについて討議した。伐採が決まると、一部は我々の手で切り倒したが、大部分は交換分合事務所が伐採した」と、我々の求めに応じて（1996年）このプロジェクトの趣旨に賛成し、自分の所有地に新しい並木道を設置することを承諾してくれたひとりの農民が述べている。これは、当時、この地区に住んでいた農民のグリーン・エレメントの設置に対する代表的な考えを示している。薪は1960年代の半ばには煮炊きや暖房には用いられなくなり、樹木はその供給機能を既に喪失していた。農家にとってはエネルギーや建材の供給源或いは居住快適さを保つ手段ではなくなり、むしろ邪魔な存在になっていた。ジウヴェントの西の部分の道路に沿って直線状に植えられた樹木の1970年頃までの状態を前ページの地図に示しておく（訳註：略）。

その後、この村の風景はさらに変わり、「裸の状態」になってしまった。（交換分合計画では風景の美観を保つために）農地に古いオークなどの木を残しておくことになっていたが、これは無意味な措置と受け取られた。経営規模の拡大を目指す農民たちにとっては、農地に孤立して立っているオークなどの樹木は、生産性を低下させるだけではなく、農地の合理的な運用も妨げる存在にすぎなかった。従って、交換分合が一応完了した後は、さらに多くの木々が不法な方法で、例えば（霧のかかった土曜の早朝によく行われた）伐採や、樹木の立ち枯れや老化を人工的に促進することにより、この村の周辺から姿を消して行った。交換分合の推進者たちは、自然景観の維持のために農業と樹木を組み合わせることは、まったく将来性のない無意味なことと考えた。

風景に起きたもうひとつの重要な変化は放牧されている牛が飲み水を得ていた小川の消滅だった。農地があちこちに広く分散していた頃は、ジウヴェントだけでも数百の小川が流れており、特に農家がほとんど建っていなかった地区、例えばトゥ・ブローク、ドウ・ヘムメレ、レフェレルフェルトには沢山存在していた。当時は、そのような小川は放牧されている牛の水飲み場所として大切な機能を果たしており、原野が開拓されて、次々と放牧地になってゆく過程で、放牧地に飲料水確保のための水溜まりが沢山掘られた。これらの小川やプールは、家畜たちだけのためではなく、両棲類、トンボなどの昆虫、水草などにとっても大切な生活の場であった。例えば、ジウヴェント村ではほとんど姿を消したアマガエルは、当時ごく普通の両棲類だった。排水工事が進み、土地が干拓されるにつれて、それらの生物や植物は苛烈な運命に曝されることになった。風景に変化を与えた木立や灌木の茂み、池や沼などは次第になくなり、この地方の自然美は消滅してしまった。例えば、この地方の代表的な樹種のハンノキの林はほとんど見られなくなった。以前は湿地帯として有名だったジウヴェントであるが、1970年代にそのような湿地植物の大部分は姿を消してしまった。

このように、この地方では自然が消えて行ったが、それと共に、典型的な農場が（農家

の移転により）解体され、野原に設置されていた小径や砂道がなくなることにより、文化歴史的な価値も減少して行った。また、特徴的な植物が生えていた急な崖も、丘や高台が均されることにより次々と消滅した。このように、ジウヴェント村でも整地が進むにつれてネガティブな影響が目立ち始めたが、みなが農業の一層の発展を望む以上、止むを得ないことだと考えられていた。



1966年当時の畑の冠水状況。現在はここにコッテ・フォアーレという遊歩道が通っている。

4. 歴史から得た知識の活用

この小径建設プロジェクトを実施するに当たっては、プロジェクトの範囲で可能とされるかぎり、この地方で昔から見られた種類の大小の樹木を利用して、林や並木道などの特徴的な風景エレメントやグリーン・エレメントを設置または補強し、以前のように美しい景観を再生することになった。新しい遊歩道には、地名研究に基づき少なくとも部分的にはこの地方に相応しい、自然な名称が付けられた。

樹木の多いグリーンの部分は道路のすぐ近くに形成された。これまで農業だけに集約的に利用されてきた自然環境の景観に関しては、人間の手により自然がこま切れ状に散在していること、森や林の縁および道路の縁の直線状の並木の破壊や浸食、小川や池の消滅が大きな問題になった。

この20、30年間の土地開発のネガティブな結果を少しでも修復するために、我々は色々な可能性を利用した。自然がこま切れに散在する状態を少なくするには、その間に木立を形成するのが効果を発揮した。例えば、林と林の間は土手で繋ぎ、土手には灌木を植え、並木の本々の欠けている箇所をなくした。また、ひどく荒らされた森林はエコロジー構造の補強により「治癒」することにした。

大規模な排水路のネットワークを元に戻すことは、勿論、不可能だった。その場合は、ところどころに小さな水溜まりを造成して、小規模な湿地環境を作り、水を必要とする小動物や昆虫が棲み付けるようにした。また、単一の種類の樹種をあちらこちらにまとめて植えることは、自然開発の傷痕を消すのに効果的だった。村の景観の回復に当たっては、都市計画の面にも配慮した。例えば、道路の分岐点などには目立つ樹木を植えて、村の景観にアクセントを付け、それぞれの地点を認識しやすいようにした。また、敷地と敷地の境には（樹頂を刈り込んだ）ヤナギを植えた。



畑の真ん中に孤立しているオークの木。これでは、自然の景観の維持にはほとんど役に立たない。

第3章 農民との協議

1. 交渉でのアプローチ

このプロジェクトの最初の段階では、学童が登下校に利用する道路および村の中心部から放射線状に外に伸びて、周辺の小集落に達する道路の交通安全性の確保を最優先することに重点が置かれた。それらの小集落にある農家や住宅の多くは、交換分合の後、袋小路に位置し、村の中心部とは直接結合しない不便な状態にあった。

勿論、それらの住民たちとは十分に意見を交換した結果、どの地点でも住民のプライバシーが侵害されないように学校とブーケルデル通りを直接結び付けることを最重視すべきであるという結論に達した。次に、この道を北に伸ばすことについても検討された。この案を熱心に主張したのは、フロッベン通りに沿ってオークの森林を保有するヤン・ペンテルマン氏だった。同氏は古いオークの森を通り抜けている昔から村民が教会通いに利用した歴史的な価値のあるケルケパットを復活させることを熱心に主張した。B. A. M. クラッペンボルフ氏はそのケルケパットの傍に広い農地を所有しているが、この道の周囲の景色を支える風景エレメント、例えば木々の生えている土手（同氏の畑を横断する形になる）やカエルなどの棲む池などを設置するために、農地の一部を寄付してもよいと申し出た。この区間はその他の区間の模範となり、今後の交渉相手たちも注目しているので、我々としても入念にアプローチをする必要を痛感した。

しかし、プロジェクトの最初の段階で土地所有者たちが好意的な態度を見せてくれたことは、我々理事一同を大いに元気付けてくれた。また、彼らの具体的な提案は計画遂行に非常に役立った。我々は、このプロジェクトが他の種類の多くの利害関係者にも依存していることを、改めて認識した次第である。

これらのアイデアを検討して具体的な案にしてから、このスホールパット（通学道）の設置に関係する他の8名の地主たちと最初の話し合いが持たれた。それは、理事会メンバーとの不定期的に開かれる会合の形で行われた。その話し合いは、大抵は非常にポジティブな結果をもたらしたが、問題はいくつかあった。理事会側は、土地所有者やその他の住民たちがこのプロジェクトに協力してくれないと何事もできない旨を強調した。彼らからは、後で電話するから、自宅に来てこの計画についてもっと詳しく説明してもらえないかと尋ねられた。そして、ほとんどの地主にそのようにして説明し、その同意を取り付けることに成功した。

そのような話し合いをどの地主から始めるか、その順序も非常に大切なことが判明した。話し合いを開始するに当たっては、このプロジェクトに好意的であると推定される地主からスタートした。態度がはっきりせず、どちらに転ぶか分からない地主は最後まで取っておいた。そして、特定の建設予定の道路を対象に、その路線に関係するすべての地主から同意を得ることに集中した。彼らの同意を得てから、次の区間の建設計画を発表し、その他の住民などの利害関係者たちと協議することにした。それが済んでから、リヒテンフォー

ルデ市長と助役に計画を提示し、現地の日刊紙「エルナ」を介して一般住民に発表するようにした。公的な認可を得てからすべてのボランティアを集めて説明会を開催し、次に一般住民たちへの説明会を開いた。

地主たちの自宅での交渉はもっぱら夜に行い、配偶者やその他の家族たちも参加できるようにした。我々は、それぞれの家族のうち、問題になる人物はだれか、つまり、最終的な決定権を持っているかを予め推測して交渉に当たった。何故ならば、農家の場合、決定権を持つのは必ず主人であるとは決まっていなかったからである。

理事会側からは、大抵の場合、2名の理事を交渉に出席させた。そして、最初の訪問ではプロジェクトの趣旨について詳しく説明した。重点を置いたのは交通安全であった。次に、ジウヴェント住民を対象としたアンケート調査で判明した結果、すなわち、いくつかの集落の人々は新しい道の設置によりこれまでの孤立した生活から開放されたいと願っている事実を告げた。そして、下院、LNV（農業・自然保護・漁業省）、ヘルデルラント州政府、レクリエーション局、リヒテンフォールデ自治体がこのプロジェクトを支持している旨を説明した。また、地役権に関する法令のもたらす利益、例えば堆肥や搾乳の権利の保持および不動産登記手数料（あまり評判がよくない）の節約などの点についても指摘し、我々としては遊歩道が農地や敷地の中を横切るとはできるだけ避けたいと考えている旨も説明した。

交渉に当たっては、農作の点ではあまり有利ではない箇所、例えば灌木が生えている土手、林、湿地なども買収の対象としている旨を告げた。既に耕作や放牧に利用されている土地は勿論、三角や梯形の土地、林、沼や池にも1㎡当たり5ギルダー、すなわち、当時の農地の売買価格としてはかなり有利な価格を提示した（第8章参照）。我々は、地主たちとの交渉において、堀や排水溝の整備や掘削、垣根や柵の修理、土手の林の剪定、牧場の水はけ状態の改善、堀や水溜まりを作った際に浚渫した砂を利用した低い土地の嵩上げを我々の手であることを申し出た。終わりに、地主側にも当該の区間について何か提案することはないかと尋ねることにした。そして、最終的には、地主との約束の内容を標準用紙に記載して、プロジェクト全体がまとまるまでの暫定的な契約とした。また、双方は話し合いの内容は当分秘密にすることを約束した。理事会もその約束の内容または問題点を他の地主には知らせないことにした（silent diplomacy、沈黙の外交術）。

また、「ジウヴェントの利益」の年次集会では、地主の意向を無視して、地主に大きな迷惑をもたらすような場所には遊歩道は決して設置しない旨を強調して説明した。そして、すべての関係地主との話し合いが成立してから、正式の申請をリヒテンフォールデ自治体に提出した。また、計画内容を公開した後も、地主の側から異議を申し立てる可能性も残しておいた。我々は、強制執行によりプロジェクトを遂行することはできるだけ避けるようにした。「みんなの鼻が風上に向く」ようにするまで、時には忍耐することも必要であった。

2. 農民の抵抗

1 回だけのことだが、我々の計画に対して地主側から厳しく反対されたことがあった。慥かに土地の所有者とは何回も話し合わねばならなかったが、大抵は妥当な線でその同意が得られた。しかし、時には、境界を接している土地の所有者の反応により、その協力の形も左右された。区間によっては、相当長い距離にわたって計画された道路を変更したり、話し合いが何年も続いたケースもあった。下記に、地主たちとの交渉の過程で明らかになったいくつかの重要な問題点を紹介しておく。

プライバシーの侵害

ほとんどの住民は自分の住居の周りに他人が立ち入って、プライバシーを侵害されることを非常に嫌がった。そのため、いくつかの路線では、土地の所有者自身は遊歩道の設置に同意したが、住民の反対で遊歩道を予定の場所からずらしたことがあった。また、住居を新しい道から見えないようにするため、樹木を植えて、木立を造成した箇所も二、三箇所に止まらない。そして、木立を設定するために余分な土地を取得せざるを得なかった場所もある。新しい遊歩道の傍に住む人々に後で問い合わせたところ、特に問題となるようなことはまったくなかった。遊歩道の交通による支障はほとんど生じていない。

将来の農業経営に与える脅威

永年のうちに、たくさんのケルケパーデンがジウヴェント村の周辺に設置され、多くの農地が売りに出されたが、当然のことながら、農民たちはできれば自宅の敷地に隣接または近接していて、道路や排水路が敷地を横切る怖れのないような土地を好んで購入した。また、将来、農地をさらに拡張するつもり地主も何人かいた。そのような場合、隣人が自分の土地に遊歩道を通すことに同意すると、農地拡張計画に支障が生じることになる。或る地主が我々に土地を売る意思はまったくないということが確認された場合は、その土地に隣接する土地を所有している地主に、将来、土地の所有関係が変わることにより道路設置場所が変更される可能性のあることを告げることにした。

モーターバイクの騒音に対する心配

交通標識には、ケルケパーデンを通行できるのは人と自転車だけである旨を明示する。ケルケパーデンに関するこれまでの経験から、この種の道路の交通は絶えず社会的にチェックしなければならないことが分かっている。若者たちがモーターバイクやトレールバイク（trailbikes）などに乗り、遊歩道を走行することがある。そうすると、住民がその騒音に悩まされるだけでなく、路面の舗装も傷付くことが多い。これまでも、たまり兼ねた住民たちがそのようなバイクの通行を実力で阻止し、交通法規に基づき警察に訴えたことが何回かあった。住民たちはそのようなバイクの通行に猛烈に反対しており、バイクの若者たちとの間に小競り合いの生じたことが何度かあった。

犬の糞公害

飼い主による犬の糞の始末は都市だけの問題ではない。ケルケパーデンでも犬の糞はあってはならない。それを放置しておく、牛がそれで汚染された牧草を口に入れたり、それから作られたエンシレージ（サイロで発酵飼料）を食べる恐れがある。また、鎖から解き放たれた犬が、放牧されている牛を脅かしたり、遊歩道の傍で抱卵している野鳥を狩りたてることもある。散策者のなかには犬を嫌がったり、怖がる人もいる。従って、遊歩道の入口には、当該の遊歩道は私有地を通過していること（第5章参照）および「犬は必ず鎖につなぐこと。糞は飼い主が必ず処分すること」と書いた掲示を設置することを忘れてはならない。犬を連れて散策することは禁止されていない。しかし、飼い主は犬の糞による環境汚染を防止する義務を負う。糞害は社会的にチェックし、防止しなければならない。幸い、これまでのところでは、ケルケパーデンの路面またはその傍に見付かる犬の糞は比較的少ない。それでも、多くの人々が愛犬を連れてケルケパーデンを散歩しており、そのなかには鎖でつないでいないケースも時々見受けられる。何人かの地主は、犬が道から飛び出さないように特別なフェンスを設置することを遊歩道設置を容認する条件としている。しかし、そのようなフェンスをあちらこちらに設置すると、ケルケパーデン全体の美観が低下するので、村の外周部分に設置される遊歩道についてはなるべくそれを設置しないようにすべきである。

トラクターの耕地間の移動が簡単ではなくなった

この問題はいくつかの場所で発生したが、道路の一部を煉瓦敷きにして、そこをトラクターが横断するようにして解決できた。また、既設の暗渠を排水路の上を渡して延長するに当たっては、舟の通行の邪魔にならないように、水利組合と協議して決定した。

ロンデールパットの中間には、隣の耕地に移る農作業車と道を走行する自転車がうまく擦れ違えるように、小さなサークル（ロータリー）を設置したので、路面が潰されることもなくなった。また、コッテ・フォアーレでは砂道の一部を煉瓦敷きにして、農民が路面を損傷することなく、隣の耕地に入り易いようにした（第5章参照）。通行のための既存の地役権は尊重された。

自分の土地を横切る道の設置は歓迎されなかった

それでも、既存の林の傍に新しく遊歩道を設置することは、林のある土地の所有者は歓迎した。何故ならば、その林の保守をしないで済み、面倒な枝打ち作業からも開放されるからであった。或る地主の持つトゥモロコシ畑の場合は、そこを横切って村の中心部と結ぶ遊歩道が建設され、それに平行してふたつの林を結ぶ土手も設置し、土手の上には樹木が植えられた。

不明確な所有と占有

公正証書で確定された契約内容については、秘密を保つことになっていた。しかし、契約に署名する権限を持っているのか、予めはっきりしない場合がしばしばあった。例えば、当該の土地が遺産相続の対象で、しかもまだ相続人の間に分けられていなかったことがある。或いは、土地所有者が所有地を占有しておらず、そのことを我々に通知するのを忘れていたために、我々との間に誤解が生じて、話がこじれたこともある。そのような場合は、問題を解決するのに、もう一度関係者で話し合いをせねばならなかった。正式な公正証書の作成はすべての道路が完成してから行われたので、プロジェクトの進行中に用地が他の所有者に売却されたケースが何件かあった。しかし、法的には、我々と元の所有者の間で締結された契約の方が優先するので、通行に関する「地役権」は次の所有者も認容せざるを得なかった。

また、正確な境界線、特に農地が自治体やレクリエーション局や林野庁の所有地との境がどこであるかがはっきりとしないケースもいくつかあった。そして1件だけだったが、そのために自治体の不動産管理の専門家に境界線を確定してもらったこともあった。しかし、すべての関係者が十分に協議することによりほとんどの場合は解決され、不動産登記を引っ繰り返して再検討する必要はなかった。



この写真のように並木や林の傍のスペースは、元来、農作には適していなかった。

植林への反対

樹木があると作物への日照が悪くなるので、植樹はできるだけ耕地の北側に寄せて行うようにした。植林については、或る農民はボランティアのリーダーに対して隣の耕地との境界にヤナギを植えないでほしいと述べた。その農民は、そのうちに隣の耕地を買い入れることにしていたからである。

道路の保守義務について

ケルケパーデンの保守については、リヒテンフォールデ自治体にいくつかの質問が寄せられた。すなわち、多くの地主が、将来、道路をどのような形で保守するのか心配していた。それに対して、当協会はケルケパーデンは所定の保守計画に基づきボランティアの組織を通じて保守することをはっきりと伝えた（第6章も参照のこと）。

犯罪の起きる怖れ

ケルケパーデンは近辺に住む人々が散策やサイクリングに頻繁に利用するので、通行人が襲われることはあまりない。勿論、その危険が皆無だとは断言できない。但し、これらの遊歩道には照明設備がないので、サイクリストは夕方や夜間には広い公道を通る。ジュヴェント村の道路で強盗などに襲われることは、幸いなことにまだなく、村の外の公道よりも遙かに安全と見做されている。

放牧されている家畜や野性動物に及ぼす影響

村の周囲での最後の区間の工事を進めている時に、ハンターたちから苦情がきた。そこで、この地方の狩猟団体と理事レベルで協議が行われた。その結果、双方の利害は次の方法で調整できることに決定した。すなわち、森林の設定および土手への積極的な植樹により野性動物の保護に有効であることが判明し、また、独自の調査により散策やサイクリングのごとき大幅なレクリエーション活動が野性動物の棲息に悪影響を及ぼすことはほとんどないことが確認された。家畜への影響は、実際にはほとんどないことも判った。

3. 話し合いの実例

下記に、いくつかの異なった区間について行われた話し合いの実例を示しておく。それには、土地所有者がケルケパーデンの設置に協力するか否かを決める際の反応と結論の出し方がよく反映されている。これらの実例を選ぶに当たっては、色々な問題点が満遍なく示されるように配慮した。

スホールパット

クレイン・ホルデヴェイク家（ティッラス地区）との交渉は1994年にホルデヴェイク夫人を介してスタートした。彼女の夫は既に何年も前に亡くなり、彼女自身は足を悪くしていた。協会の理事の訪問を受けて、彼女は、農業経営の名義人は既にふたりの息子（未婚で、まだ彼女の家に同居中）になっていることを告げた。彼女の土地の端に遊歩道を建設することについては、モーターバイクの騒音に悩まされるとの理由で歓迎したくないようだった。また、彼女の息子たちは生粋の農民として農地をわずかでも譲ることには絶対反対しているが、「そのうちに、息子たちも協会に対する態度を軟化させるでしょう」とそっと耳打ちしてくれた。次に会った時、彼女は「息子たちは依然としてこの話に乗り気で

はないが、もう一度アプローチしてごらん」といつてくれた。早速、我々は息子のひとりに電話して、会って話をしたいと伝えた。「今日、或いは明日にしますか。話し合いにはいつでも応じるよ」というのが答えだった。急にそう言われても、我々は話し合いの準備ができていないので困ったが、官庁への申請の時期が真近に迫っていたので、ほっとしたのは事実である。

翌日の晩、協会の理事ふたりが彼女の自宅でコーヒーを飲みながらふたりの息子と話し合った。理事はさっそくこのプロジェクトの趣旨について詳しく説明したところ、一家は途中で質問もせず熱心に耳を傾けてくれた。それが済んで、兄弟は口を開いた。一番腹が立つのは、自治体のやり方で、ケルケパーデンをあちらこちらに設置するだけの金を持ち、且つ他人の所有地を通行のために開放しろと要求するくせに、一家の飼っているウシが放牧地に行くために家のすぐ傍を走っている州道を越えて行くのは認めようとせず、おまけに村の中をオートバイが騒音をまき散らして走るの認めようとしているのは許せないと述べた。それに対して、我々はこれらの問題は切り離して解決することを約束し、我々も村を貫通する道路にオートバイを通すことには大反対である旨を説明した。

そうすると、驚いたことに、一家は我々を一家の土地に案内し、境界線について説明したいと申し出た。我々のために長靴まで用意してくれたのでそれを履いて、牧場の境の鉄条網を越えて、一家の土地に入って行った。南側の境界線まで行くと、隣人の土地にある溝の向こう側に遊歩道を設定するのが理想的であることが判明した。また、その隣人（ホルデヴィークのウォーペレイス氏）は酪農を辞めているので、あまり反対はしないだろうと説明した。また、東の境界線に沿って狭い溝が走っていて、その向こう側に林野庁が管轄する林が生えている土手があった。その林は永年にわたってまったく保守がなされておらず、兄弟はそれについて非常に怒っていた。その土手の後ろには水利組合が管理する小川が流れており、その両側に小径が走っていた。多くの人がそこに愛犬を放していたが、その小径または土手を通るように遊歩道を設定すると、私有地を利用する必要はないことが判明した。そこで、理事たちは、協会もお役所仕事には困らされており、ジュヴェント村の悩んでいる問題を一家の協力のもとに解決しようとしていることをもう一度強調しておいた。

次に、上記の狭い溝はなくして、その代わりに排水管を設置することを提案した。また、灌木の生えた土手に沿って遊歩道を作るためのスペースを設定するために1mほどの高さのフェンスを設定する必要がある。そして、土手の灌木の保守（剪定）は協会が責任をもって行う旨を告げた。ホルデヴィーク兄弟は互いに顔を見合わせてうなずき、兄の方が笑いながら言った：「1mのフェンスを設置しよう。そのための土地は提供するよ」。

ホルデヴィーク家に戻る途中で、我々はもう一度はっきりと確認した。すなわち、既存のどの開発計画にも触れられていないが、耕地や牧草地をその本来の目的である農業以外に利用することには良心の呵責を感じると述べた。そして、ホルデヴィーク家の台所でビールで乾杯してその日の話し合いが成立したことを祝った。「お母さん、とにかく、このプロジェクトの目的は理解できたので、話し合いは成立した」と、兄か弟が言った。すると、

驚いたことに、ホルデヴェイク夫人が言った：「わたしゃ何も反対していないよ」。しかし、我々が推測していたように、反対の中心は彼女だった。彼女は、放牧してある牛がよその人の連れてくる犬に追い廻されたり、子供たちの手を離れた風船に脅えて逃げ廻るのを嫌っていたのである。

コッテ・フォアーレ

ブルーヴェヒの袋小路になっている部分を開放して、村の中心に向かっていくウェーレンフリート通りにつなぐことが提案されたのは1994年のことだった。袋小路に面している農家に住むホルケンボルフ家（地番はバールンホルデルのイーゼレーフ・ベンナト）は、25年間、村の中心部に直接行けるようになることを夢見てきたので、当初、この案には大賛成だった。

或る晩、我々がその件について説明するために同家を訪れたが、驚いたことに、そこにはホルケンボルフ家の両隣りの家の人も同席していた。我々がやって来るのを知って、3軒が既に準備をしていたわけである。挨拶を済ませ、コーヒーを飲んだ後、我々が予期していなかった提案がなされた。我々は、既に乳牛は手放して、搾乳は辞め、農作物の栽培に専念しているホルケンボルフ家の耕地を横断して遊歩道を設置することを計画していたが、彼らはついでにそれと直角に走っている溝に沿って小径を設置してほしいとのことであつた。その案によると、その道を通る散策者やサイクリストたちが隣人たちの作業や牛に与える影響が少なくなり、迷惑がかからないし、おまけに自分たちの土地を譲る必要もなくなるとのことだった。この提案は、我々にとってまったく受け入れられないものではないが、我々が計画しているケルケパーデンのネットワーク、すなわち村の中心部から周辺に放射線状に伸びる道路構造には適しないものだった。

その後、何回か理事会を開き、この提案について検討したが、予期していた通り、一同の賛成はなかなか得られず、やはり当初の計画通りにすべきであるとの意見が強かった。何故ならば、我々の考えているように遊歩道を設定すると、村からやってくる散策者たちはホルケンボルフの素晴らしい家屋敷と村周辺の緑の森を左右に眺めながら、緩やかに傾斜しているホルケンボルフ家の耕地を下りてくる素敵なハイキング・コースが設定できるからである。さらに、そうすると、ジウヴェント村とマリーエンフェルデ町を素晴らしいサイクリング・ロードで結合できることになる。「バールンホルデルまで来ても、その先は全部行き止まりで面白くない」というのが、理事会の決まり文句だった。

次の年、ホルケンボルフ家の隣人のひとり、ヤン・マソップ氏との話し合いで、この問題が再び出た。そこでマソップ氏は、ホルケンボルフ家の私道（砂地の袋小路）を先ず煉瓦で舗装して、サイクリングにも農作業や乳牛の往復にも利用できるようにすることを示唆した。そうしておいてから、ホルケンボルフ家の農地に小径を通して、村の中心に向かう既存の遊歩道に接続するとよいとの話だった。しかし、同氏は、その案に対してはもうひとりの隣人は賛成しないだろうと言った。何故ならば、その隣人は自分の耕地との往復にその砂地の袋小路を利用する地役権（成文化されてはいない）を保有しているからであ

る。そこで、我々はその隣人の夫人に電話することにした。

その隣人との話し合いは、わざわざ牛舎の入口で行われた。彼が一番困っているのは、牛の糞尿を運び出す際の悪臭を周囲の住民たちが猛烈に嫌がり、文句を言ってくることであった。彼はその所有地を我々に利用させるわけには行かないが、他の隣人たちとはどんな取り決めをしようが別に構わないと言った。この一言は我々に希望を与えた。彼の所有地を通過しない道ならば、設置することができることが判ったからである。

さて、風景美の点についてホルケンボルフ家と再度交渉することになったが、その時、以前、近くのモミ林のなかに美しいキリスト十字架像があったことが判明した。ジウヴェントの近辺には、大戦の直後、レジスタンスの戦没者に感謝するためにそのような記念碑がいくつか建てられた。しかし、ホルケンボルフ家の土地にあった十字架像はひどく損傷し、見る影もなくなったので、ずいぶん以前に取り払われたとのことである。現在、その跡は（周りにあった砂地の道の部分も含めて）完全に林になっている。今は木々の間に散らばっているいくつかの石の塊が、そこに十字架像のあったことを偲ばせてくれる。リヒテンフォールデ自治体の農地交換分合の後、1ヘクタール足らずの小さな林が人工的に造成されたが、今やその存在は住民からまったく忘れられている。我々は、ホルケンボルフ家に我々の手で林のその部分を整理して、十字架像を再建したい旨を伝えた。最初、ホルケンボルフ家の人々はためらっていたが、最終的にはその件に同意してくれた。さらに、砂地の路面を煉瓦敷きにすることを提案すると、非常に積極的に賛成してくれた。そして、もう一本の道、すなわち、同家とスホッペンヴェヒを結ぶ遊歩道もその所有地に設置することも認めてくれたので、人々は村を起点としてこの美しい一角を巡る魅力的な散策が楽しめるようになった。そして、スホッペンヴェヒの傍に水溜まりを設け、果樹を植える計画も承諾してくれた。この一角は地盛りをする必要があるが、水溜まりを掘って得る砂をそれに利用できることになる。一家が賛成してくれたお蔭で、我々は様々な景観エレメントを設置して、素晴らしい散策道を実現できることになった。

この計画を自治体当局に提出してからも、我々はどこからか反対の声があがるのではないかと心配でたまらなかった。しかし、幸いにも苦情はなく、1995年春には工事がスタートした。



ホルケンボルフ夫妻とブールヴェヒについて協議する協会代表

スプレンケルデルパット

スホッペンヴェヒとホフマンスヴェヒを繋ぎ、コッテ・フォアーレに接続する道路は、交換分合の後、4軒の農家だけが利用する袋小路になっている状態に気づき、スプレンケルデルパットを設置する案が生まれた。以前は、この一角には多くの小径が走っていた。しかし、この遊歩道の建設に対しては、農家は他の地区に見られなかったほど強く反対した。

ここに連絡道を設置する件については、1994年に或る若い農民と最初の折衝を行った。彼は、その直後に古くからある酪農農家を受け継いで、経営することを決めた。それに関連して、彼は隣人から牧草地を購入するなどの投資を行った。従って、彼にとっては、自分の所有地の一部をサイクリング・ロードを設定するために手放すことはあまり歓迎することではなかった。その反面、このプロジェクトに協力すべきであるとの社会的圧力はひしひしと感じていた。彼の妻は自分たちの生活のプライバシーを侵害されることを嫌い、そのようなことがないように特別の保証を求めた。そこで、我々は新しい遊歩道は彼らの住宅とは十分な距離をおいて設置すること、および必要ならば遊歩道に沿って植林することを約束した。問題はこの植林を巡って起きた。つまり、1995年の初め、我々は他の7軒の農家から新しい遊歩道の設置について同意が一度に得られ、その契約を締結することができた。しかし、上記の若者だけは、すべてを拒否するわけではないが、とにかくまだ完全に同意しなかった。そこで、我々は、止むを得ず、水利組合と交渉して、道路建設に不足している土地を小川に沿った牧場に設定することにした。しかし、この方法は、若者の所有地を利用するよりも技術的に難しい点があった。例えば、そこに設定する遊歩道は砂以外を使用することはできず、我々が考えている Gravier d'Or（グラヴィエル・ドール、金の砂利、フランス語）で仕上げることは認められなかった。

この点を説明すると、若者は方針を変えて、暫定的な契約に署名してくれた。それは、若者の所有地の利用は最小限度に限定することを条件に、灌木が生えている既存の土手のすぐ下に遊歩道を建設することに関する契約だった。協会側は、その代償として、若者の牧場の排水をよくすること、および放牧されている牛の飲み水用に水溜まりを掘って、その土で牧草地の数カ所を土盛りすることを約束した。しかし、若者は、その後、その件について何回か理事たちに電話してきた。一番の問題点は、スホッペンヴェヒから若者の隣人のヘンク・トゥ・モデル氏（スホッペン地区）の土地を通ることにされた新道の建設予定区間だった。トゥ・モデル氏自身は、我々と同じ考えで、遊歩道を自分の牧場と若者の土地の境界線の上を走る歴史的なルートに設置することを最適と考えていた。しかし、若者はこの点について難色を示した。若者は、将来、トゥ・モデル氏の土地を購入して、自分の牧場を拡張することを考えており、その場合、牧場がこの新しい道により二分されていると、当然のことながら、酪農経営に非常に都合の悪い状態になるからである。そこで、第二の選択肢として、トゥ・モデル氏と話し合い、距離は短くなり、少し条件は悪くなるが、コッテ・フォアーレに接続する遊歩道を同氏の所有地のもう一方の端に沿って設置することができるか打診してみた。しかし、そうすると、今度は別の隣人（やはり酪農経営者）との間に問題が生じることになることが判明した。その隣人はその部分を既に利用させてもらっており、そのうちに購入するつもりであるので、当然のことながら、将来の酪農経営の支障となるような道の設置には反対だった。トゥ・モデル氏は何とか局面を打開しようとして、その部分は当分売却しないことにしてくれたが、完全に手詰まりの状態になった。いかなる解決法も見付からず、関係者の緊張は高まるばかりであった。その後、何回も話し合い、色々な面から検討し熟慮を重ねた結果、遂に上記の距離を短くする選択肢を選び、将来、土地の所有関係が変わったならば、それに応じて遊歩道のルートを変更することを約束した。

さて、もっと面倒だったのは、我々がスプレントテルデルパットの枝道を設定して袋小路状態の打開を図ろうとしたホフマンスヴェヒ地区（この地区はヴォペレイスとも呼ばれている）の住民たちとの交渉だった。この住民グループの数人との交渉が開始したのは1994年のことだった。彼らは、村の中心部との連絡道の設置については、全員非常に消極的だった。プライバシーが侵害されるのが嫌だというのが、反対の主たる理由だった。彼らにとっては、村の中心部に向かう安全なサイクリング・ロードの設置よりも自分たちのプライバシー保護の方が遙かに大切だった。

この袋小路のホフマンスヴェヒにある農家のうち、4軒には他の地区出身者で、農業とは関係のない若い家族が住んでいた。彼らは農家の建物を通常の居住建物に改築するのに非常なエネルギーを注いでいた。彼らは、だれもケルケパーデンが設置される農地や牧草地を所有していなかった。アウデ・リユールローセヴェヒ（古いリユールローセ通り）にあるマリーア・チャペルの背後から始まる連絡道は、彼らの住宅の間を通ることもなく、その敷地を利用する必要もなかった。もっとも、袋小路の入口にある最初の家の場合は、建物から約20mのところを新しい遊歩道が通ることになっていた。従って、計画ではその

家のプライバシーを守るために幅広い灌木の生け垣を設置することになっていた。この家を所有し、かつてはそこに住んで農業をしていた者（家主）は村の中心部に引っ越していたが、周囲の農地は依然として所有していた。その家主は新しい遊歩道をその農地に設置することを快諾してくれた。そして、その直ぐあとで地役権契約を締結した旨をホフマンスヴェヒの旧農家に住む借家人たちに電話した。彼らも当然賛成してくれるものと思っていたところ、何故、それを承諾する前に彼らに相談してくれなかったかと文句を言われ、その件は承諾できないと言われた。袋小路の新しい住人たちは、早速、次々と我々に電話してきて、苦情を述べ、我々を困惑させた。しかし、我々としては、土地所有者たちの同意を得てから、住民との交渉を開始するという根本方針は変えるわけには行かなかった。

我々はそれと平行して、スプレンケルデルパットの枝道で、アウデ・リユールローセヴェヒの傍の林に向けて伸びる道の設置についても協議を重ねていた。この枝道はドールンデイクと接続し、従って将来はハッレフェルトから来る遊歩道とも連絡することになっていた。この遊歩道が通る予定の土地の所有者たちは、当初、全員がこの案に賛成してくれてはいたが、その協力体制に崩れが見えだした。つまり、ホフマンスヴェヒに住んでいる例の4軒の家族が、やはり協会とのすべての交渉は関係者全員が出席する集会で行うべきであると言いつけていたので、土地の所有者たちも非常に不安になったわけである。

我々は土地所有者全員の承諾を取り付けたので、ホフマンスヴェヒの4家族に文書による招待状を送り、彼らとの協議に出席するように要請した。ところが、その会合開催日の直前に彼らから書留郵便が送られてきて、それには法律적アドバイス（どのような内容のアドバイスなのか記されていなかった）に基づきこの計画には反対すると記されていた。彼らは、プライバシー侵害の他に、交通騒音と浮遊ごみによる迷惑も反対理由に挙げていた。手紙の調子は穏やかで、他の区間にルートを変える点につき我々と意見を交換したいと書かれていた。

彼らとの会合では、協会のプロジェクトの目的と作業の進め方について説明した後、関係する土地の所有者全員の同意を既に取り付けている当該区間、すなわち、ホフマンスヴェヒの出発点（チャペル）に向かうスホッペンヴェヒの枝道で、アウデ・リユールローセヴェヒの傍の林に達する遊歩道の設置ルートについて説明した。それが済んでから、彼らに対してその反対理由について説明してもらった。彼らは、やっと改築したばかりの住宅の価値が新しい遊歩道の設置により減少することも恐れていた。遊歩道と住居の間に幅広い生け垣を設置することになっていたが、それでもまだ不十分だとした。

その説明を聞いているうちに、彼らがホフマンスヴェヒに連絡している遊歩道の設定そのものに反対しているわけではないことが次第に判ってきた。そこで、彼らの生活の安寧が脅かされないように万全の措置を講じることを約束した。お蔭で、その晩の会合は和やかな雰囲気うちに終わることができた。その後の折衝は順調に進んだ。

協会は、これらの問題が解決される見通しが立ったので、スホッペンヴェヒとアウデ・リユールローセヴェヒを直結する近道として遊歩道を建設することにつき正式の申請をリヒテンフォールデ自治体に提出した。また、この区間に沿って、既存の森林の傍に水溜ま

り／池を設置することも計画している。

この計画を発表して、一般の閲覧に供したが、その閲覧期間が終わろうとした時、既にこの計画の施行に同意していた農民のひとりが不服申し立てをしようとしているとの噂が我々の耳に入ってきた。その理由としては、水利組合がスブレンケルデルパットが始まる場所に沿って並木道を設定した後は、その遊歩道に沿って走っている排水路の保守を中止することが挙げられていた。我々は、早速、その点を解決するためにあらゆる努力をすることを、その農民に約束した。最終的には、この問題は、協会のボランティアたちがその排水路の掃除と岸辺の草刈りを毎年一度行うことで解決できた。

ハーゼンパット

ハーゼンパットの設置に関しては、1995 年 6 月に関係の土地を所有する地主たちと話し合いを開始した。

ヘンリー・クラッペンボルフ氏（モアーネスヒーンに住む農家）のところには、理事のひとりが突然訪問したが、その時、同氏は庭仕事をしていた。彼は我々が訪れるのをずっと待っており、来たら早速「ノー」と言うつもりだったと述べた。何故ならば、所有地は自宅の周囲の僅かな土地だけだったからである。以前に、交換分合で僅かな土地を隣人と交換しあったが、その結果はよくなかったことも影響している。また、自分の土地を横断する小川に橋を渡す件について水利組合と話し合ったことがあるが、その時も結局は物分かれに終わったことがある。さらに、もうひとりの隣人とも、クラッペンボルフ氏の土地に沿って流れている排水溝の縁にある灌木の生えている土手の保守について話し合ったことがあるが、話し合いは成立しなかった。同氏は、我々に対して、新しい住宅地区として造成中の“de Steege 3”（ドゥ・ステーヘ 3）に接続する小径をその土手の反対側に設置すればどうかと提案した。しかし、我々にとってはその案はあまり魅力的ではなかった。何故ならば、散策者やサイクリストたちは自動車の交通が激しいジウヴェンツェヴェヒを通ることになる他、いくつかの住宅の裏庭が丸見えになるからである。それでも、同氏は、これまでに設置されたケルケパーデンは非常によくできていると考えており、この件については妻ともう一度相談してみるといった。

それから 1 ヶ月後、理事ふたりがクラッペンボルフ夫妻と再び話し合った。そして、上記の問題について双方で詳しく検討してみた。散策者やサイクリストたちが夫妻の家を覗き込み、畑で働いている様子をジロジロ見るのを嫌がっていたのは、クラッペンボルフ夫人の方だった。彼女は話し合いに立ち会おうとしなかった。1 時間後に、理事たちは不安感を抱きながら、退出した。しかし、翌日、ヘンリー・クラッペンボルフ氏が電話をしてきて、協会が小径に沿って流れている例の排水溝の保守も引き受けてくれるならば、この話に乗ってもよいと申し出た。

ベンニー・クラッペンボルフ氏（イェンネックスに住む農家）の場合は、1995 年 6 月中旬に協会からまず電話をしてから、理事ふたりが訪問した。キッチンでの話し合いには夫人と息子も立ち会って、大切な役割を果たした。先ずコーヒーを飲んでからの同氏の提案

にはまったくびっくりしてしまった。すなわち、クラッペンボルフ家は、このプロジェクトのために延べ距離 50~100 km に達する遊歩道を設置するために周辺の土地を提供してもよいと考えていたのである。同氏が土地を提供すると、隣り合った土地の所有者たちも恐らく彼に倣って多少の土地は提供してくれるだろうと述べた。慥かに、先祖伝来の土地を失うし、新しい遊歩道に沿った環境が観光客の捨てるごみで汚染されるといういくつかの「問題点」が生じるかも知れないが、彼の妻は 1 m²あたり 5 ギルダーという補償額は大きな魅力と考えているとのことだった。

我々の予測したところと異なり、クラッペンボルフ氏は、モーターバイクの進入を防ぐためにはむしろ沢山のカーブを設定する方がよく、散策者たちのためにもあちこちにベンチを設置するべきであると考えていた。また、道の曲がり角には大きな木を植えて、景色に変化を付けるのが当然であると述べた。我々はその夜遅くクラッペンボルフ家を退出したが、我々のプロジェクトをそんなに支持してくれる人もいることを知って、嬉しくて堪らなかった。数日後に、同氏から電話があり、現在同氏の土地の真ん中を通っている A 排水路を土地の端に移してくれるように協会の方から水利組合に頼んでくれないかといってきた。これまで何回か彼自身が頼んでみたが、何の反応もなかったとのことだった。また、将来、建設予定の国道 15 号線の上を越えてストルートヴェヒとケフェルデルストラートを結ぶように計画されている遊歩道は、同氏が現在水利庁から借りている土地を横断するようにすべきであるとも述べた。

1996 年 1 月 4 日には、この遊歩道の設置について他の土地所有者 5 名とも話し合ってみた。それを設置するには、それらの地主のうち、2 名が協力してくれば充分であることが判明した。次に水利組合とも、排水路の移転について協議した。排水路の一部を隣人の所有地に移すと、自然と風景を構成するエレメントのための（数千 m²の広さの）スペースをクラッペンボルフ氏の所有地に、遊歩道に沿って設定することができる。そのための土地の再配分は、いわゆる小規模土地交換分合規則（第 5 章参照）を適用すると、比較的簡単であり、費用も小額で済む。そのための計画の概要は目下作成中である。

我々は関係者全員との折衝を済ませた後、再びクラッペンボルフ氏を訪問し、完成した計画図面を見せた。それによると、同氏の土地には約 700 m の長さの小径を設定し、小径の周囲には大きな池、岸が灌木の生えた堤になっている小川、ヤナギとその他の灌木の並木も設置することになっていた。また、同氏の牧場を横断している排水路を移転させ、池を掘って得た砂を溝移転工事に利用することにした。同氏は約 10 分間、じっと図面を眺めた後、「とうとう、ここに私の堤が実現する」といって、無条件で我々の計画に同意してくれた。計画全部を「財布の口を閉めたまま」行うこと、すなわち、協会がすべての費用を負担することが条件であった。但し、クラッペンボルフ氏は小径とグリーン・エレメントを設定することに対して何の補償も受け取ろうとしなかった。

メッラスディーク

メッラスディークに沿って遊歩道を設置する計画は、1996年1月の初めに公開され、一般の閲覧に供せられた。自治体の土地に既設の公道（砂道）に沿って遊歩道を設置することなので、開発計画そのものを変更または廃止する必要はない。

しかし、或る企業からこの遊歩道の建設に対する不服申し立ての文書が自治体に対して提出された。その企業は、モデルスダイクの両側の土地を所有していることを明らかにしており、小径の入口にベンチを設置すること、遊歩道の路面を舗装すること、遊歩道の両側にフェンスを設けることには反対であり、当該の遊歩道がその企業の所有地の一部を通過するように計画されていることを指摘していた。その企業の要請に基づき、リヒテンフォールデ自治体の係員が当該の土地の境界線について調査を行った。その結果、驚いたことに、いつの間にか自治体の所有地が必要以上にその企業に売却されていることが判明した。企業の事務所での話し合いでは両者の意見は真っ向から対立した。その会社は、以前、遊歩道をその会社の所有地内を数m通過してレインデルスヴェヒに接続させることに同意していたが、それは撤回され、上記の要求が反復された。協会は妥協の余地がないと判断したので（やや不便にはなるが、その会社の協力がなくても遊歩道をレインデルスヴェヒに接続させることは可能だった）、緊張感はさらに高まった。そこで、合意は成立しないとの結論に達して、我々は退出した。

リヒテンフォールデ自治体はこの件を職権により処理し、協会のボランティアが牧草地の境界にあったフェンスを他の場所に移動させることになった。また、自治体は企業に対して書簡を送り、元来、牛の公道上の移動は条例では認められておらず、それを強行する場合の危険は農民が負うことになっている旨を通知した。

数カ月後にモデルスダイクの遊歩道は完成した。他のケルケパーデンと同じように、この遊歩道の場合も、農地の出入り口に当たる箇所には、地面に金網を敷かず煉瓦で舗装した。この点については、農家の主婦から家族が新しい遊歩道を大いに利用しており、みんな便利になったと感謝しているとのメッセージが協会に届いている。この遊歩道のお蔭で村の中心部までの距離が非常に短縮され、毎日、自転車で往復しているとのことであった。

オッテルパット

村を貫通するルートが完成してから、我々は村の外周の道路網の整備に乗り出した。外周部分の道路は散歩やジョギングなどのレクリエーションに利用されることが多く、子供たちの交通安全性は村の内部の道ほど留意しなくてもよかったので、住民の賛成を得ることは少し面倒になった。そのため、予期しなかったほど多くの話し合いが必要とされた。

我々は、特に既存のインフラストラクチャーに及ぼす影響をできるだけ少なくするために、スホールパットとヘッレルヴェヒをつなぐ連絡道をバークセ・ベーク（バークの小川）に沿って設置することにした。我々は、今はほとんど使われていないが乗馬道をレクリエーションのために利用することができた。そのため、乗馬協会と十分に協議した上、そこ

に幅 4m のサイクリング・ロードとやや狭い乗馬道を設定することに決定した。

この件に関連して、フュールジnk家（オッテル地区）がその所有地の端に遊歩道を作ること、およびバークセ・ベークのすぐ傍にかなり広い水溜まりを設定することを認めてくれた。水溜まりを掘る際に得られる砂は、（ルーツラトに沿って走っている）古い排水溝を埋め立てて、その上に遊歩道を設置するのに利用することにした。最初の段階でヤン・ネイエンホイス氏（メーイエンに住む農家）がそれに必要な土地を提供してくれたので、ポプラ並木に沿って道を迂回して設置することにした。また、それに関連して、林野庁とリヒテンフォールデ自治体の所有地も利用できることになった。

しかし、この工事に関して、隣接する土地を所有する数人の者がリヒテンフォールデ自治体に申し立てた苦情を解決しなければならなかった。それには、何回も彼らと話し合っ、排水状態の改善や遊歩道の入口の調整などを約束することになった。この件については、自治体の長（ファン・レイケフォルセル氏）が仲介役を引き受けてくれ、そのお蔭で話が上手にまとまった。ハンターたちの苦情は、地元の狩猟協会の理事会との話し合いでうまく解決することができた。

ビンヌンカムプ

フロッペンヴェヒとリュールローセヴェヒをつなぐ遊歩道、すなわち、ロンデールパットとメッラスディークを結ぶ大切な連絡路の建設については、ふたりの土地所有者、ヨンニー・ロウヴホルスト氏（ペタス地区）とベンニー・ウォーペレイス氏（フロッペンバルテルス地区）の協力に負うところが多大である。しかし、協議を進めているうちに、他の土地所有者たちからプライバシーの侵害とか、牧場拡充計画の妨げになるとかで、思い掛けない苦情が出てきた。我々の計画と彼らの主張とは完全に対立し、どうしようもなくなったので、リヒテンフォールデ自治体がいわゆる「第 19 条手続き」を開始して、局面の打開を図ってくれた。その結果、事態は収拾され、苦情は撤回された。それにより、ジウヴェントの周辺約 10km に及ぶ新しいケルケパーデンのネットワークはその機能を発揮し、非常に便利になった。

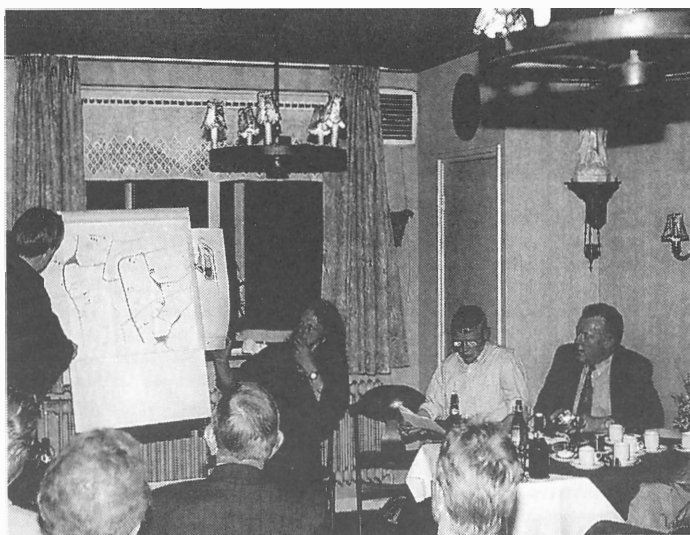
第4章 みんな、力をあわせて

ケルケパーデンの建設と保守は、この地区の住民が結成した固定的なボランティア・グループが引き受けてくれることになった。最初、希望者を募集したところ、約 20 名の人々が早速応募してくれた。やがて、その数は 35 名を超えるようになった。そのボランティアたちの大部分は年金生活者と VUT（早期退職者）たちで、現役時代は色々な職種で働いていた（例えば農民、自営業者、ブルーカラー、公務員など）。彼らの孫たちは、毎日、自転車で学校に通っていたので、ケルケパーデンの安全性と便利さの保持は身にしみて感じていた。この場合、年寄りたちが若者のために働いたわけである。

1. ボランティアたち

このプロジェクトは 1993 年にスタートしたが、それには多くのボランティアが参加してくれた。ボランティアの募集に当たったのは、協会理事のフランス・ドムホフ氏だった。ボランティアの協力がなければ、このプロジェクトは成功しなかった。毎日の作業はリーダー（ハリー・ボッケルス氏）の指揮に基づき進められた。途中で脱落した人はほとんどなかった。もっとも、2 名の人、すなわち、ヘルマン・ホルケンボルフ氏（イーゼレーフ地区、元パン職人）とアントーン・ロウヴホルスト氏（農業）が途中で亡くなった。次のページにボランティアの顔写真と氏名をアルファベット順に挙げておく。氏名の後の括弧の中は地元で使用されている通称で、ほとんどの場合は、居住しているまたは居住していた地区の名前である。また、その次に彼らの元の職業も併記しておく（訳注：略）。

ケルケパーデンの建設段階では、毎年初めに、ジウヴェントにあるカフェテリア “t’ Witte Paard”（トゥ・ヴィッテ・パールト、白馬）でその年度に予定している活動が発表された。勿論、その会合の通知はボランティアたちに最初に知らされた。カフェテリア

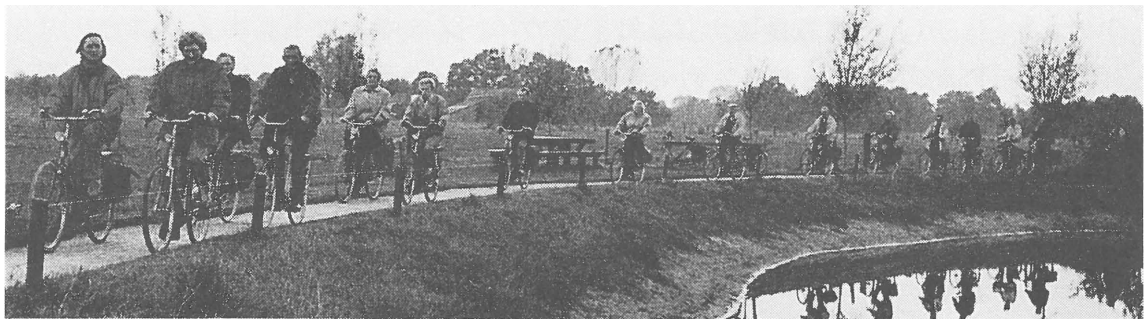


カフェテリア「白馬」におけるボランティアたちへの計画説明。左から右に、アントン・ストルテルデル（立って説明中）、ヨス・コルクマン、フランス・ドムホフ、ヘンク・テン・ダムで全員理事会メンバーである。

には多くのボランティアが出席し、資料やスケッチが配付され、質疑応答が行われた。大抵の場合は、その晩に最初の数日間の作業のリーダーとグループ構成が決められた。リーダーは、作業日ごとに作業内容に応じて一定数のボランティアを確保することになっていた。そのようにして、毎日、一致団結して仲良く働く10～15名のボランティアから成るチームが結成された。ほとんどのボランティアは、自宅から鋤や鍬、スコップ、鋸など作業に必要な道具を持参して、現場に集合した。道具がなかったり、紛失したり、損傷した場合は、リーダーが手配して、代替りの道具が協会の費用で用意された。

コーヒー・タイムや雨やどりの小屋にはキャラバン車を利用されたが、これはイースターの焚き火台を作る際の移動休憩小屋で、ボランティアのために自治体から無料で貸し出されたものである。協会は作業リーダーに対して、フェンスを固定するための杭、棒、針金、クギなどの必要資材を作業現場で協会の費用持ちで調達する権限を与えた。ボランティアのひとりのヤン・ワールデルボス氏は自分のトラクターまで提供してくれた。これは色々な目的に使用され、非常に重宝した。また、これらのボランティアの他にも、毎日、色々な人々が現場に現れて、臨時作業員として助けてくれた。

毎年、予定していたケルケパーデンが完成すると、女性たちを招待して、自転車で村の内外を巡って、その年度の成果を見てもらい、その後、コーヒーとパンでささやかな報告会を開くことを恒例にしていた。そして、その年度に方々から寄付された商品をご褒美としてボランティアひとりひとりに配った(第7章参照)。この行事は、ボランティアと住民の連帯感を強め、建設意欲を高めるのに非常に役立った。



新しく完成したハーゼンパットを行く自転車の群

作業リーダーの熱心さを物語る面白いエピソードをひとつ紹介しておこう。ちょうどオッテルパットを建設中のことで、作業リーダーのハリー・ボッケルスは10名ばかりのボランティアを率いて毎日忙しく働いていた。その日、一同が作業現場に向かって、オッテルスヴェヒに差しかった時のことだった。向こう側からふたりの男性が、まだ一般人の立ち入りが禁止されている遊歩道を自転車で乗ってやってくるのが見えた。ハリーは、むっとして道端に立っている大きなポプラの木の後ろに隠れて待ち構え、ふたりが通りすぎる瞬間、道に飛び出して、怒鳴った：「ちょっと、そこのふたり、どこへ行くのか。道の入口

にあった注意書が目にはいらなかったのか」。その時、ボランティアのひとり、ベルトゥス・ルークスが慌てて、ハリーの袖を引いて、ささやいた：「おいおい、これは市長さんだぜ。視察にお越しなんだよ」。市長であるとは知らなかったハリーは、えらくバツの悪い思いをしたと言う。

2. 全体の指揮

ケルケパーデンの建設活動の総指揮はハリー・ボッケルスが取った。彼は、毎日、コーディネーター役の理事で、遊歩道／サイクリング・ロードや付属部分の設計、工事請負業者（建設業のWOPA）との折衝を担当していたアントン・ストルテルデルと打合せて、作業を進めた。アントンは、ひとつの遊歩道の建設をスタートさせるたびに、事前にプロジェクト全体を請負業者と土木専門家たちと共に詳しく見直して、修整すべき点は修整し、各部分の相互調整を行った。勿論、作業リーダーのハリーもそれに立ち会った。彼は定年前に退職するまでは道路建設業界で働いていたので、この分野では多くの知人を持ち、顔が広がった。建設段階では、彼は毎日作業現場に顔を見せ、アントンの相棒として活躍した。作業の統一性と継続性は、このようにして維持され、保証された。また、建設期間中、作業リーダーは、計画の変更や質問やアドバイスを持ちかけてくる土地所有者に対応するのに四六時中忙しかった。彼は、道路建設の実務に実に詳しく、どこに問題があるか、どこにコンタクトすればよいか、正確な交渉の仕方を心得ており、計画に変更すべき点が発生すると、その点を担当する理事に早速連絡して、要領よく指示し、作業の総指揮者として全体を実に組織的に動かした。

このことは、ボランティアたちに、このプロジェクトの期間を通じて何ヶ月も継続的に大変な仕事を強いたことになった。作業リーダーとその妻のヘッティの毎日は、早朝に起床して7時にはその日の当番のボランティアたちのために大量のコーヒーを沸かすことからスタートした。夕方になり、ボランティアたちが帰宅した後も、翌日の仕事の準備をせねばならなかった。夜明けに地図を持って、新しい現場に行き、杭打ちをすることも珍しくはなかった。新しい問題が発生すると、現場に残ってその解決を図り、必要に応じてその土地の所有者と協議することもしばしばあった。

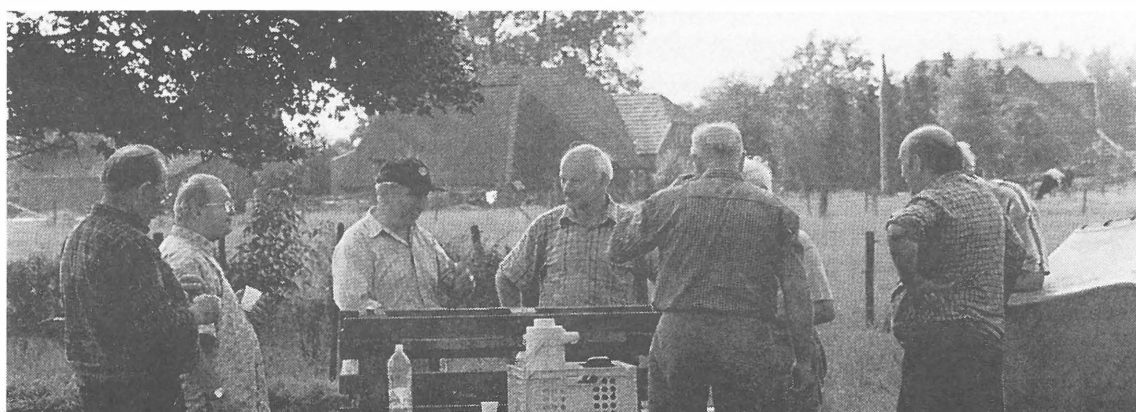
とにかく、このプロジェクトを遂行することは大変な仕事で、専門技術を必要とする工事を請け負った建設会社とはほとんど毎日折衝が行われた。例えば、作業の結果が図面通りであるかどうかは、その日のうちにチェックしなければならなかった。そして、修整の必要があれば、手直しさせた。みんな、いつもイライラしていた。なにしろ、このように大がかりで、細かい道路網を設置するのは、我々だけではなく、すべての当事者にとって初めての体験で、特に最初の段階では不安が大きかった。特に建設会社の作業員は、我々が品質管理にうるさすぎると言いだした。例えば、カーブの湾曲や傾斜が正しくないとか、掘削された池や排水溝の岸への移行部が図面と異なっていると、既存の樹木や林への配慮が足りないとかの点で、あまりに細かすぎると協会に対する文句が絶えなかった。



写真左：ボランティア・チームのために、早朝から温かいコーヒーが用意された。



写真右：ハリー・ボッケルスが妻に挨拶するのは、その後のことだった。



コルクマン氏（ハルメス・ヨハン地区）の家の後ろの芝刈りを済ませ、一同、コーヒーを飲みながら休憩しているところ。

また、コーディネーター役の理事には、小さな問題は自分の裁量ですぐに解決できるように十分に広い権限を持たせないと、工事が進捗しないことも判明した。もっと重要な問題については、理事全員が出席する会合で審議して、決定した。

3. 工事の請負

最初のケルケパーデン（スホールパットとロンデールパット）の建設を外注するに当たっては、リヒテンフォルデ自治体にあるふたつの建設会社に見積もり（オファー）を請求した。その際、フェンスの移動、仕上げ作業、ベンチやテーブルの設置などボランティアでできる仕事はできるだけボランティアがするというのが条件であった。見積もり金額は、どちらの会社もほとんど同じであった。最終的には地元の会社にした。ジウヴェントの会社であり、全従業員が村人と顔見知りだったためである。この会社は道路の建設を手掛けたことはまったくなかったが、経営者は我々の提案にチャレンジすることにした。

予測しなかった仕事をする、時にはコスト割れすることがあり、見積もり価格を超過することがある。このプロジェクトの場合も、コッテ・フォアーレ道の傍の池にクレーンで彫刻を設置したり、木製の小さな橋を架けたりする雑多な工事の費用は当初の計算には含まれていなかった。いくつかの橋を作る仕事は地元の企業（フーデルボーム社、在ディーカト）に見積もりを出すように依頼した。橋の金属製の基礎の製作は、やはり地元企業のクッペルスに外注した。このように、このプロジェクトには地元の企業や多くの住民が協力してくれた。そして、大部分の構造部分は企業の従業員が無給で作ってくれたので、協会としては材料費を負担するだけで済んだ。道の名称が記された標識は、やはり地元企業のバーニング社が数十枚も無料で作ってくれたし、煉瓦舗装は地元の道路施工業者のドムホフが低価格で引き受けてくれた。このように多くの企業の協力のお蔭で総工費を予算の枠内に抑えることができたので、節約分を休憩コーナーやグリーン・エレメントの設置費用に充当した。



下請け企業のロナルト・パウル氏と協議しているところ。

第5章 企画と実施

1. 内部通り抜け部分（1994～1996 年）

・ ジュヴェント村を貫通する主幹道路は4本あり、それらの連絡道路としてそれと直角に交差するアスファルト舗装の狭い農道を備えているが、その交点として、ジュヴェント村の内部と周囲に交通インフラストラクチャーを構築することが提案された。以前は、村の外から内部に自転車や徒歩でやって来る場合、自動車が沢山走る道路上を通らねばならなかった。この点を改善するために、各道路セグメントに村の外と中心部を結合する遊歩道を設定するようにした。そして、中心部には自動車が走行速度を落さざるを得ないように「敷居」を設置して、村の内部の交通安全性をよくした。プロジェクトのこの部分には、緩行交通（子供や老人の通行）に安全なルートを設定することを第一の目的に、約7kmの新しい遊歩道と復活された遊歩道が含まれており、我々はこの部分を「ビンネンドール binnendoor」（内部通り抜け部分）と呼ぶことにした。これは、末端が分かれてフォークのようになっている、径方向（放射線状）に走る4本の遊歩道である。すなわち、新しいフォークはロッラスパットで、1994年に設定された新しいフォークはスホールパット／ロンデールパット、1995年に大部分が完成したコッテ・フォアーレ／スプレンケルデルパットの遊歩道システム、そして1996年に完成したハーゼンパットがそうである。ロッラスパットは1998年に完成した。

2. 外部環状部分（1997 年）

このプロジェクトの第二の部分は、上記の4本のフォークをつなぐ遊歩道のない箇所、連絡路（舗装された小さな道）を建設することだった。最初に設計されたのはオッテルパットとビンヌンカムブで、どちらも1997年に設置された。それにより自動車交通の激しい道路をほとんど横断せずにこの村を徒歩／自転車で巡ることができる環状路線が出来上がった。この第二の部分は「ボイテノム buitenom」（外部環状部分）と名付けられ、主としてレクリエーションに利用されることを目的としている。この部分が完成すると、村のどの地区からでも徒歩または自転車で、村の周囲を約4分の1（約3km）、半分、4分の3或いは全周（約12km）を巡ることができる。図式で見ると、この道路網は4ツ葉のクローバーの形をしている。数人の住民がこの道路網には含まれない徒歩／サイクリング用の道路を設置するように提案しているが、ここではそれに触れないでおく。

3. スホールパット／ロンデールパット（1994 年）

1994年6月の初めに、最終的な形の区間地図（縮尺：2,000分の1）が作成された。それには、土地所有者たちが承諾した遊歩道のルートの他に、小径の建設に関する色々な

インフォメーション、例えばそれぞれの土地の利用面積、構築物が設置される場所、彫刻や標識の設置場所なども記載された。

スホールパットとロンデールパットの分岐点には、昔から「レーフン・ケンニングスストール」(Leeg'n Konningsstool, 王さまの肩掛けのような沼地)と呼ばれる小さな湿地帯があったが、工事の初年度に持ち主のバム・クラッペンボルフ(フロッペンに住む)と話し合っ、やはり沼地にすることにし、その後、毎年少しづつ拡張して行っ。そこに自生していたミズスミレ(water violet)やミズギセル(hollow pipe)などの植物は鉄分の多い泉の傍に移し替えた。この場所は、水溜まりや湿地を掘った時の土を利用して、本格的な素晴らしい湿地環境になった。

スホールパット／ロンデールパットに沿って存在する沼は、オランダでは絶滅の心配があるアマガエルなどに適したビオトープを設定するために1995年5月に造成されたものである。このアマガエルは、昔はジウヴェントやマリーエンフェルデの周辺地区だけではなく、約500m以内にあった湿地にはいくらかでも棲んでいた。今ではその棲息地は数カ所に限られている。しかし、環境を昔通りに戻してやると、個体数が回復する可能性は高いと言われている。このアマガエルの繁殖計画が成功するか否かはまだ不明である。しかし、1年後に沢山のオタマジャクシの姿がこの沼で見られるようになれば、この新しい環境が彼らの生育に適していることになる。他の両棲類もケンニングスストールにすぐやってくるはずである。ここは造成後2年目になるが、すでに多くのトノサマガエルが棲みついている。また、茶色のカエルやカメの存在も確認されている。

動物たちにとってもこの湿地は重要である。色々な種類の鳥(水鳥から森の鳥まで)がここに集まってくる。勿論、トンボも何種類かが観察されている。

この小さな湿地帯は、植生の発展の面でも高い潜在的可能性を提供している。造成してたった2年の間に、Duisendknoopfonteinkuid、Borstelbies、Waterpunge(Brookweed、ヒメボッス)の3種類の貴重な水生植物の存在が確認されている。背の高い植物も100種類以上繁茂している。今後は水溜まりの岸の傾斜地や自然保護区(culture land)にはこの地方固有の草がもっと増えるであろう。湿地や泥地が多いので、先の見通しは明るい。以前、この周囲の土地はトウモロコシの栽培に利用されていたが、水の便が確保されるかぎり、植物の栽培には問題はないはずである。

この土地は農耕に利用するにはあまりに狭いし(全体で7,000 m²)、砂を採取した穴がひとつあり、あちらこちらに林や灌木群があるので、ケルケパーデン協会は地役権を設定しなかったが、保守はケルケパーデン協会が引き受けることを条件にして、1997年にG.A.ファン・デル・ルフト協会が購入した。この協会はアハテルフークとリーメルスの自然を保全するために設立された財団で、上記の理由でここに小規模な自然保護区を保有することにした。

スホールパットに沿って、湿った草地の端にヤナギとハンノキを植えて、このケルケパットの目印にした。ロンデールパットに沿っては、灌木を植えた土手を形成した。この土手はふたつの林をつなぐ役目(風景の連続性の維持)を果たしているが、景観美の点から

も非常に大切な要素になっている。このふたつの道にアクセントを付けるため、その始点と終点および分岐点に孤立した背の高い樹木を植えた。現存の林では、古木や弱っている木を同じ種類の新しいものに取り替えて、その若返りを図った。ロンデルパットの最後の部分は、排水溝の一部を埋め立てて形成した。この遊歩道に隣接する土地の所有者が、自分の土地が自然保護区の一部になることを望まなかったからである。また、そうしておく、この遊歩道が自動車も通る舗装道路に接続される恐れがないからである。なお、土手を設定するには、水溜まりを形成した際に開放されたスペースが利用された。

4. コッテ・フォアーレ／スプレンケルデルパット（1995 年）

コッテ・フォアーレおよびスプレンケルデルパットという名前は土地の状態に基づくものである（フィールド・ネーム）。Kotte Voare の元の形は Korte Voorde（短い浅瀬）で、「湿地帯の一部ではあるが、歩いて渡ることができる短く、適当な（砂地の）浅い箇所」を意味している。「フォールデ」という名称はアハテルフーク地区の内外の地名によく使われている。例えば、リヒテンフォールデ、フォールデン、クーフォールデンがそうである。また、農場や牧場の名前としても色々な場所で登場し、現にファルケンスワールト（多くのハヤブサが棲む中州の意味）の南にある地区は「コルテ・フォールデン」と呼ばれている。

スプレンケルデルパットというのは“Sprenkelder”に由来する地名である。これは、「泉」を意味する“spreng”と「林」を意味する“elder”〔この言葉は Boekelder（ブーケルデル）= beukenbos（ブナ林）、Ekelder（エーケルデル）= ekenbos（オーク林）などの地名に残っている〕が結合した言葉である。従って、スプレンケルデルパットとは「小さな泉の傍の林」、つまり、オランダの方々にまだ残ってはいるが、極端に少なくなったタイプの林を意味している。このタイプの林は土地開発の対象となり、埋め立てられて完全に消滅しているところが多いが、それでもよく注意して見ると、溝の傍に往時を偲ばせる植物が残っているのが見付かる。例えば、湿地スゲがびっしり生えていたり、アネモネの群が残っていたり、オオアマナ（Star of Bethlehem）がそこそこに見られる。アハテルフークの多くの場所には丘があるが（以前は畑だった）、大抵の場合、その裾には地下水が湧き出ている。

コッテ・フォアーレは 1995 年 5 月の前半に工事が行われた。最初はよい天気だったが、次の 2 週間は冷たい風の吹く悪天候が続いた。この遊歩道が設置される区間では細かく黒い砂埃が終日舞い、そこで働くボランティアたちはみんな鉱夫のように真っ黒な顔で家路についた。この道が完成しても、暫くは大変だった。牧草の種を蒔いたところ、端の部分は数日のうちに定着し、最初の干し草作りが済む頃には、1994 年当時（牧草は植えられていなかった頃）の状態とは比べようのないほどの立派な遊歩道が出来上がった。ホルケンボルフ家の白い建物に通じている部分だけが煉瓦舗装になっているが、これはブルスヴェヒに接続するためと、隣接する農地へのトラクターが通り易くするためでもあった。フ

ルーンロのレーケルス社とロウヴマート社はこのプロジェクトの紹介スライドを見て、強
力に支援してくれるようになったが、両社に寄付してもらった煉瓦ブロックが、この区間
の舗装に使用された。この遊歩道が完成したのは1996年の初頭で、ヘンク・マソップ氏の
指揮のもとにボランティアたちが最後の煉瓦を設置したが、それは非常に寒い日のことだ
った。

コッテ・フォアーレでも、他のケルケパーデンと同じように、道筋に沿って池が設置さ
れたが、1998年の春には最初のアマガエルの鳴き声が聞こえた。我々が目指していた目的
のひとつが達成されたわけである。また、ヤナギの木を湿地の溝に沿って植えた。そして、
隣接する2軒の農家の敷地に沿って、今はあまり植えられない品種の果樹を植えた。この土地は、以前、ライ麦畑だったので、その縁に高く伸びる樹の苗を植えて、野草
の種をまいた。そうしたら、穀物畑の減少と共に姿を消していたヤマウズラ（partridge）
が、最初の夏に早速この遊歩道のすぐ傍で営巣した。

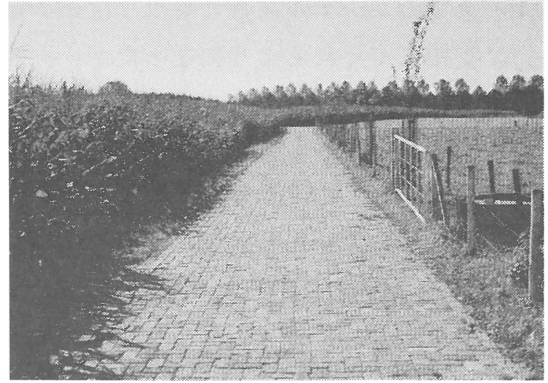
1995年6月の初めに、スプレンケルデルパットの建設がアウデ・リュールローセヴェヒ
から開始した。しかし、6月9日の週末はひどい雨で、作業を一時中止せねばならなかつ
た。でも、多くのボランティアにとっては、この建設作業で自分の家の農作業が滞ってい
たので、却って好都合であった。

6月中旬に長雨は止んだが、道の大部分がぬかるんでいて、とても作業を再開できなかつ
た。6月26日にスプレンケルデルパットの工事が再開し、7月中旬、熱帯のような暑さ
のなかで遂に作業は完了した。それにより1995年度のケルケパーデン建設予定はすべて終
了した。事務長／出納係は、1995年7月19日の理事会で下記のごとく報告した。

「我々はこれで合計4kmのケルケパーデンを造成し、今年の予定は終了した。ボラン
ティアたちは疲れており、理事会には空席ができ、新しい工事の申請期限は迫っており、
協会として検討すべき事項が山積しており、資金も底をついてきた」

スプレンケルデルパットに沿って（約2km以上、周囲がまったく遮られていない）オー
プンな場所があったので、植樹をして風景にアクセントを付けた。植えられた木や灌木
は、この環境にすべてうまく根付いてくれた。また、ハンノキの林に接して小さな池を
掘った。

コッテ・フォアーレとスプレンケルデルパットは、どちらも、以前はケルケパーデンが
通っていたルートに設置されたのであるが、この新しく設置された遊歩道の方が歴史的に
正しいルートを辿っている。



ブルスヴェヒから開始された貫通農道の建設作業。この道をコッテ・フォアーレに接続させる作業は、農作業の妨げにならないように、1996年1月の極寒のなか数日で済まされた。

当時、スプレネルデルパットはドウ・ヴォーペレイス地区からスプレネルデルカンプの丘の麓を巡り、ジウヴェント村の方向に伸びていた。その中間の部分で、スプレネルデル集落から出てくる小径が合体していた。この小径は1970年頃に土地の交換分合により消滅し（自然保護区に変わってしまった）、それ以来、スプレネルデル集落とジウヴェント村の距離はずいぶん遠くなった。そして、スプレネルデル集落からの枝道を復活させる話は交換分合によって立ち消えになってしまった。

5. ハーゼンパット（1996年）

1995年末から1996年初頭にかけて、「ジウヴェントのケルケパーデンの復活」プロジェクトの第二段階がスタートした。このプロジェクトの第一段階（1994年～1995年）には4kmが完成した後、目的の10kmの残り（6km）を向こう2年間で建設することが決定され、1997年末にはすべてを完了することにした。このプロジェクトの内部貫通道路（Binnendoor）の部分はハーゼンパットを建設すると完成する。これにより、交通安全なルートを実現する仕事の目的は達成されることになる。

1996年度の予定工事区間のなかで最も重要だったのはハッレフェルツェヴェヒからジウヴェンツェヴェヒにかけての区間で、当時はまったくアクセスのできない土地だった。全体が草原で、放牧に利用されていたにすぎなかった。広さは約80ヘクタールで、交換分合（'60年代の終わりから'70年代の始め）によりその性格は大きく変わった。また、その後も多くの樹木が消滅してしまい、ジウヴェント村の外側約500mのところにあるジウヴェンツェヴェヒ（ジウヴェント通り）を走る自動車がハッレフェルツェヴェヒ（ハッレフェルト通り）からはっきり見えた。緑といえば、村の外周縁に沿って何本かの並木が立っているだけだった。

1900年に作成された地図を見ると、ここにはブナの木とトネリコの木が混在する湿地帯になっており、ところどころに細い野道が描かれているが、それらがどのように結合して

いるかははっきりしていない。野道は丘の麓などに何本も描かれているが、それらがどこで終わっているのか、互いにどのように接続しているのか、全体の構造がこの地図では読み取れない。いくつかの丘は一部分がまだ残っているが、歴史的にどのようなプロセスを辿ってきたのか、そのパターンは判らない。この土地は大規模な放牧に利用されていたので、古い野道がケルケパーデンを設置する際にどのように利用されたか、その詳細は不明である。

小規模区画交換 (Kleine Kavelruil)

景観の復活計画も含めて、ハーゼンパットを設置するにはいくつかの区画（農地）を相互に交換分合する必要があった。最初、我々は排水路を掘削し、その片側だけに堤を作って、その上に木を植える他に、景観エレメントのためのスペースも設定したいと思った。また、A 排水路を区画の端の方に移すには、それが隣接する区画の一部を横切るように設定せねばならなかった。但し、そうするには、その少し上流に同じようなスペースを設定する必要があった。そして、新しく掘削する排水路の道筋の大部分はさらにその上流の隣接地に設定する。このようにして、排水路のためのスペースを確保した。



左に見える排水路は埋め立て、右の区画の端に沿って新しい排水路を掘削する。

このように次々と隣接する土地をずらしてスペースを設定するには費用がかかるが、その額をなるべく少なくするために、「小規模区画交換」条例を適用することにした。これは低いコストによる不動産の小規模な交換分合を促進するために制定された条例である。この交換分合は任意に基づくもので、自治体による支援を受けて、簡単な手続きで行われる。この最小限の交換分合を行うには、少なくとも3人の土地所有者の参加が必要とされる。そして、それによる不動産の交換は、原則として対価の支払いのない交換でなければならない。このアグリーメントは、これに参加する土地所有者による不動産の提供と配分、現状を示す地図、交換後の状態を示す地図の3つのコンセプトにより構成される。我々はこの件に関連して、ドゥーティンヘムにある「ヘルデルラント州土地交換促進協会」に連絡した。そこのコーディネーターの W. L. E. エンゲルベルツ氏は我々に協力することをすぐ

に承諾し、これに関係するすべての土地所有者と共に現場を視察した後、色々な手続きを取ってくれた。手数料はわずか 500 ギルダーで済んだ。

排水路の片側に植樹された堤を造成する工事

ハーゼンパットの建設とそれに伴う排水路の移転の工事は 1996 年 3 月 7 日にスタートした。最初の仕事は約 2 km に及ぶフェンスの除去だった。次に、前からあった堤の取り壊し、既存の排水路の水漏れ防止、新しい部分の掘削を行ってから、長さ 1 km 以上の傾斜区間（堤の南側）を平らにした。その間、排水路を流れる水の水位は低く、雪も雨も降らなかったのも、大いに助かった。また、泥状の土壌も楽に処理することができた。春といっても非常に寒い日が多く、日によっては午前中は地面から 5 センチ以上の深さまで凍ることがあったからである。

3 月 21 日、22 日、30 日の堤の傾斜面での植樹も楽だった。そこには、この地方で一般的な木や灌木が約 3,000 本植えられた。傾斜面の下には（平均満潮水位より下）黒ハンノキだけを植えたが、上の方にはそれに普通のトネリコやエゾノウワミズザクラ（bird cherry）も混ぜた。さらに上の方には夏オーク（summer oak）も植え、ヘルデルローズやグレー・ヤナギ、ベニバナサワギキョウ、二股または三股のサンザシ、リンボク（black thorn）、ニワトコなどの灌木を植えた。また、高く伸びるオークの木を 30 メートルおきに植えたが、それは以前は薪として利用された（低い）灌木と背の高いオークが混じるアハテルフーク地方にかつてはよく見かけられた林相を短期間に形成するためであった。昔は、これらの灌木は薪として欠かすことができず、オークは材木として、農作業用のワゴンの材料や農家の建物の建材として利用された。あちらこちらの屋敷の端に残っている古いオークの樹は、これにより周囲の景観に溶け込み、以前の景色が再現された。

いわゆる “halve houtwalbeek”（ハルヴェ・ハウトヴェルベーク、堤が片方の岸だけにあって、そこに植林されている小川）はアハテルフーク地方の東部を流れる水量の多い小川によく見かけるタイプの堤である。

このタイプの堤は保守しなくても永年にわたってよく持つので、最近ではヴィンテルヴェイク（およびリーフェルデの土地交換分合地区）を流れている小川のあちらこちらに設定されている。水の流れている部分は南側の堤と樹林で日影になるので、水草が成育しにくくなり、水流が阻害されることもない。また、この方法は科学的であり、風景美を保つためにも最適である。しかし、アハテルフークの中央部は、ジウヴェントと同じように、全体の高低差が 1 km 当たり数十センチにすぎず、川の流速も遅いので、落葉などの有機物が流れに溜まり易く、従って、そのタイプの堤を設定すると逆効果になる。短期間に枯草や枯れ枝が溜まり、水流が阻害されるのは確実である。灌木の植付けは片側の傾斜面（南側）に限定すると、排水路の清掃もし易くなる。雑草や灌木の刈り取りは片側だけをすればよいので、保守の費用も節約できる。また、そうすると、風景も我々が望むように美しく保つことができる。散策者たちも、この方が、だだっ広い、開放された平らな草原を散歩するよりも景色の変化を楽しめるだろう。

ハーゼンパットから出ている枝道は排水路に沿ってはいないが、並木道になっている。ドンデルヴィンケルの3軒の農家から出発している最初の部分に植える樹木としてはボダイジュが選ばれた。そして、この道でも一番低い部分で、住宅が途切れた区間にはヤナギが植えられた。そこから少し登り道になっている部分には黒ハンノキを植えて、そこからさらに50センチ高く登る部分にはハンノキの他に背の高くなるオークも混ぜて植えた。分岐点の水溜まり／池の傍には灌木の茂みを作った。そこから区画の端を流れる溝に沿ってヤナギを2列にして植えた。また、草原のコーナー部分には灌木を植えて、丸い地形にし、大型の収穫マシンが働き易いようにした。

池の傍には開放面を設定した。ここに設置したテーブルとベンチはこの場所のためにアンドレ・クレイン・グンネヴィーク氏が特別に設計したものである。この場所は広くて、非常に眺めがよいので、ここを本格的な休憩スペースにすることにした。テーブルとベンチは15人がゆったりと座れるので、相当大きいグループの散策者やサイクリストが利用できる。ハーゼンパットはここで分岐して、A排水路を越えている。排水路はコンクリート製の暗渠（合計しても、1,000ギルダーもかからない）を2箇所を設置することも考えられたが、この場所と水の印象を強調するために、わざわざ10倍の工費をかけて漏斗状の橋を架けることに決定した。

ハーゼンパットの工事は、期間中に雨が降らなかったもので、予定よりもずっと早く完了した。1996年4月22日に全部のルートが完成し、キリスト昇天日（イースターから40日目の木曜日）に一般に公開された。



ボランティアたちは新しい排水路の片側にだけ苗木を植えた。

6. メッラスディーク

1996年に完了した第二の区間（長さ約700メートル）は、1995年に完了したセグメントにある。すなわち、これは事実上はコッテ・フォアーレの延長部分なのである。この延長部分は部分的に植樹されていた砂道（モデルスディーク、部分的にメッラスディークと呼ばれている）に相当する。この砂道は、以前、農民がこれに接している農地との往復に利用しており、作業車を走らすには不便な道だった。しかし、この砂道には、農道としても機能するようにして、ケルケパットも設置するのに十分なスペースがあった。但し、そのためには道の中にも進入していた樹木も何本か伐採し、除去しなければならなかった。また、砂道が牧場の中に誤って進入しているところも数カ所あり、そのような箇所ではフェンスを除去して、修正する必要もあった。

1996年3月4日／5日にメッラスディークの建設で最初の作業が開始したが、それは農地の交換分合が行われた際に砂道の中に取り残された木々を除去することであった。また、年月の経過と共に並木の本が枯れてところどころに隙間が生じたので、そこには新しく植樹をして補った。その後、この遊歩道を建設する工事はハーゼンパットを仕上げるまで暫く延期された。メッラスディークの工事が再開したのは7月3日で、同月8日には残りの部分も完成した。この道の最初の部分では伝統的なタイプのサイクリング・ロードを真ん中に設置して、車道の部分と遊歩道を分離するようにした。スホッペンヴェヒとの接続部分では車道の部分とサイクリング・ロードを分離するだけのスペースがなかったので、僅かな距離（約40メートル）ではあるが、その部分を煉瓦敷きにした。また、この部分はウェーリンク家（ボスウィーフエルに住む）のガレージへの通路としても利用されている。メッラスディークは草原が開拓されたところをまっすぐに伸びている。ここにはHaviks-kruiden（Hawk's weeds）などが路肩に繁茂しており、ナナカマド、カバノキ、オークなどの樹種が多いが、それはここが痩せた砂地であることを示している。このまっすぐな道にアクセントを付けるために、全ルートを3つに分けた。第一は車道にサイクリング・ロードが併走している部分、第二は車道とは分離している部分、第三は車道と再び一緒になっている部分である。路肩にはエニシダのようにこの地方のどこにでもある一般的な樹種を植えた。

7. オッテルパット／ビンヌンカムプ（1997年）

オッテルパットはデン・オッテル農場に因んで名付けられたもので、ジウヴェントの当初は最もひどい湿地帯のひとつであったルーツラト（Roetslat）、すなわち「黒ハンノキが沢山生えている湿地」を通過している（“slat”とはこの地方の方言で「低湿地」を意味し、この地方では他の場所の地名にも登場している）。この遊歩道は低湿地を通っており、農作業に使う二輪車の轍跡の隣の溝の跡に設置されている。この溝はルーツラトの特徴あるハンノキ林を残すために埋められた。また、この遊歩道は、このような砂道のあるところ

ではそれに沿ってよく見受けられるサイクリング路によって轍跡のある部分とは分離されている。この道は林の中を歩いてルーツラトの裏に出ているが、これは散策者がこのようによく繁ったハンノキの林の内部を覗くことができるようにするためである。幅2メートルの狭い背の部分は小型機械（ボブキャット）を利用して造成したが、木は数本を伐採しただけだった。

今のところ、この道を通る人は林や湿地の中に踏み込んだり、そこここに繁茂しているイラクサに悩まされることはない。林の背後は掘削されて大きな水溜まり／池があり、湿地帯が大きく広がっている。オッテルパットの両側には以前から沢山の樹木が生い茂っている。バークセ川に沿ったところだけはシダレヤナギ（小川環境では自然に繁茂して、よく育つ）を植え、その傍に隣接の草原の縁に沿っている排水溝から移したアシを帯状に植えた。

ビンヌンカムプという名前は、低地の草原の真ん中にあり、以前は耕地として利用されていた丘に因んでいる。丘の縁は少し崩れているが、それでも周囲の野よりも高くなっている（1メートル以上盛り上がっている）、よく識別できる。ここに造成された道は、景色のよい、細長く開けた土地を折れ曲がって伸びている。単調な視界にアクセントを付けるために、あちらこちらに林を設定した。例えば、フロッベンヴェヒからの最初の数百メートルの区間では、耕地の目印としてその縁に聳えている4本のオークの太木に連続するようにサマー・オークを植えた。そして、それに続く低湿地の溝に沿ってヤナギの並木を造成した。

また、（オッテルパットの場合）ルーツラトを流れる小川には、以前はいくつかの厚板張りの橋が架かっていたが、今回も計画通りに伝統的なタイプの橋を架けた。また、この小川の両岸には農作業用の二輪車が通る小径（サイクリング・ロードがそれに沿って設定されているところもある）が通っているが、それらは厚板張りの橋で連結された。この道は大きなカーブを描いて橋を渡るようになっている。それにより生じた曲がり角には数本のオークと色々な種類の灌木を植えた。その傍は急な崖になっているが、そこを所有していた地主が丘の縁を切り崩したためである。急な崖には色々な種類の灌木が繁茂している。一番目立つのはエニシダである。約1メートルの幅で灌木が植えられているのは、農地が日陰にならないようにするためである。また、道の縁には刺のある鋭い常緑の葉を持つヒイラギが植えられているが、これは遊歩道の傍の住民のプライバシーを守る役目を果たしている。

このプロジェクトで合計4,000本以上の樹と灌木が、全道のりの約半分（5km）に植えられた。残りの半分の道のりも森や灌木の林に沿って伸びている。遊歩道／サイクリング・ロードの道路と森林や草原がうまく組み合わせられているので、それらが別々に孤立して設定されている場合よりも遙かに安定した相乗効果が生み出されている。

8. 技術的仕様

芝ブロック

草原にケルケパーデンを建設する場合、まず目的のルートの道幅の土面をそこに生えている芝（草）と共に掘り起こし、切り取った。そして、切り取った芝ブロックは、大切に持ち帰り、保管することにした。草原から持って帰った芝ブロックは翌春まで置いておかれた。作業リーダーは、この芝ブロック切り取り作業のために自分の前の雇用主（シールズ社）に交渉して、芝切り取り機をプロジェクト期間を通じて借りることに成功した。芝ブロック（150×20 センチ）は、路面を設置するために掘り下げた溝状の部分の縁を強化するのに利用した。これを遊歩道の造成に利用すると、路面が引き締まった（路面は平らになり、幅も一定した）。低地に遊歩道を造成するには、適当な高さに盛土をしなければならないが、それには水溜まりを掘った際の土を使用した。路面の下には、排水のためにPVC管を設置した。路面を高くすると、泥濘が少なくなり、冬や春の霜解けの際の轍跡が深くならないという利点があった。牧草地の縁に沿って遊歩道を設定した際には、造成に使う資材や機械を通すのに必要な作業スペースを設定するために、多くの箇所では地面に金網を敷いた。トウモロコシ畑の縁に遊歩道を造成した場合は、まだ十分に成長していないトウモロコシが生育している部分を少し削り取らねばならなかった。畑を所有している農家（複数）には、その分に対して小額の補償金（1 m²あたり 0.30 ギルダー）が支払われた。ほとんどの農民はその条件で承諾してくれた。

資 材

舗装されていないケルケパーデンの復活に当たっては、以前と異なり、一年中、いつでも通れるように地盤を補強する必要があった。以前のケルケパーデンは、そのほとんどが排水が悪く、雨や雪になるとひどい泥濘になり、暫くは自転車などはとても通れない状態になることがしばしばあった。そこで、半舗装道路の建設を手掛けている企業（例えばVRIGA社）に相談して、下記の工法を適用することに決めた。

- 基盤は約 15 センチの厚さとし、粉碎した瓦礫（0～40 mm）を敷く。
- その上に約 3 センチの厚さに粉碎した瓦礫（0～6 mm）を敷く。
- 路面には最後に約 3 センチの厚さに“Gravier d’ Or”（金の砂利）（0～6 mm）を敷く。

基盤層を設定する際は、その下に幅 1.5 メートル、深さ 15 センチのサイズで細長く掘り下げた。この溝の深さは 20 センチとし、溝の側面は予め掘り取って保存しておいた芝ブロック（厚さ約 5 センチ）で補強した。

一番上の路面層は勿論だが、それぞれの層は、設置後に振動板（バイブレータ）を当てて緊密にし、強化した。乾燥した天気が続く場合は、一番上の層には散水して、粒子同士がしっかりと結合するようにした。しかし、道が完全に使用できるようになるには、まだ数日は養生させねばならない。すなわち、最上層を石灰と炭酸カルシウムの作用で硬化さ

せるプロセスを進行させるわけである。これは可逆反応であるが、硬化層が磨耗して消滅した時には、古い最上層の上に石灰と炭酸カルシウムを再添加すると、硬化層が再形成される。仕上げには Gravier d' Or を適用して、素晴らしい半硬化層を作るので、ケルケパーデンは見た目にも美しい。これは、砕いたドロマイト石（産地はベルギー南部）と粘土を混ぜ合わせたもので、新しい砂に似ており、これによる舗装面を自転車で走るとタイヤがピシピシと鳴る。

植 樹

植樹は晩秋から初冬にかけて行われたが、遊歩道建設区間を設計する際の大切な工程のひとつである。植樹については、ほとんどの土地所有者が快諾してくれた。

植樹計画の作成に当たっては下記の点に留意した。

- 植えるのは、オランダで一般的な品種の樹木と灌木で、それもこの地方で育成された苗木だけを使用した。
- 品種の選択に当たっては、植える場所の自然環境に適しているものだけにした。
- 雑草（特に多年生の種類）は植えなかった。それらは、放置されてもその場所で種子繁殖で増えるようにする。
- 植える種類はできるだけ少なく限定する。自然に生えるものは制限しない。

植樹は、ハンス・コルクマン氏の指導でボランティアが行った。それも初冬のことが多かった。苗木には無事に生育するように添え木をした。

水溜まり（池）

ケルケパーデンに沿って存在している低地には、それぞれの土地の所有者と協議の上、水溜まりを設置したが、その数は7箇所に達した。また、その掘削で得た土は、原則として低い部分の路面の嵩上げに利用した。水溜まりの岸は、自然の持つ価値を高めるために、北側は緩い勾配（1：5）の斜面にし、両棲類や他の水生微生物が棲息し易いように日当たりよく、水が温まり易いようにし、南側の斜面はもう少しきつい勾配（1：2）にして、樹木などで日陰になるように配慮した。さらに、水溜まりは、農業に使用した水が流れ込まないように溝や排水路との連絡を絶って、閉鎖した。スプレングルデルパットでは、やはり一番低い部分に小さい水溜まりをひとつ設置した。この水溜まりは他の水溜まりと少し異なった状態に設計した。水深は（湿地植物が次第に繁茂するように配慮して）非常に浅くし、しかも常に水が全面を覆うようにした。

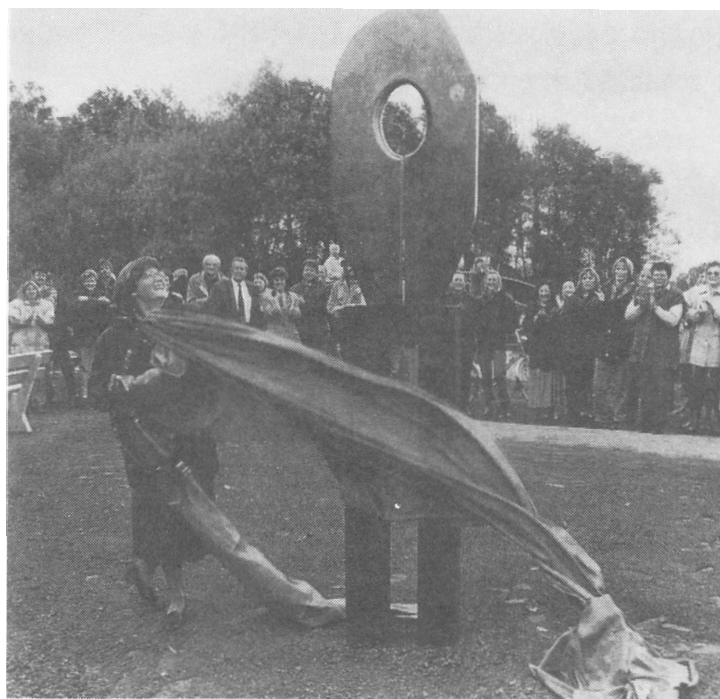
9. 芸術作品

このプロジェクトでは、「芸術作品」とはふたつの意味を有している。ひとつは橋やベンチなどの技術的装置で、もうひとつは野外彫像／彫刻を指している。この両方が我々のケ

ルケパーデンで見かけることができる。プロジェクトの初年度と2年目に、この地方の彫刻家団体（ヘリー・コルクマン氏やファン・ハルメス・ヨハン氏が所属している）野外彫刻をひとつ無料で使用してくれとの申し出があった。

1994年のことであるが、バークセ・ベーク（バークの小川）の傍の小さな土地に通行地役権が設定されることになった。その際、このケルケパーデンを利用する散策者やサイクリストたちの目を惹き、且つ我々のプロジェクトの記念にもなる彫刻でも設置して、この土地にアクセントを付けようではないかとの意見が出た。我々が彫刻家のヘリー・コルクマン氏に相談したところ、ベルギー産の石で地役権を象徴する作品を制作するとの申し出があった。そして、初年度にひと夏かけて「ビンドュール」（Binn' ndeur、ドアの内側）と名付けた高さ約3メートルの彫刻を作ってくれた。これはスホールパット／ロンデールパットのオープニングの前日に据え付けられた。除幕は、この彫刻がボランティア精神を象徴するよい作品と考えていたメヒティルト・ドゥ・ヨング国会議員が行った。

プロジェクトの第二年度（1995年）には「幸せへの門」が据え付けられた。これは「ビンドュール」と同じ彫刻家が同じスタイルで制作した彫刻である。これはコッテ・フォアーレの傍の水溜まりの中に設置された。水中にある円形の土台の中には土が詰められているので、野性の多年草が群生している。



国会議員のメヒティルト・ドゥ・ヨング女史がスホールパットのオープニング(1994年10月7日)に彫刻「ビンドュール」の除幕を行った。

小さいモニュメントの修復

コッテ・フォアーレの道の傍には十字架が立っている「ブールスプラス」と呼ばれる小さな公園があるが、ずいぶん荒れていた。今回、遊歩道の建設に関連して、ここを管理し

ているリヒテンフォールデ自治体の許可を得て、この公園と彫刻を修復することにした。十字架の土台はボランティアたちが修理し、アントーン・フムメリンク氏（スニーデスに住む）とヘリー・コルクマン氏が大理石の十字架を埋め込んだ木のモニュメントを制作して、ここに建立した。十字架の下には“Gegroet O kruis, onze enige hoop”（我々の唯一の希望、十字架に見いだされ）と記された大理石のプレートが敷かれているが、これは昔の写真に基づき作られたものである。この小さな公園に置かれているベンチと花はこの地区の住民の寄付によるものである。このように整備されたのは、このモニュメントが昔通りの姿に戻って、ジッヴェント村の老人施設から数人のお年寄りが懐かしがって、よくこの公園に来るようになったからである。この十字架は、2年前にリンヒンフォールデ自治体のモニュメント・リストに記載された。それ以来、この公園を訪れ、ここだけではなく、ケルケパーデン自体の手入れもしてくれる人が増えた。みんな、散策やサイクリングを楽しむ人々である。

10. 標識とロゴ

ハーゼンパットの工事が終了した時、ケルケパーデンを利用する方法をはっきり決めておくべきことが痛感された。理事会でも、例えば犬をどのように扱うべきかが何回か問題になった。農家のなかには、自分の農地や牧場の周辺をネット・フェンスで囲んだり、路肩に通電柵を設置して、犬が進入しないようにしているところが多かった。みんなで色々と研究し、討議した結果、ケルケパーデンで犬を同行する際は、必ず紐か鎖につなぐことを方針にすることに決めた。犬は、糞が問題になるだけではなく、放牧されている家畜を追回したり、野鳥などを脅かしたり（特に放卵している春に多い）するので、我々としては放置するわけには行かなくなった（第3章も参照のこと）。そこで、アンネリース・エプレヒトさんが協会のロゴマークと注意事項が記載された標識板を案出してくれた。我々は、それに、ケルケパーデンは私有地に設置されているので、土地所有者のプライバシーを尊重することを忘れてはならない旨のテキストも追加した。標識には、利用者の良識に期待して、警告板よりも案内板の性格を持たせた。この標識は40枚ほど製作されたが、すべてをこれで規制したわけではない。例えば、池や水溜まりで魚を取ることは禁じられていたが、その旨を記載した標識は立てられなかった。そして、1998年初めには、ケルケパーデンの設置理由とそれを利用する場合に注意すべき事項を記載したパンフレットを村の住民に配付した。

リヒテンフォールデ自治体も、“fietspad”（サイクリング・ロード）と記された交通標識をあちらこちらに設置したが、これは自治体が責任を負わないサイクリング・ロードであることを示している。つまり、ケルケパーデンの保守に重大な懈怠（例えば路面の穴）により発生した事故については、我々の協会だけが責任を負うこと、そしてモーターバイクの通行は禁止されることを意味している。

ケルケパーデンのロゴマークは、協会の公式レターにも使用されているが、ブルーは小

川に架かる橋を、黄色は路面の舗装を表している。真ん中の教会は、ケルケパーデンのどの地点からも見えるヴェーレンフリードゥス教会である。教会の下に描かれた図形は、勿論、ケルケパーデンを象徴している。同じ模様は、ドイツのザクセン地方の農家の建物の背面の切り妻部分によく見られる。



ケルケパーデンを通行する者は、私有地を通行していることをこの標識で教えられる。

第6章 管理と保守

1. 区間リーダー

スホールパット／ロンデールパットが完成した時から、ケルケパーデンをどのように管理し、その組織をどのように作るかが大きな問題になってきた。そして、この点についても歴史から多くのことを学んだ。昔は、それぞれのケルケパットはそこを一番よく利用する地区の住民が保守を担当していた。地区の住民が総出で馬車を使って砂採取場に赴き、砂（土まじりの砂が最適）を掘って、それで担当のケルケパットの路面の嵩上げや穴埋めを行った。当該地区の住民は全員がその作業に協力することが不文律であった。このようにして、保守は全員が行うことが原則で、我々もその方式を受け継ぐことにした。

ケルケパーデン全体は、いくつかの独立区間に分けて、それぞれの区間は作業リーダー（区間リーダー、ボランティア）が他の少数のボランティアを指揮して保守に当たることにした。現在、そのようなグループは5つある。彼らは、毎週一定の日に、必要な資材や機器（草刈り機、小型トラクター、エッジ・カッターおよびその他の器具）を持って集合する。また、区間リーダーたちは、自分のグループのボランティアたち、資材係、樹木診断士（tree surgeon）と共に管理委員会に参加する。これは毎年2回開催され、作業に関する問題や資材や機器の購入に関する提案が検討される。

2. ケルケパーデン管理基金

保守については、プロジェクト予算に特別な勘定項目は計上されていないが、このコストは相当な額になることは確実である。保守の品質を高いレベルで維持するには、保守作業を定期的実施する必要がある。それには、作業の一部を機械化しなければならない。1996年に、我々はケルケパーデンの保守費用としてアニエール基金から5,000ギルダールの寄付を受けた。ケルケパーデンの保守については、遊歩道そのものを1週間または2週間かけて手入れする他に、森林、水溜まり／池、土手などの景観エレメントの手入れにも相当なエネルギーを注入しなければならない。例えば、水溜まり／池の岸に繁る灌木や草の刈り取り（毎年8月）、休憩場所の除草（毎年2回）、数百本に達するヤナギの剪定（3年置き）、樹木や灌木の雪落とし（冬）、耕地や牧場から遊歩道に進入してくる雑草の除去（毎年春と秋）、果樹の手入れなど、なすべき作業は沢山ある。

協会の理事会は、プロジェクトを開始した翌年、ケルケパーデン管理基金を特別に設定することにした。我々は、この基金の金額をもっと増やして、プロジェクトの完了時（1998年末）以降は毎年の保守費用をこの基金の利息収入で賄えるようにしたいと思っている。この他にも、リヒテンフォールデ自治体が提供してくれた作業場（以前、基礎学校のDES小屋として使用されていた）の保守にかかるコストも計算にいれねばならない。また、燃料、ガソリン、潤滑油などの購入費も相当な金額になると予想されている。それに、保守

作業に従事するボランティアの人々のための雑費用および半年ごとに開催されるボランティア大会の費用も、この基金から賄うようにしなければならない。

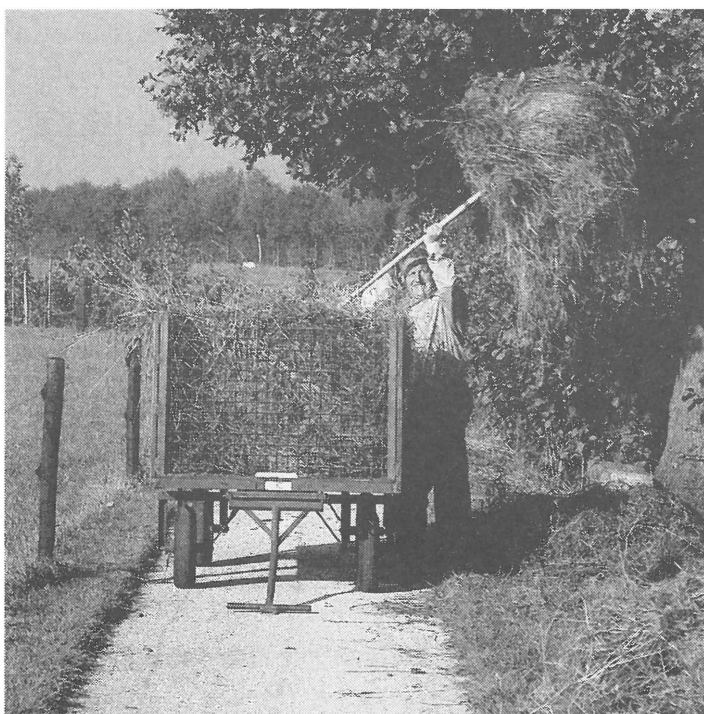
3. 刈り取りとごみの搬出

ケルケパーデン（全長 22 km）の路肩に生えている草の除去は、小型の刈り取り機で定期的に、特に春は毎週行わねばならない。また、ごみ、落ち葉、枯れ枝もまめに除去しなければならない。灌木や林の中や傍を通過する場所では、通行の邪魔になる枝は切り取る必要がある。このような作業を常に行っていないと、ケルケパーデンはすぐに荒廃するだろう。面倒なようでも、刈り取りとごみの搬出はまめに行わないと、結局は余計な手間と費用がかかることになる。

また、休憩場所や水溜まりの岸も、頻繁に手入れをしていないと、数年のうちに灌木がびっしりと繁って手がつけられなくなる。特に湿地では最初はヤナギ類、暫くするとそれにハンノキが混じってひどい状態になるのは経験から判っている。また、そうなると、木の種類も少なくなる。また、動物や昆虫の多様性や棲息場所も大幅に減少するだろう。水溜まりなどは、10 年も放置すると消滅するはずである。

ケルケパーデンの品質を高いレベルで維持し、最適の状態で管理するには、今はまだ森林や灌木林のカテゴリーには入っていないが、それらを含めてすべての土地の草木を刈り取り、剪定する必要がある。レーフン・ケンニングスストールの自然保護区（湿地マリーゴールドの自生地にする予定）の場合は、毎年夏、そしてできれば夏の終わりにもう一回除草してやると最適である。また、水溜まり／池の縁も、できれば夏の終わりに丁寧に除草すべきである。飼料用の干草作りの場合は、刈り取った草を数日間そのまま寝かせておいてから集めると、よい干草が得られる。そうすると、牧草の種子が熟して、こぼれ落ちて、翌年に発芽する。但し、刈り取った草を除去せずにいつまでも放置しておくのはいけない。病気が発生し易くなる他、オオイラクサ、シバムギ (couch grass)、エゾボウフウ (gout weed) などの生命力の強い雑草との競争に破れて、結局はそれらの少数の雑草だけが繁る野原になってしまう。従って、色々な種類の草花が生育する豊かな草原にするには、刈り取った草は直ちに除去することに決めた。しかし、この点については、いつも論議が巻き起こる。刈り取った草を搬出するのは余計な仕事で、最初はその意味を理解してくれないボランティアが多かった。

「なぜ、水利組合と同じ方法じゃだめなんだ。刈った草はそのままにしておいてもいいじゃないか。そうすると、自然に腐ってなくなるさ」。しかし、野原の植生を豊かに保つには土を痩せた状態で管理する必要のあることを反復して説明しているうちに、やがてみんなが納得してくれるようになった。水溜まりの岸の傾斜部分の除草についても、最初のうちはその効用について同じような疑問を持たれた。



刈り取った草を運び出すのは、
色々な種類の草花が生育する環境
を作りだすのに欠かすことができ
ない。

4. 多くの人手

水溜まりや干草を作る草原のような景観エレメントの保守は、ジッヴェント村の住民のうちでも、他のカテゴリーのボランティア・グループが引き受けてくれた。彼らの多くは、毎年、春になると村の周囲の林や草原から焚き火の材料を集めてイースターの焚き火台を作る若者たちだった。イースターの焚き火の材料集めにはふたつの利点がある。毎年イースターに燃やす大量の柴を集めるということは、普段から柳の枝を払い、並木の樹の枯れ枝を集め、灌木の枝払いをして、沢山の柴を作っておくことを意味する。また、草原で草を刈り、それを集めて、運び出して、蓄積するというのは重労働で、多くの若者の協力を必要とした。リーダーたちの名前を挙げると、ライモント・クレイン・ホルデヴェイク（プリンス地区）、ペーテル・フムメリンク（スティネマン地区）、フェルディ・ボスケル、ヴィヒェルト・ヴォーペレイス（フローテ・フォス地区）、ロブ・フルスホフ（ラムマス地区）、マヌス・エルスホトがいるし、その他にも経験ある水利管理者、例えば、ヤン・クレイン・ホルデヴェイク（メルデル・ヴィッレム地区）やヘンリ・トゥ・モルデル（クロムン・ボーム地区）がいる。

第7章 パブリシティ

1. 最初のプレゼンテーション

この遊歩道プロジェクトについて広く知ってもらうために、最初に完成した区間を一般の人々に披露することにした（1994年10月）。我々のプロジェクトを最初から支援してくれた国会議員のメヒティルト・ドゥ・ヨング女史も、それに参加するためにジウヴェント村にやってきた。また、このプロジェクトに関係した全員、すなわち、助成機関（国、州、地方自治体、レクリエーション団体の代表）、水利組合の代表、土地所有者、ボランティアたち、企業や地元の色々な団体・組織の代表、その他にもこのプロジェクトに何らかの面に関係した人たちを招待した。そして、オープニング・セレモニーに先立って、スポーツ会館で報告会を開いた。このプロジェクトの内容と周囲の景観の変化などをカラー・スライドを使って説明した。次に、ゲスト全員に完成した遊歩道を自転車に乗って見てもらい、次にバークセ・ベーク（バークの小川）の傍の小さな「地役権記念公園」に設置された彫刻「ビンドエール」の除幕式に立ち会ってもらった。ジウヴェント村からはこの記念ピクニックでゲストたちに乗ってもらうために新しい自転車50台が提供されていた。幸い、天気も我々に「協力」してくれた。風もほとんどなく、典型的な10月の爽やかな晴天の日だった。一同はスホールパットの入口からサイクリングを開始したが、そこで我々を驚かせたのは、ずらりと展示された基礎学校の子供たちの沢山の絵と、その傍に張られた「万歳！私たちのスホールパットができたぞ」と書かれた垂れ幕だった。除幕式参加者はそこから自転車に乗って、3kmばかり離れたところにある小さな公園に到着した。ドゥ・ヨング議員は、この地役権公園こそはジウヴェント村と彼女の住むデルフト市を結び付ける道路の起点であり、その意味で全国的に重要な価値を持っていることを強調した。スピーチは村の有志のアコーディオン演奏で締め括られた。隣の牧場の牛たちが真新しいフェンスのところに寄ってきて、我々を珍しそうに眺めていた。我々にとってもそうだったが、牛たちにとってもそれは滅多に見られない光景だった。

2. 二次的な効果と反応

このプロジェクトを実施したことは、地元にも色々な間接的効果をもたらした。そのいくつかの例を紹介しておく。

地区のつながりの強化

ケルケパーデンから少し離れた多くの場所でも、景観エレメントとグリーン・エレメントを新しく設置しようとする傾向が強くなっている。例えば、クラッペンボルフ家（イェンネケス地区）はケルケパーデン・プロジェクトの理解者で、ハーゼンパットの建設にも非常に協力してくれたが、自分でもハーゼンパットに連絡する自家用の自転車道を設置し

た。この自転車道は幅が少し狭く、路面の色も黄色ではなく赤なので、だれにでもそれが通り抜けできない特別な自転車道であることが判る。クラッペンボルフ氏は、ここに我々の道と同じようにヤナギの並木を作る予定である。

植 樹

その他にも、ジウヴェント村の端にあるスポーツ会館への約 30 メートルの小径にはオークの並木が造成され、その根元には道に沿って様々な種類の灌木が植えられている。これは、この建物の背面が真っ白で目立ちすぎると文句をいう者がいるので、それを隠すためである。この並木の造成費用は会館の所有者（ニコ・ヴェッセル氏）が負担した。但し、植樹作業は村のボランティアが行った。

水溜まり／池

ジウヴェント村の周辺にある水溜まり／池の数も増えつつある。多くの住民が魅力的なビオトープを身近に作るために、自宅の敷地に可愛らしい水溜まりを掘っている。建設会社を営んでいるロブ・ヴォペレイス氏（オルトヒュース地区）は、リュールローセヴェヒに面して新しい事務所を建設したが、その際、広い池をその敷地に造成した。

美術の道筋

1996 年 10 月、ケルケパーデンは「美術の道筋」になり、あちらこちらで美術作品が展示され、多くの人が訪れた。これはフリッツ・ブレイクフェルトとヘリー・コルクマンのふたりが企画したイベントで、ジウヴェント村の周辺の新しい風景を背景に「彫刻と風景」のタイトルのもとに彫刻作品を展示するという試みだった。ふたりはこの地方の風景を好んで描く 14 名のアーティストを選んだ。その大部分はこの地方の出身者である。アーティストたちは、自作の彫刻（合計 27 点、抽象作品が多かった）をケルケパーデンに沿って展示したが、場合によっては私有地に設置することも認められた。このイベントには、リヒテンフォールデ自治体、アニエ基金、ジウヴェント・イースター・ポップミュージック協会、アハテルフーク地方社会経済協議会、ハッレフェルト・サイクリング協会、「ヘルデルラント人」新聞およびその他の 9 つの地元企業から賛助金が寄せられた。このイベントは、1996 年 10 月 6 日にこの地方の年次恒例のカルチャー・マーケット “the Zieme Day”（ジーマ・デー、英語で表示）の一環として、リヒテンフォールデ自治体の長であるファン・レイケフォルセル氏により除幕式が行われ、観客には特別に制作された美しいカタログが配付された。また、リヒテンフォールデ在住の詩人のヤン・クロイプ氏が、その日の午後に「風景に捧げる頌歌」などの自作の詩を朗読した（第 1 章に記載）。

「美術の道筋」のイベントが開催されたのと同じ月のことであるが、ジウヴェントのケルケパーデンはワンダーフォーゲル協会の Nemo が組織した「全国の散歩道」に選ばれた。そして、1996 年 10 月 12 日～13 日には数百人の人がオランダ中から訪れて、素晴らしい秋のケルケパーデンを（ひとりで或いはグループで）散策した。村の中に設定された出発点

では我々がカラー・スライドを使って説明会を開いた。また、数人のボランティアの手によって休憩のための施設がケルケパーデンの方々に建てられた。ところが、ドゥ・ステーヘ道に沿っては、だれかがわざわざ「これは芸術ではない」と添書した、油絵に使うパレットをずらりと並べた。いずれにしても、あの年の10月はジュヴェントでは美術を巡る討議が盛んに展開され、称賛と憤慨の声が方々で聞かれた。でも、とにかく、だれでもひとつは気に入った作品があったようである。

近在の多くの基礎学校でも、子供たちが美術作品を創作し、美術鑑賞をするプロジェクトが別に企画された。「全国の散歩道」は年々ひとつの美の伝統となりつつある。

ブランチ（Brunch、朝昼兼用の食事）

1996年の仕事納め（12月20日）の日には、ベーカリー経営者のクニッペンボルフ氏および horeca（ホテル・レストラン・カフェテリア業界）のボンゲルス氏がこのプロジェクトに協力しているボランティアとその配偶者に対してジュヴェント村の活性化への努力に感謝の気持ちを表すためにブランチに招待した。ボンゲルス氏はケルケパーデンを宣伝するために色々なサイクリング・イベントも組織している。

反 響

理事会には、このプロジェクトがスタートしてから、ケルケパーデンの利用者からの経済的援助の他にも、各方面から口頭と書面による支援を受けている。

3. 周囲への影響

このプロジェクトをスタートさせた当初から、我々はプレゼンテーションに努力し、特にカラー・スライドを使った説明会を何度も行ってきた。全期間を通じて、色々なグループに対する説明会は25回を超えている。

最初のうちは、説明の重点は組織と法的なバックグラウンドに置かれていたが、そのうちにこのプロジェクトの持つ他の色々な点について説明することが多くなった。スホールパットのオープニングに関連する広報活動を展開した結果、Nemo（ワンダーフォーゲル協会）のようにレクリエーション分野の組織や周辺の自治体で同じような考えで活動している人々がケルケパーデン・プロジェクトに強い関心を寄せてくるようになった。

例えば、2年目に入ると、マリーエンフェルト自治体が同じような遊歩道ネットワークの建設を開始することを考えているという情報が伝わってきた。そこで、マリーエンフェルト自治体の関係者のためにカラー・スライドを使ってジュヴェントのケルケパーデン・プロジェクトの遂行方法について説明した。マリーエンフェルト自治体としては、自分たちの遊歩道ネットワークをジュヴェントのケルケパーデン・ネットワークに接続させたい意向であった。そこで、1997年と1998年にハッレフェルト自治体とマリーエンフェルト自治体との綿密な折衝が繰り返し行われ、計画は次第に具体化して行った。

我々のプロジェクトに対する外部の関係者の関心の高まりを示すいくつかの活動を年度順に下記に紹介しておく。

1995 年

農業・自然保護・漁業省（LNV）所属のレクリエーション協会が「自然とレクリエーションに関するケース・スタディ」と題する研究会を 1995 年 10 月 5 日に開催した。ジウヴェントでもケース・スタディのひとつが実施され、その報告書が作成された。

1996 年

- マスコミはこのプロジェクト全体について報道したが、このプロジェクトに関して一度しか行われなかった行事、例えば十字架像の再建、彫刻「幸せへの門」の設置、小川での架橋などについても色々な雑誌や日刊紙が報道してくれた。オランダのワンダーフォーゲル専門誌 “Te Voet”（トゥ・フート、「徒歩で」）などはケルケパーデンの特集を組んでくれた。また、“De Volkskrant”（ドゥ・フォルクスクラント、「国民新聞」）は 1996 年 10 月 12 日の土曜特集で、このプロジェクトを大々的に紹介してくれた。
- 1996 年 2 月 9 日には、我々は Nemo の要請でアムステルダムにおいて講演会を開いた。我々のプロジェクトに関して質疑応答が行われたが、これは非常に内容の濃いものであった。特に法律面について非常に参考になる色々なアドバイスや新しい接点を得られた。
- ドゥーティンヒュム自治体にあるスターリング研究所（地域開発に関する報告作成と研究のセンター）が「1995／1996 年度アハテルフークとリーメルス自然と風景に関する年鑑」を刊行したが、そこには我々のプロジェクトについても説明されている。1996 年 3 月 16 日にジウヴェントの「白馬亭」でその一部がドゥーティンヒュム自治体の長（フッケンス氏）に贈呈され、我々のプロジェクトに関する講演も行われた。そこにはこのプロジェクトに協力したボランティアとその配偶者たちも招かれ、ケルケパーデン協会からこの年鑑が一部ずつ贈呈された。
- 1996 年のハイライトは何とんでも「ヘルデルスの薔薇」（ヘルデルス地方景観保存協会が毎年優れた自然保護プロジェクトに贈る賞）を 10 月 19 日に我々の協会が受賞したことであろう。この授賞式にはこのプロジェクトに協力したボランティアとその配偶者たちも招かれた。ヘルデルス地方景観保存協会が我々の事業を取り上げて、特に記念賞を贈ってくれたことは素晴らしいことである。ジウヴェント村から約 50 名（！）が招待され、ランチも御馳走になった。この日、ラジオ・ヘルデルラントも、その番組「グリーンの帽子」で我々のプロジェクトを取り上げて、放送してくれた。採録はその週の初めに行われた。マスコミの注目を浴び、旬刊誌「ヘルデルス地方の景観」も特集記事を組んでくれたので、国の内外にも大きな反響を呼び、各方面から問い合わせが殺到した。

1997 年

- 協会の理事たちは 1997 年 4 月 24 日に開催されたシンポジウム「農村地帯の新しい道」に参加した。LNV 省が作成したパンフレット「農村地帯の活性化促進法」には模範例のひとつとして我々のプロジェクトが記載されている。
- 1997 年 6 月 17 日にはテレビ局から番組「地方めぐり」のためにオッテルパットの遊歩道取材に訪れ、採録して行った。好天にも恵まれ、しっかりした内容のルポルタージュが 7 月 11 日に全国に放送され、評判がよかった。
- Postcode Loterij（郵便番号籤）がリヒテンフォルデの夏期露天市で行ったビンゴゲームの収益の 60% を寄付してくれた。リヒテンフォルデの企業経営者たちがそれに補足献金をしてくれたので寄付額は 1,000 ギルダール近くに達した。これに、他の地元の企業からの寄附金も併せて、ケルケパーデン・ネットワークの見事なカラー・チャート付きのパンフレットを印刷する資金とした。このパンフレットは地元の商店や VVV（観光協会）を通じて観光客に配付される。これは、今後数年間、ジウヴェント・ケルケパーデンの案内図として使用される予定である。
- 1997 年には、LNV 省とアハテルフーク自治体の職員多数もジウヴェントのケルケパーデンを視察に訪れた。
- 1997 年 11 月 24 日には、ヘイデメイ財団から我々のプロジェクトに“Kern met Pit”賞（芯のある種／内容が充実した自然保護プロジェクトの意味）が贈られた。そして、賞金 1,000 ギルダールおよび特別賞として 1,500 ギルダールも受け取った。1998 年 2 月 28 日に、クラウス皇太子殿下から特別賞のトロフィーがジウヴェントのボランティアたちに手渡された。



クラウス皇太子殿下がボランティアたちに“Kern met Pit”
トロフィーを渡しているところ。

1998 年

- 1998 年には、ヘンリー・フォード財団から賞状と賞金 5,000 ギルダーが我々の「文化と自然の価値の回復」に貢献した業績に対して授けられた。
- この年の夏には、本書の出版とジュヴェント・プロジェクトの完了を記念したシンポジウムの開催に対して色々な自治体から協賛金が寄せられた。

第8章 評 価

市民が自分の生活形態を自分の手で決定できるかぎり、「規制を行うことだけを仕事だと思っている自治体政府はまったく不要。しかし、市民が起こすプロセスとプロジェクトに市民と平等の価値を持つ存在として行動する場合は別。すべての改革は小さいところ、僅かな規模から開始することをよく認識し、変化を恐れず、実験やイノベーションに金だけでなく、エネルギーとスペースを与えてくれる自治体政府ならば大歓迎」(1997年4月24日のシンポジウム「農村地帯での新しい道」での主張のひとつ)

1. 政治的な面

ケルケパーデンの建設復活計画は、1990年代の初め頃から各方面で盛んに言いだされた「思いやりのある社会」という政治的主張と関係している。第3次ルッベルス内閣は、国民のライフ・スタイルに対する懸念を表明し、自治体はその点についてイニシアティブを取ってもっと積極的な対策を講じるべきであるとした。それを受けて、農業専門誌「収穫」の1993年6月11日号には「農民の小径」と題して、オランダはヨーロッパでもワンダーフォーゲルやサイクリストにとって最も魅力のない国とされているとして、下記のように書いている。

「楽しみながら歩ける野道は、住宅、工場敷地、自動車道路、鉄道路線、自然保護区、ごみ処理場などの建設や拡張により年々減少する一方である。農村地帯では、例えば1972年～1986年の期間に、延べ距離7,500 kmに及ぶ野道や小径が消滅した。散策、サイクリング、乗馬などにとって非常に大切な道がなくなったのである。下院はこの点について重大な懸念を表明している」。

さらに、環境保護は政治家たちにはますます大切な課題になってきた。レクリエーションのためのスペースをもっと増やし、農地や牧場を閉鎖せず、一般人もそこを散策できるように開放すべきであるとの考えが強くなってきた。その裏には、農民が副収入を得る手段を設定すべきであるという主張が存在している。

我々がジウヴェントの周囲にケルケパーデンを設置する申請に対して LNV 省のハボル事務次官は1993年11月19日に、下記の点に特に留意すべきであると述べた。

- 農業地帯の生活様式を改善する。
- 農地や牧場を一般人に開放する。
- 農地の利用方法を多様化して、農民の収入を増やす。
- 農地の利用目的の多様化に一般人も寄与できるようにする。
- 農村地域での交通安全性を向上させる。

政府が示した上記の点については、我々のプロジェクトの色々な面で配慮されている。我々がこのプロジェクトを遂行して取得した知識やノウハウは政府がこの政策を実施する

に当たり非常に参考になるはずである。

2. 社会的な面

福祉促進への寄与

重大な交通事故は多くの家族を不幸に陥れる。ジウヴェントのような農村でも交通事故の発生は避けることができない。例えば、1992年のことであったが、自転車で登校中の学童が貫通道路で自動車にはねられて死亡した事件が発生し、村民一同が交通事故防止のためのしっかりした対策を講じる必要のあることを認識した。我々が具体的な案を作成して「ジウヴェントの利益」に提示したことが契機になって「ケルケパーデン・ジウヴェント協会」が組織され、ジウヴェント村でケルケパーデンを建設し、復活させるプロジェクトが誕生したわけである。

「このプロジェクトは、色々な面で福祉促進に寄与している。単に交通安全性の向上やサイクリングやレクリエーションの楽しさを増加するだけではなく、遊歩道の建設に携わるボランティア相互間および他の人たちとの社会的、精神的接触も増して、彼らに感謝されている。スホールパットのオープニングでメヒティルト・ドゥ・ヨング下院議員も指摘したように、見知らぬ間柄でも、散策者同士、サイクリスト同士、或いは両者の間で、遊歩道ですれ違う時、橋の傍で相手に道を譲る時、或いは道端のベンチで休憩したり、彫刻を鑑賞している時に挨拶するようになり、それも異なった世代の間でも自然になされることは、社会的に大きな意義を持つ現象である。おじいちゃんたちが力を合わせて作った道を孫たちが交通事故の心配もなく登下校に利用し、自分たちの所有地を子供たちが走り回ったりすること、そしてどちらも相手の立場や健康を気づかうようになることは素晴らしいことである・・・」(1997年7月のテレビの「地方めぐり」番組より)。

今日、農村でも自己中心的な生き方、考え方が多くなり、昔は普通だった三世同居の家庭も遠い過去の話になり、テレビ画面に厩肥や堆肥を積んだ車が繰り返し登場し、田舎暮らしの非快適性が強調されることにより都会人の心が農村からますます離れて行きつつあるが、ケルケパーデンの存在を介して農民と都会人の間、同世代および異なった世代の間に、社会的連帯感が再び強まるであろう。

ジウヴェント村の中と周辺の交通安全については、これまでもジウヴェント健康管理センターのイニシアティブで色々な措置が講じられており、一応効果は上がっている。例えば、リヒテンフォールデとリュールローの両自治体に対しては、ジウヴェント村の場合は村内の歩道にいても危険なことがあること、および村外の十字路（特にバッツダイク）では頻繁に交通事故が起きることが伝えられた。この1、2年ほどは、医療の面でも事故防止に重点が置かれている。そのための予算は充分ではないが、予防は治療に優るとの考えがみんなに浸透してきた。具体的にいうと、交通安全に万全を期すると共に、住民が適度の運動により自分の健康レベルを高めることが推奨されている。散策やサイクリングはどの年代の人にもできるし、それも自宅の周辺でできる。また、ライフ・スタイルを改善し、

運動をすることが、医学の面からも交通事故の防止に役立つことが確認されている。自治体は、最初の遊歩道が完成してからは、住民が夫婦や家族で散歩をし、サイクリング・ラリーにも参加することを推奨している。また、アハテルフーク地区アルツハイマー予防協会は、1998年9月26日の世界アルツハイマー・デーに二人乗り自転車の後ろに痴呆症の老人を乗せてケルケパーデンをサイクリングする催しを開き、注目を浴びた。

社会的な支持基盤

ジュヴェント村当局は、このプロジェクトを発足させた時から全面的に支持し、その実現のために懸命の努力を払った。協会の理事長のヨス・コルクマンは農業経営者で、「ジュヴェントの利益」の理事長でもあった。事務局長／出納係のヘラルト・モッレマンはジュヴェントで開業する医師で、多くの村人の主治医でもある。高齢者協会のメンバーであるアントン・ストルテルデルはワーヘニンゲンにあるIBN/DLOに勤務する生物学者で、豊富な経験を有する環境エコロジー専門家である。フランス・ドムホッフは「ジュヴェントの利益」のメンバーで、社会福祉局の作業リーダーとして永年勤務していたので、ボランティア活動のコーディネーターとしては打って付けの人物である。また、ヘンク・テン・ダム理事は協会の長老のひとりである。ボランティアは（第4章に紹介されたとおり）、色々な職業分野の出身者である。農業、建築業、道路建設業、園芸業、技術分野、自営業など、多様な経歴を有しており、このプロジェクトを遂行する上で貴重な人材だった。さらに、その多くは現在でも地元のジュヴェント村の色々な社会的活動に関係している。そして、その家族も含めて、このプロジェクトの重要な支持基盤を構成していた。夜になると、ボランティアが家族を作業現場に連れて来ている姿がよく見られたが、それはその日の仕事の成果を披露するためだった。

また、ボランティアのなかにはまだ現役で働いているので、自分の勤務先や職業に影響が生じるのを嫌って、自治体と接触することを控えている者も数人いた。また、グループのメンバー交代は定期的に行われたので、交際範囲が広がり、社会生活が充実したことを感謝するボランティアも多かった。ボランティア活動はリーダーのハリー・ボッケルスにより上手に統率され、相互調整された。

1997年7月に放映された「地方めぐり」の番組より

十七世紀、ジュヴェント村の農民たちはスペインの侵略軍と自国オランダの軍隊の両方に農地を荒らされて、少しは補償金が払われたとはいっても、大変な目に何回も遭われた。領主は戦費として収穫の相当部分を取り上げた。商売の方も、自由にすることはほとんどできなかった。ひと袋のライ麦を売ろうとしても、役人の許可が必要とされた。苛烈な気象条件、毎年家畜を襲う流行病、山ほどの規則や法律による束縛のため、農民たちは生きてゆくのがやっとという生活を死ぬまで続けるだけだった。真面目な農民たちがその心の奥でいつも土地とその利用方法について考えていたのは当然のことである。

ジュヴェント・ハッレフェルトでの土地の交換分合が実施されてから25年、農民たちは

やっと落ちついて自分のための農業に専念できると思っていたら、ケルケパーデン協会ができて、つぎつぎと色々な計画が打ち出された。都会の人間のために自分たちの土地に遊歩道を設定するなんて、一体、どういうことかと、疑った村人も多かった。しかし、その反対に、ジウヴェントに住むならば昔から村のために、みんなのために協力したのではないかという声も強かった。従って、最初はだれもが「万歳、ケルケパーデンができるぞ！」と単純に喜んだわけではない。「じゃ、ちょっと協力するか、村のためでもあるし」というのが本音だった。

3. 土地所有者との話し合い

我々はこのプロジェクトでかつて存在したものを復活させようとした。しかし、新しいことを始めることに恐れを抱く多くの農地所有者にとっては、それは（逆説的で、おかしいことだが）「改革」を意味し、話し合いの場で非常に警戒されたことは事実である。そこで、歴史を回顧して説明したところ、多くの場合、我々のプロジェクトの目的を理解してもらうことができた。

土地所有者との交渉では、第3章で述べたように、だれに対しても原則として同じ戦略を適用することにした。「沈黙の外交術」（訳註：当事者は交渉の結果を他に漏らさないこと）を適用したのに、場合によっては、交渉の経過が理事会に報告されるよりも早く他の土地所有者に伝わって行った。多くの土地所有者は「多分、俺たちのところにも連中が来るらしい」と、我々の来訪を待ち構えていた。そして、暫くすると、遊歩道を設定する可能性を検討するために、草原や農地に理事たちが二、三人姿を現すと同時に、噂は村中に広まった。勿論、それにより不要な誤解や反感を呼んだが、反面、村に或る意味で活気が生じたのも事実である。例えば、だれかが自分の土地の中で将来の遊歩道の予定ルートと推定されるところにわざと杭をずらりと打って、隣の土地を所有する者を慌てさせ、ペストの襲来のように大騒ぎになったこともあった。

協会の理事会は、土地所有者との交渉の内容はいつも秘密にしておくようにした。しかし、多くの方面から社会的な圧力がかかってきた。何故ならば、だれでも、（他の農家はみんな交渉を済ませているのに）自分だけが頑張っていて、土地を手放す最後の者とはなりたくなかったらしい。多くの土地所有者が、そのために眠れぬ夜を過ごしたと思う。

勿論、理事会の内部でも、これにどのように対処すべきかがいつも論議的になった。比喩的な表現ではあるが、「連中が俺のところにも買収にやってくる」という噂が、交渉の際の問題点の所在を不明瞭にして、事態をこじらせることがあるので、それは避けたかった。結局、我々は、村の周囲に安全で、魅力的なサイクリング・ロード網を形成することを目指していることははっきり打ち出すことにした。そうしたところ、遊歩道の利用者、ボランティアたち、その他の人々が我々を積極的に支援してくれたので、遊歩道設置に対する反対論（大したものではなくなっていたが）を抑えることができた。

土地の利用に反対する地主たちにどのように対処したかは、第3章に説明しておいた。

しかし、どのようなプロジェクトでも反対する者は必ずいるので、柔軟な態度と思考方法で問題の解決に当たることが大切である。我々が土地所有者との交渉にかけた時間とエネルギーは過少評価されている。性急に解決を図ることは、非協力的な反応を呼ぶことが多い。特に、プライバシー保護と将来の生活設計に関する不安を不必要に増幅させて、交渉の進展に悪影響を及ぼすことは避けられない。

4. 地役権の規制

農業・自然保護・漁業省（LNV 省）は、その政策覚書「レクリエーションの選択」の中に農業地帯の生活の質を向上させ、そのためのスペースを拡充する必要性を指摘している。また、CDA（キリスト教民主党）のメヒティルト・ドゥ・ヨング下院議員は「小径の権利」（他人の土地を通行する権利、遊歩道などを建設するための通行地役権）について言及した。同議員は、ジウヴェント村の周辺に舗装しない遊歩道を復活させる計画について説明し、当時の LNV 省の事務次官の J. D. ハボル氏にこの件について検討するように要請した。この計画には、我々がフルーンロの公証人（訳註：オランダでは司法書士の性格も持つ）の G. J. J. ステフェリンクに作成を依頼した遊歩道建設に関する新しい法的要件の適用について説明されていた。その結果、1992 年には民法の関係箇所が改正され、施行された。すなわち、民法第 5 巻の第 6 章の第 70 条～第 84 条には「地役権」に関する新しい準拠条項が定められた。新しい規定によると、承役地（通行を容認させられる土地）は必ずしも要役地（通行を要求する土地）に隣接しなくてもよくなった。このことは、要役地の所有者はオランダ国内にあるどの土地にも地役権を設定できることを意味している。極端なケースを例示すると、例えば、ジウヴェントに土地を持っている者は北部のフリースラント（北海沿岸）にある土地に必要な応じて通行権を設定することができる。

さらに、地役権者は自分の生活のために承役地を利用することが必須条件であることを立証する必要もなくなった。個人的な楽しみの追求、例えば自分のレクリエーションのための散策でも十分な理由となる。

プロジェクト領域への適用

協会が設定するすべてのケルケパーデンについて権利を確保するために、プロジェクト実施第一年目（1994 年）にバークセ・ベークに沿って僅かな土地（約 280 m²）にいわゆる地役権を設定した。この土地は全部がひとつのセクション番号で登記されていたので、地役権設定のために余分な登記手数料をかける必要はなく、その分が節約できた。

すべての遊歩道設定区間を法的に確保するために、プロジェクト期間中にすべての第三者の土地所有者に地役権が設定された。当事者（土地所有者と協会理事 2 名）の間で、まず口頭での合意の後、一応仮契約の形で標準契約が締結された。これらの仮契約（地役権売買の仮契約も含む）については、その後、リヒテンフォールデにあるパススェンス&ハルディック公証人事務所で公正証書が作成され、正式な契約になった。契約書には当該の



ジウヴェントですべての地役権を取得できる根拠となる文書に公証人のハルディック氏が署名しているところ。

区間と遊歩道の位置が明記された地図が添付された。

それぞれの遊歩道については、その完成後、その面積と位置が正式に測量され、それが存在する土地の所有者に補償がなされた。補償の支払いは、特定の土地所有者を優先的に扱っているとの疑いが生じるのを避けるために、できるだけ同時に（数日のうちに）一斉に行うようにした。

当該の土地に銀行抵当権が設定されている場合、我々の地役権設定に際しては、抵当権を変更しなくてもよいが、一応、当該銀行の同意を取り付けておく必要があるだろう。しかし、幸い、我々の場合は問題になったことは1件もなかった。抵当権設定の後、公証人のひとり、パススェンス氏が死去したので、公証人事務所はハルディック氏とヴィヒマン氏の共同経営となったが、銀行が同意してくれたことは、両氏が文書で確認した。公正証書作成の費用は、土地所有者ひとりにつき 350 ギルダーだった。その他にも、地役権取得に関連して一回払いの公証人報酬を支払った。

土地の譲渡税をどちらが負担するか、或いはどちらも負担しなくてよいのかという点について長い間ははっきりしなかったが、プロジェクト完了後には最終的な契約書が交付された。当時、財務省は免税扱いにする準備をしていたが、その時点ではどうなるか明確ではなかった。

水利税については、地役権の設定後も土地所有者が引き続き負担することになっていた。この点は地役権に関する新法では手直しされなかった。すなわち、土地所有者は地役権が設定された部分については用益権を放棄するのに、税金は依然として土地所有者が負担することになっていた。もっとも、税額は僅かで、1 m² 当たり約 0.01 ギルダーに過ぎず、すべての遊歩道とその付属部分が設置される部分の水利税は総額でも約 200 ギルダーであった。しかし、心理的には土地所有者にとって面白くないことだっただろう。

新法の長所は、土地の所有権は留保される点にあった。また、搾乳と堆肥を作る権利も

留保できることは、農家にとっては大切なことであった。

この法律がいわゆるグリーン・エレメントにも適用されることは、森林、水溜まり、休憩施設の保持または設置について自治体と農民の間に将来締結されるであろう契約に大きな影響を及ぼすであろう。しかし、建物に関しては、土地所有者が測量を行うこと、それにその全費用（安くない）を負担せねばならぬことを考慮すると、話し合いの対象にはならないと思われる。

5. 自治体との協力

ジウヴェント村の周辺にケルケパーデンを建設および復活させるには、色々な公的機関の資金援助が必要であった（LNV 省、ヘルデルラント州、リヒテンフォールデ自治体）。次に、東ヘルデルラント・レクリエーション局（現在はアハテルフーク・リーメルス・レクリエーション局に改名している）が第四の資金援助パートナーになりたいとの申し出があった。しかし、このように複数の支援パートナーが登場したことは、それらとの協議に相当の時間と費用がかかることを意味した。我々としては、その他にも多くの企業や団体や土地所有者との話し合いを平行して、上手にバランスを取って進行させねばならず、時にはちょうどサーカスの皿回しになったような気分を味わった。

リヒテンフォールデ自治体

ケルケパーデン・ジウヴェント協会、ドルプス通り 32 番地

リヒテンフォールデ自治体

我々のプロジェクトにリヒテンフォールデ自治体が強力に支援してくれたことについては、色々な箇所で触れておいた。例えば、同自治体の議会は、1994 年 6 月 2 日に向こう 5 年間に 47,500 ギルダーをプロジェクト助成金とし支出することを決めた。このことは「触媒効果」を発揮し、他のパートナーもそれをきっかけに続々と同じような申し出をしてきた。その後も、リヒテンフォールデ自治体は率先して我々のプロジェクトを援助し、資金も提供してくれた。多くの例のなかから、そのいくつかを下記に示しておく。

- 自治体の長のファン・レイスフォルセル氏は、我々のプロジェクトに関連して発生した苦情の処理や問題の解決に労を厭わず何度も仲裁に入り、見事な手腕を見せてくれた。
- 助役のステーンチェス・テイディンク氏は、プロジェクト終了までの全期間を通じて我々のプロジェクト・グループに参加し、プロジェクトの色々な面について強力にバックアップしてくれた。
- 都市計画・環境保護課（ROM）の職員は、外部地区開発計画の全面的改定に関連する規則や法令について熱心に調べてくれた。何故ならば、プロジェクトに利用されるほとんどの土地がこの開発計画に定められた「農業用地」に該当するので、すべての建設区間において市長や助役たちによる指定解除が必要とされ、そのバックアップに当

たってくれた。

新しい区間の計画の一般公開（閲覧）に際しては、その準備のために E. ケテルス氏や Ph. ドゥ・ブロイン部長と何度も協議をしてくれた。また、土地所有者のなかには自治体に執拗に不服申し立てをする人が数名いたが、その人たちとの交渉を辛抱強く行ってくれた。

また、プロジェクト期間の中程のことであるが、上記の外部地区開発計画に定められた不服申し立てができる第二の期間に関する解釈で当事者間で意見が食い違ったことがある。それは 2 件の不服申し立てに影響することであった。最終的には第 19 条の規定による手続きを適用せざるを得なくなった。その際、ROM の職員たちは我々を大いに助けてくれた。例えば不動産登記の台帳や関係地図のコピーの作成や関連する土地の所有者の特定など、手間のかかる作業を引き受けてくれた。また、テレプタ氏は、自治体の土地と民間の土地の境界線に疑義が生じた場合は、正確な境界を割り出してくれたし、S. パーペン氏は交通安全について色々なアドバイスを提供してくれた。

1998 年 6 月 4 日に自治体議会は新しい外部地区開発計画を承認したが、そのできたばかりの計画にジウヴェントのケルケパーデン・プロジェクトが正式に記載された。ところで、リヒテンフォールデ自治体では、「農業地区」の指定を受けている土地は同時に「集約的昼間レクリエーション」(intensive day-recreation) 用地にも指定されている。隣村のハッレフェルトでも、ジウヴェント村と同じように、最初にそのような指定を解除する手続きを取らなくてもよいことになった。

- すべての遊歩道の起点と終点には、自治体の手で “Fietspad” (サイクリング・ロード) の標識が掲示された。このことは、その道で起きる事故については自治体は責任を負わないことおよびモーターバイクの通行は禁止されることを意味する。
- リヒテンフォールデ自治体は、我々の協会に対して、ハーゼンパットが新しく建設されるアントーン・モッレマンホフ道と接続する場所にあつて、且つ計画の範囲内に建っている複数の住宅の間に存在する土地区画の半分を譲渡してくれた。この場所に隣接する区画が住宅建設のために譲渡される前に、我々にこの区画を譲渡してくれたことは、我々のプロジェクトにとって非常に有利なことであった。
- 遊歩道の並木を修復するための樹木の苗は、公園管理課の課長ロブ・ヴェイメル氏に相談した結果、自治体の特別なチャンネルを通じて安く発注することができた。
- スホールパットの起点にあるいわゆる DES コテージは、ケルケパーデンの保守に使用する資材の倉庫として利用されている。運河で舟をロープで曳いた仲仕たちの組合はずいぶん以前に解散していたので、この建物は自治体が管理していた。この土地は基礎学校が所有していたので、学校の理事会と話し合った結果、1998 年にはこの建物は我々の協会の所有に帰した。
- 1998 年には、自治体は昔からあったロッラスパットをそれまでの管理と整備に対して補償金を支払うことを条件に我々の協会に譲渡することに決定した。この区間は、すべてのルートをクローバーの葉の形で集中させるのに適している。この道路を取得し

たことにより、遊歩道の合計距離は 11 km に増えた。

ヘルデルラント州

ヘルデルラント州の渉外窓口は、最初はエックハルト博士で、その後任者が Dhr. エンクラー氏だった。エックハルト氏はプロジェクト・グループのリーダーを務め、我々のプロジェクトの熱心な支持者であり、我々にとって必ずしも有利でなくても、景観美を高める上では効果的な解決策をアドバイスしてくれた。同氏はプロジェクトの個々の部分にも強い関心を持っていた。定期的に現場にやって来て、工事の進行状態をみて、具体的なアドバイスをしてくれた。同氏はプロジェクトが完了しないうちに他の部門に移り、それ以後は州当局との折衝が円滑に行かなくなった。しかし、州からの資金援助は最後まで続き、赤字を補填するのに大いに役立った。

農業・自然保護・漁業省（LNV 省）

我々と LNV 省の折衝は、ハーグの Dhr. コイケン氏とファン・ベーセコム・トゥロンプ夫人およびアルンヘムの東部支所の Dhr. ファン・デン・ベルフ氏（後にデーフェンテル自治体に転勤）を窓口として行われた。

プロジェクトが開始された時点では、資金援助の割合は LNV 省が 50%、州が 30%、自治体が 10%、レクリエーション局が 10%となっていた。しかし、同省は 1994 年 6 月 7 日に予告なく突然、他の資金援助パートナーとは異なった条件を適用することを決定した。その決定の「不測事態」の箇所には、援助を 25,000 ギルダース削減し、援助期間も 5 年から 4 年に短縮する旨が記されていた。なお悪いことには、他のパートナーとの比率が当初（口頭で）約束された 50%ではなく 25%にされた。

その後、この比率の変更について協議を重ねた結果、1996 年度と 1997 年度の同省の負担額を前倒しに修正することで決着が付けられた。その後、1996 年になってプロジェクトの資金援助の方法を変更して、「農村地帯の改善と農業による自然管理のための 1 回かぎりのプロジェクトに対する資金援助規則」、いわゆる cluster III 資金の導入申請をすることに決めた。それに関連して、プロジェクトを 1997 年 7 月 1 日までに完成することや会計士による会計報告を作成することなど、色々な条件が付けられたが、その点については他のパートナーと再び協議したが、完全に調整することはできなかった。とにかく、プロジェクトの第一段階で発生した資金不足を解決することはできなかった。しかし、幸いなことに援助資金の先払いの問題はプロジェクトの最終年度に解決され、援助額も 150,000 ギルダースから 160,000 ギルダースに増額されたが、そのためにケルケパーデンの竣工が二、三ヶ月遅れた。

レクリエーション局

当初、東ヘルデルラント・レクリエーション局は、推定総工費の 10%に相当する 47,500 ギルダースの資金援助をすることを決定し、それを 1994 年度と 1995 年度の予算に組み込ん

でくれた。これはプロジェクトが実施される5年の予定期間に対応していなかったが、第一段階での資金不足構造を是正する意味で、非常に歓迎された。オッテルパットの建設の際、アハテルフーク・リーメルス（東ヘルデルラントを改称）・レクリエーション局は既存の乗馬道の土地を無料で提供してくれ、いくつかの土手についてもその建設費を負担してくれた。副局長のボーデ氏は我々のプロジェクトに非常に好意的だった。但し、局としての経費節減のために、プロジェクトの終わりの（限定的な）資金不足を助けてくれることは、残念ながらできなかった。

その他の団体や組織との協議

エイセルラント・バークセ・ベーク水利組合（後に他との合併によりレイン・エイセル水利組合に改称）とは、マルセル・ブレーメル氏を通じて頻繁に協議した。この水利組合が管轄する水路の近くで何らかの活動を行う場合は、組合の「一般規則」に基づき、その承認を得なければならない。例えば、橋や暗渠の設置、排水溝の移転、植樹、農道への遊歩道の設定などについて10件以上の申請がなされ、それが認められている。それには色々な条件が付けられているが、幸い、ケルケパーデンの建設を妨げる種類のものは見当たらない。農道への遊歩道の設定は、土地所有者が反対した場合の代替策として我々も何回か申請したことがある。水利組合としては農道をレクリエーション活動に利用することにはできるだけ協力する方針を取っているが、半舗装の小径の建設により草刈り機などの農作業車が通りにくくなるのには反対している。

ハーゼンパットの設置に際しては、排水溝の移転を許可している。但し、道の片側に長さ約600メートルの土手を築き、そこに植樹をして、いわゆる「片方の岸に木の生えた堤を持つ小川」（halve houtwalbeek）を造成することが許可の条件とされた。水利組合にとっては、ここに巨大な「仕事場」を創成することは一種の創造的な実験でもあった（第5章参照）。我々は、プロジェクト遂行の全期間を通じて、プロジェクトに関係するすべての土地の地役権の法律面についてリヒテンフォールデの公証人ハルディック氏と相談してきた。しかし、協会が取得したすべての権利は非常に多く、プロジェクトが完了するまでにそれらの登記・登録を済ませることはできなかった。

ケルケパーデン・ジウヴェント協会は税務署の登記・相続部門と話し合っ、「公益に貢献すること」により取得した所得は、将来の贈与または遺産相続に当たって非課税扱いとされるようにした。

林野庁とは、コッテ・フォアーレとオッテルパットを建設するために林野庁の土地を少し利用する件について、最初はコルデンホフ氏と、次はルティックホイス氏と話し合ったが、最終的には当地方の支局長のファン・デン・トゥヴェール氏が協力を約束してくれた。

オッテルパットが設置された場合の利害調整について、リヒテンフォールデ乗馬協会と地元の狩猟団体と友好的な雰囲気の中で何度も協議が行われた。最終的には、協会のヤン・クラッペンボルフ理事が隣接して設置された乗馬道とサイクリング・ロードの使用について双方の要望を上手にまとめてアグリーメントを作成してくれた。

以上のように、このプロジェクト期間中に行われた関係機関との交渉には膨大な時間が費やされたが、概ね満足すべき結果が得られた。この種のプロジェクトに関するかぎり、資金援助してくれる機関との交渉窓口は小さい方がよく、手間が省けると思われる。

6. 費用

最初のプロジェクト案では、サイクリング・ロードを建設した経験を持ついくつかの団体や機関に相談してから、遊歩道 1 メートル当たり 47.50 ギルダールの計算で総工費予算を組んだ。それには、多数のボランティアが協力してくれることを前提にした。つまり、10 km の長さの遊歩道を建設する場合は、475,000 ギルダールの工費がかかるものと見積もったわけである。

しかし、既に第一段階の工事（スホールパット／ロンデールパットの建設）を開始した時点で、バークセ・ベーク（小川）への架橋など、色々とかまかい付随工事を行う必要のあることが判明した。また、背後の広い農地（リュールローセ・ブルーク）を散策やサイクリングをする人々のために開放することになり、約 20,000 ギルダール余分にかかることになった。そこで、資金援助機関と相談して、この部分の 1995 年度の予算を修正することに決定した。

当初のプロジェクト予算の内訳を下記に示しておく。

地役権の取得（1 メートル当たり 10 ギルダール）	100,000 ギルダール
建設会社が担当する部分の工費	140,000 ギルダール
資材費用	120,000 ギルダール
フェンスおよび彫刻	70,000 ギルダール
公正証書作成費	7,500 ギルダール
予備費	37,500 ギルダール
合計	475,000 ギルダール

その後の年度でも、悪天候による工事の遅延、農地の排水問題、土地所有者からの追加要求など、予測していなかった事態が発生して、余分な費用がかかったことがしばしばあった。その他にも、土手や並木の修復、泥濘箇所の処理、水溜まり／池の手直しなど、補足的な工事も行わねばならなかった。また、完成した景観がプロジェクト・グループまたはそのリーダーの予測していた品質レベルに達しておらず、修正を必要としたことも稀ではなかった。

上記の予算の合計は、最終的には 545,000 ギルダールになったが、その内訳を下記に示しておく。

地役権の取得（1メートル当たり 10 ギルダー）	80,000 ギルダー
建設会社が担当する部分の工費	220,000 ギルダー
資材費用	120,000 ギルダー
フェンスおよび彫刻	80,000 ギルダー
公正証書作成費	15,000 ギルダー
予備費	30,000 ギルダー
合計	545,000 ギルダー

作業リーダーの妻（ヘッティ・ボッケルス）は、ボランティアたちのために毎日 2 回、コーヒーを沸かしたただけではなかった。彼女は、毎晩、作業グループのメンバーとその作業時間を計算し、記録せねばならなかった。作業は、原則として 9 時から 4 時半まで行われることになっていたが、昼食は各自が自宅に帰って食べ、コーヒー休みは毎日 2 回取ったので、実労時間は 5 時間（日または人によって多少の違いはある）となる。いずれにしても、ボランティアたちは長時間働いてくれた。例えば、1996 年度のヘッティの記録によると、ハーゼンパットの場合は 1,453 時間、モッラスディークの場合は 630 時間となっている。従って、その年度だけでもボランティアたちは 2,000 時間以上、このプロジェクトのために働いてくれている。ボランティアたちは、この他にも、色々な保守や修復も引受けてくれたが、これは計算に入れられていない！理事たち（勿論、全員がボランティア）の仕事、例えば関係機関や土地所有者との話し合い、遊歩道、水溜まり／池、橋およびその他の景観エレメントの設計、許認可の申請、毎日の作業のプランニング、作業区画やコースの設定、作業結果の点検、定期的な理事会の開催などに費やした作業量は、計算すると数百マンアワーに達したであろうが、これも計算には入れられていない。

ジウヴェントのケルケパーデンの建設を外部の企業に委託したと仮定すると、ボランティアたちの合計作業量は少なくとも約 10,000 マンアワーとなり、理事たち（全員がボランティア）の分は少なくとも約 3,000 マンアワーとなり、その合計は金額にして 100 万ギルダーを超えてしまう。このことは、ジウヴェントのケルケパーデンの建設工費の約 50% は行政機関が負担し、残りの半分はジウヴェント村の住民が自分たちが働くことで支払ったことを意味する。

今やケルケパーデンは立派に完成しており、残る問題はその管理と保守の費用である。その費用の一部はこの本の収益で賄われることになっている。

第9章 主たる事柄

最後に、ケルケパーデン・ジウヴェントのプロジェクトで我々が最も重要と思ったことを10項目挙げて示しておいた。

協力の精神

このプロジェクトのために、ジウヴェント村の農民たちはその土地を、ボランティアたちはその労力をそれぞれ無償で提供した。このプロジェクトが村の発展にとって絶対必要と判断したためである。昔から、ジウヴェント村は一致協力の村として知られている。

モチベーション（動機付け）

ボランティア（理事たちも含めて）・チームは、理事長などの優れた指揮能力を持つキー・パーソンズに支えられ、高度に動機付けされ、最後まで士気旺盛だった。

独創的なアイデア

周囲の支援を受ける前に、計画は綿密に仕上げられ、政府の政策や現行法に合致し、新しいプロジェクト要素を取り入れるようにしなかった。このプロジェクトの特徴は地役権に関する新しい規定が適用されたことにある。

資金面の充実

規則により、この種のプロジェクトはその開始前に資金手当が（原則として100%）なされていなければならない。十分な資金援助に加え、各方面からの寄付や賞金を得られたことにより、このプロジェクトの仕上がりは我々が予想したレベルを越えた品質を誇っている。

常に前向きな態度で対処し、終始、我々を支援してくれた自治体

このように複雑なプロジェクトを「役所仕事」に任せていたならば、完成まで遙かに多くの日数がかかったであろう。このプロジェクトがこのように効率よく、早く竣工したのは、自治体が「法規を規制の手段としてではなく、目的達成のための手段として利用した」（リヒテンフォールデ自治体長のファン・レイケフォルセル氏の言葉）ことによるものである。

資金援助者／下請け業者との綿密な接触

資金援助者／下請け業者とは常に綿密で率直な話し合いをして、彼らのプロジェクトへの関心を高め、目的達成に協力してもらうことに成功した。不測の事態が発生したり、工事が遅延したこともあったが、彼らの協力で早い段階でそれに対処し、是正し、無事に乗り切ることができた。

充実した広報活動

報告会や講演、見学会などの形で広報活動を展開することは、このプロジェクトに対する社会的支援を高め、援助資金を確保し、誤解をなくすのに非常に大切なことである。

思わぬチャンスを活用する

このように長期にわたるプロジェクトでは、その途中で、計画している機能以外の機能を強化するチャンスに遭遇することがある。我々のプロジェクトでは、モニュメントの修復や水路の位置の変更などで、そのことを経験した。

秘密の情報の適切な管理

土地所有者やその他の住民との交渉の内容が計画を発表する前に外部に漏れないように注意すべきである。

成功を祈る！

我々のプロジェクトは時機に恵まれ、関係法規が改正されたお陰で非常にスムーズに実現することができた。農地の価格も牛乳税の導入により下落したこと、および農民も都市住民も自分たちの周辺環境の改善に関心を持つようになったことも、我々に幸いした。

平成 14 年 3 月 29 日 印刷・発行

農村経済活性化プロジェクト研究資料 第 2 号

住民意思に基づく農村整備

—— オランダの事例 ——

編集発行 農林水産省 農林水産政策研究所

〒114-0024 東京都北区西ヶ原 2 丁目 2-1

電 話 東 京 (0 3) 3 9 1 0 - 3 9 4 6

FAX (0 3) 3 9 4 0 - 0 2 3 2

有限会社 ソウユー印刷